

Oracle® Server X5-4 設置ガイド

ORACLE®

Part No: E64472-01
2015 年 6 月

Part No: E64472-01

Copyright © 2015, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、Oracle Corporationおよびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはオラクル およびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に別段の定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Supportへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>)か、聴覚に障害のあるお客様は (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>)を参照してください。

目次

このドキュメントの使用法	11
Oracle X5-4 Server の機能の概要	15
サーバーの機能とコンポーネント	15
物理仕様	17
設置手順の概要	19
サーバーの設置の準備	21
▼ サーバーの『プロダクトノート』を確認する	21
サーバーの仕様およびガイドライン	21
電気仕様	22
環境要件	22
通気のガイドライン	23
出荷梱包インベントリ	24
サーバーの梱包箱	24
オプションのコンポーネント	25
必要な工具および装置	25
ESD に関する注意事項	26
フロントおよびバックパネルの機能	26
フロントパネルの機能	26
バックパネルの機能	27
▼ サーバーの検査およびオプションのコンポーネントの取り付け	28
サーバーのラックへの設置	35
安全のための注意事項	35
ラックの互換性	36
▼ 固定部品の取り付け	37
▼ スライドレール構成部品の取り付け	38

▼ スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け	41
▼ ケーブル管理アームの取り付け	44
▼ スライドレールと CMA の動作の確認	49
サーバーの配線	51
▼ サーバーのケーブル接続	51
▼ 電源コードの接続	52
スタンバイ電源モード	55
単一サーバー管理の設定	57
サーバーの管理	59
Oracle ILOM	59
Oracle ILOM のハードウェアコンポーネント	60
Oracle ILOM のインタフェースコンポーネント	60
Oracle System Assistant	61
Oracle System Assistant のハードウェアコンポーネント	62
Oracle System Assistant のインタフェースコンポーネント	62
Oracle Hardware Management Pack	63
サーバーの BIOS ブートモード	63
レガシー BIOS ブートモード	64
UEFI BIOS ブートモード	64
BIOS の追加情報	65
複数のサーバーの管理	65
Oracle ILOM への接続	67
Oracle ILOM へのログイン	67
▼ ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	68
▼ リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	68
Oracle ILOM のネットワーク設定の変更	71
Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値	71
▼ Oracle ILOM CLI からのネットワーク設定の変更	72
▼ Oracle ILOM Web インタフェースからのネットワーク設定の変更	76
Oracle ILOM のネットワーク設定のテスト	77
▼ Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト	77
▼ Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト	78

▼ Oracle ILOM の終了	79
Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定	81
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した Oracle System Assistant のリモートでの起動	81
▼ Oracle System Assistant のローカルでの起動	86
オペレーティングシステムのインストール	91
OS インストール用のサーバードライブの構成	93
ドライブ構成オプション	93
インストール済みのオペレーティングシステムの構成	94
RAID ボリュームの構成	94
▼ Oracle System Assistant を使用した RAID の構成	95
BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成	104
▼ UEFI ブートモードでの RAID の構成	105
▼ レガシーブートモードでの RAID の構成	111
オペレーティングシステムおよびドライバの設定	115
インストール済みの Oracle Solaris OS の構成	117
Oracle Solaris OS 構成ワークシート	117
▼ インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムの構成	120
Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント	122
インストール済みの Oracle Linux OS の構成	123
Oracle Linux 構成ワークシート	123
▼ インストール済みの Oracle Linux OS の構成	124
Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント	126
インストール済みの Oracle VM ソフトウェアの構成	127
インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件	127
Oracle VM 構成ワークシート	128
▼ インストール済みの Oracle VM Server の構成	129
Oracle VM のドキュメント	132
サーバーフームウェアおよびソフトウェアの入手	133

ファームウェアとソフトウェアの更新	133
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション	134
入手可能なソフトウェアリリースパッケージ	134
ファームウェアとソフトウェアへのアクセス	136
▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード	136
物理メディアのリクエスト	137
物理メディアのリクエスト用の情報を収集する	137
▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)	138
▼ 物理メディアのリクエスト (電話)	139
更新のインストール	140
ファームウェアのインストール	140
ハードウェアドライバと OS ツールのインストール	141
システム電源の制御	143
サーバーの電源投入	143
▼ 電源ボタンを使用したサーバーの電源投入	143
▼ Oracle ILOM CLI を使用したサーバーの電源投入	144
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用したサーバーの電源投入	144
正常なシャットダウンのためのサーバーの電源切断	145
▼ 電源ボタンを使用した正常なシャットダウン	146
▼ Oracle ILOM CLI を使用した正常なシャットダウン	147
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常なシャットダウン	148
即時シャットダウンのためのサーバーの電源切断	149
▼ 電源ボタンを使用した即時シャットダウン	150
▼ Oracle ILOM CLI を使用した即時シャットダウン	151
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時シャットダウン	152
設置の問題のトラブルシューティング	155
トラブルシューティングおよび診断の参考	155
技術サポート情報ワークシート	155
サーバーのシリアル番号の確認	156
サイト計画のチェックリスト	157
搬入経路およびデータセンタールームのチェックリスト	157
データセンター環境のチェックリスト	158
施設の電源のチェックリスト	159

ラックマウントのチェックリスト	159
安全性のチェックリスト	161
自動サービス・リクエストのチェックリスト	161
納入のチェックリスト	162
索引	165

このドキュメントの使用方法

このセクションでは、システムの最新のファームウェアおよびソフトウェアの入手方法、ドキュメントとフィードバック、およびドキュメントの変更履歴について説明します。

- 11 ページの「Oracle Server X5-4 モデル命名規則」
- 11 ページの「最新のファームウェアとソフトウェアの入手」
- 12 ページの「ドキュメントとフィードバック」
- 12 ページの「このドキュメントについて」
- 12 ページの「サポートとトレーニング」
- 12 ページの「寄稿者」
- 13 ページの「変更履歴」

Oracle Server X5-4 モデル命名規則

Oracle Server X5-4 という名前の意味は次のとおりです。

- X は、x86 製品であることを意味します。
- 最初の数字 5 は、サーバーの世代を意味します。
- 2 番目の数字 4 は、サーバー内のプロセッサソケットの数を意味します。

最新のファームウェアとソフトウェアの入手

各 Oracle x86 サーバー用のファームウェア、ドライバ、その他のハードウェア関連ソフトウェアは定期的に更新されます。

最新バージョンは次の方法で入手できます。

- Oracle System Assistant: 工場出荷時にインストールされる Oracle x86 サーバー向けのオプションです。これには必要なすべてのツールとドライバが含まれており、内蔵 USB フラッシュスティック上にあります。
- My Oracle Support: <https://support.oracle.com> にある Oracle サポートの Web サイトです。

- 物理メディアのリクエスト: My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストします。サポート Web サイト上の「問合せ」リンクを使用してください。

ドキュメントとフィードバック

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://docs.oracle.com/
Oracle Server X5-4	http://www.oracle.com/goto/X5-4/docs-videos
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)。『プロダクトノート』にリストされている、サポートされている Oracle ILOM のバージョンについては、このドキュメントを参照してください。	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Hardware Management Pack。『プロダクトノート』にリストされている、サポートされているバージョンのドキュメントを参照してください。	http://www.oracle.com/goto/ohmp/docs

このドキュメントについてのフィードバックは <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお寄せください。

このドキュメントについて

このドキュメントセットは、PDF および HTML の両形式で入手できます。情報はトピックに基づく形式 (オンラインヘルプと同様) で表示されるため、章、付録、およびセクション番号は含まれません。

サポートとトレーニング

次の Web サイトに追加のリソースがあります。

- サポート: <https://support.oracle.com>
- トレーニング: <http://education.oracle.com>

寄稿者

主著者: Ray Angelo、Mark McGothigan、Ralph Woodley

寄稿者: Kenny Tung、Johnny Hui、Pravall Singhal、Barry Wright、Cynthia Chin-Lee、David Savard、Tamra Smith-Wasel、Todd Creamer、William Schweickert

変更履歴

次の一覧はこのドキュメントセットのリリース履歴です。

- 2015年6月: 初版発行

Oracle X5-4 Server の機能の概要

Sun Server X5-4 は、2 または 4 プロセッサ構成内に Intel Xeon® プロセッサを搭載した 3RU ラックマウントのサーバーシステムです。システムメモリーはメモリーライザー (MR) カード上に搭載され、各カードには最大 12 枚の低電圧 DDR3 DIMM を搭載できます。このサーバーは、最大 8 枚の MR カードをサポートできます (4 CPU システムの場合)。サーバーには冗長ホットプラグ対応電源装置が 2 台搭載されており、PCI-Express Gen 3 ロープロファイルカードを最大 11 枚収容できるスロット容量があります。内蔵 HBA カードは、3 つのストレージドライブテクノロジーをサポートする 6 つの SAS-3 ドライブスロットへの接続を提供します。

詳細は、次を参照してください。

- [15 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」](#)
- [17 ページの「物理仕様」](#)

サーバーの機能とコンポーネント

このセクションでは、サーバーの機能とサポートされるコンポーネントについて説明します。

コンポーネント	Oracle Server X5-4
プロセッサ (CPU)	サポートされるモデル: Intel Xeon® E7-8895 v3 プロセッサ 18 コア 2.6 GHz プロセッサ (3RU ヒートシンク付き) サポートされる構成: <ul style="list-style-type: none">■ ソケット 0 および 1 に取り付けられた 2 つのプロセッサ。■ ソケット 0 から 3 に取り付けられた 4 つのプロセッサ。
メモリー	サーバーシャーシでは、最大 8 枚のメモリーライザーカード (CPU あたり 2 枚のライザー) がサポートされます。各メモリーライザーは、最大 12 枚の DDR3-1600 レジスタ付き ECC 低電圧またはロードリデュースト DIMM をサポートし、プロセッサあたり最大 24 枚の DIMM が可能です。取り付ける DIMM は同じ種類で、同サイズである必要があります。 <ul style="list-style-type: none">■ 2 CPU システムでは、4 枚のメモリーライザーカードおよび最大 1.5T バイトのシステムメモリーを取り付けることができます。

コンポーネント	Oracle Server X5-4
ストレージデバイス	<ul style="list-style-type: none"> ■ 4 CPU システムでは、8 枚のメモリーライザーカードおよび最大 3T バイトのシステムメモリーを取り付けることができます。 <p>DIMM 配置規則およびサポートされる構成については、サービスマニュアルを参照してください。</p> <p>内部ストレージの場合、サーバーシャーシは次を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ サーバーの前面からアクセスできる 6 個の 2.5 インチドライブベイ。サポートされるストレージドライブテクノロジーには、次のものがあります。 <p>注記 - サポートされるドライブの一覧については、『Oracle Server X5-4 Product Notes』を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SAS-3 HDD ■ SAS-3 SSD ■ PCIe Gen 3 NVMe <ul style="list-style-type: none"> ■ SAS-3 HBA PCIe カードオプション: <ul style="list-style-type: none"> ■ Sun Storage 12 Gb SAS PCIe RAID HBA。サポートされる RAID レベル: 0、1、1E、10、5、5EE、6。Battery Backed Write Cache (BBWC) を含む。 ■ PCIe スイッチカード。NVMe テクノロジーに必要です。 ■ サーバーの前面のドライブベイの下に設置される、オプションの DVD+/-RW ドライブ。この SATA DVD ドライブは USB-SATA ブリッジに接続されるため、このドライブはシステムには USB ストレージデバイスとして認識されます。
USB 2.0 ポート (6)	<ul style="list-style-type: none"> ■ サーバーの前面に 2 つのポート ■ サーバーの背面に 2 つのポート ■ マザーボードに 2 つの内蔵ポート <p>注記 - 内蔵 USB ポート (P0) のいずれかには、工場出荷時に取り付けられるオプションの Oracle System Assistant フラッシュドライブ (サーバーの設定に使用される専用のブートデバイス) が搭載されていることがあります。Oracle System Assistant USB フラッシュドライブは、ストレージドライブではありません。これには、Oracle System Assistant に固有のファイルのみが含まれている必要があります。</p>
VGA ポート	<p>システムの前面と背面に 1 つずつ、2 つの高密度 DB-15 ビデオポートが使用可能です。サーバーには、最大 1600 x 1200 x 16 ビット @ 60Hz (Oracle ILOM リモートコンソールプラス RKVMS を使用してリモートで表示した場合は 1024 x 768) の解像度をサポートする VGA 2D グラフィックコントローラ (8M バイトのキャッシュを含む) が組み込まれています。</p> <p>注記 - バックパネルで使用できる VGA ポートは、モニター認識用の VESA デバイスデータチャンネルをサポートしています。</p>
PCI Express 3.0 I/O スロット	<p>ロープロファイルの PCIe カードを収容できる 11 個の PCI Express 3.0 スロット。SAS HBA カードを含む構成では、HBA カードはスロット 2 に取り付けられます。すべてのスロットが x8 PCIe 接続をサポートします。2 つのスロットは x16 PCIe カードもサポートしています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ スロット 1-7、9、および 10: x8 コネクタ ■ スロット 8 および 11: x8 または x16 コネクタ

コンポーネント	Oracle Server X5-4
	注記 - PCIe スロット 7-11 は 4 CPU システムでのみ機能します。
PCI Express I/O カード	お客様が注文できる I/O カードの一覧については、Oracle x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Oracle Server X5-4 のページを参照してください。 https://wikis.oracle.com/display/SystemsComm/Systems+Options+and+Downloads
Ethernet ポート	バックパネルの 4 つの 10 GbE RJ-45 Ethernet ポート。
サービスプロセッサ	Emulex Pilot 3 ベースボード管理コントローラ (BMC): <ul style="list-style-type: none"> ■ ドーターボードに装着されています。 ■ 業界標準の IPMI 機能セットをサポートします。 ■ IP を介した KVMs、USB、DVD、CD、フロッピー、および ISO イメージのリモート制御をサポートします。 ■ 専用の RJ-45 ギガビット Ethernet (10/100/1000) 管理ポートおよびオプションでホストの 10 GbE ポート (サイドバンド管理) のいずれかを使用した SP への Ethernet アクセスをサポートします。
電源装置	2 台の 1030/2060 ワット AC 入力オートレンジホットスワップ可能電源装置。 注記 - 2 CPU システムは、低電圧線 100 - 127 VAC または高電圧線 200 - 240 VAC 電源で動作できます。4 CPU システムは、高電圧線 200 - 240 VAC 電源でのみ動作できません。
冷却ファン	各電源装置内の 6 個のホットスワップ可能、冗長、前面、上部搭載ファン (冷却ゾーン 0-2) および 2 個の冗長ファン (冷却ゾーン 3)。
サーバー管理ソフトウェア	次のサーバー管理ソフトウェアオプションが使用できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 単一サーバー管理オプション: <ul style="list-style-type: none"> ■ サービスプロセッサ上の Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)。 ■ オプションの内蔵 USB フラッシュドライブ上の Oracle System Assistant (OSA)。 ■ オプションの OSA 内蔵 USB フラッシュドライブ上の Oracle Hardware Management Pack。 ■ 複数サーバーオプション: Oracle サイトからダウンロード可能な Oracle Enterprise Management Ops Center。

物理仕様

次の表に、Oracle Server X5-4 の物理仕様の一覧を示します。

パラメータ	値
高さ	129.9 mm (5.1 インチ)
幅	436.5 mm (17.2 インチ)
奥行	732 mm (28.8 インチ)
重量	752.35 mm (29.6 インチ) (PSU イジェクタを含む) 40 kg (88 ポンド)

設置手順の概要

このドキュメントでは、最初の電源投入とオペレーティングシステムのインストールまでの Oracle Server X5-4 の初期設定と構成について説明します。次の表は、サーバーを正しく設置するために実行する必要があるタスクの順序付きリストを示しています。

手順	説明	リンク
1	設置の準備をします。	21 ページの「サーバーの設置の準備」
2	サーバーをラックに設置します。	35 ページの「サーバーのラックへの設置」
3	データケーブルと電源コードをサーバーに接続します。	51 ページの「サーバーの配線」
4	サーバー管理ツールを使用してサーバーを設定します。	57 ページの「単一サーバー管理の設定」
5	オペレーティングシステムを構成またはインストールします。	91 ページの「オペレーティングシステムのインストール」
6	サーバーファームウェアおよびソフトウェアの更新を入手する手順を確認します。	133 ページの「サーバーファームウェアおよびソフトウェアの入手」
7	システム電源を制御する手順を確認します。	143 ページの「システム電源の制御」
8	必要な場合は、インストールの問題をトラブルシューティングします。	155 ページの「設置の問題のトラブルシューティング」

サーバーの設置の準備

このセクションでは、サーバーをラックに設置する前に把握しておく必要のある情報について説明します。

説明	リンク
サーバーハードウェア、ファームウェア、およびソフトウェアに関する発表や最新情報を確認します。	21 ページの「サーバーの『プロダクトノート』を確認する」
サーバーを受け入れる前に、サーバーの仕様およびガイドラインを確認し、サイトを準備します。	21 ページの「サーバーの仕様およびガイドライン」
サーバーの梱包を検査し、サーバーの梱包を解き、梱包キットの内容のインベントリを作成します。	24 ページの「出荷梱包インベントリ」
設置に必要な工具を組み立てます。	25 ページの「必要な工具および装置」
ESD の要件を確認し、安全のための注意事項を守ります。	26 ページの「ESD に関する注意事項」
サーバーを検査し、オプションのコンポーネントをすべて取り付けます。	28 ページの「サーバーの検査およびオプションのコンポーネントの取り付け」

▼ サーバーの『プロダクトノート』を確認する

サーバーの『プロダクトノート』ドキュメントには、ハードウェア、ファームウェア、およびソフトウェアに関する最新の問題、回避方法、発表を含む、サーバーに関する重要な情報が含まれています。

- 『Oracle Server X5-4 プロダクトノート』を確認します。
『プロダクトノート』は、<http://www.oracle.com/goto/x5-4/docs-videos>にあるサーバードキュメントライブラリに公開されます。

サーバーの仕様およびガイドライン

Oracle Server X5-4 を引き渡す前に、サーバーのサイトが次の仕様およびガイドラインを満たしていることを確認してください。

- 22 ページの「電気仕様」
- 22 ページの「環境要件」
- 23 ページの「通気のガイドライン」

注記 - サーバーの物理仕様については、17 ページの「物理仕様」を参照してください。

電気仕様

次の表に、Oracle Server X5-4 の電気仕様の一覧を示します。

注記 - 消費電力に関する最新情報については、Oracle x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Oracle Server X5-4 のページ (<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html>) を参照してください。

パラメータ	値
公称入力周波数	50/60 Hz
動作入力電圧範囲	100-127 VAC (2 CPU 構成) 200-240 VAC (2 または 4 CPU 構成)
定格入力電流	100-127 VAC 12A 200-240 VAC 10A
最大消費電力	2000W
最大熱出力	6824 BTU/時

環境要件

次の表に、Oracle Server X5-4 の環境要件の一覧を示します。

パラメータ	値
動作温度 (単一のラック以外のシステム)	海拔ゼロで 5° C - 35° C (41° F - 95° F) 海拔ゼロで 5° C - 31° C (41° F - 88° F)
非動作時温度 (単一のラック以外のシステム)	-40° C - 68° C (-40° F - 154° F)
動作湿度 (単一のラック以外のシステム)	10 - 90% の相対湿度、結露なし
非動作時湿度 (単一のラック以外のシステム)	最大 93% の相対湿度、結露なし

パラメータ	値
動作高度 (単一のラック以外のシステム)	最高 3,000 m (9,840 フィート)、高度 900 m 以上では 300 m 上昇するたびに最高周囲温度が摂氏 1 度低下。最大高度 2000 m への設置が規制されている中国市場を除く。
非動作時高度 (単一のラック以外のシステム)	0 m - 12,000 m (0 フィート - 40,000 フィート)
音響ノイズ	LwAd: 8.9 B (アイドル時および動作中、室温)、8.9 B (最大周囲)、LpAm: 75 dBA (傍観者の位置、最大周囲)

通気のガイドライン

Oracle Server X5-4 は、自然対流のエアフロー内に設置された場合に機能するように設計されています。次の環境仕様が満たされている必要があります。

- サーバーの吸気口がラックの前面に、排気口がラックの背面に存在していることを確認します。
ラックマウントサーバー (Oracle Server X5-4 を含む) は、サーバーの前面から冷たい空気を取り込み、サーバーの背面から暖かい空気を排出します。
- サーバー内に十分なエアフローがあることを確認します。
 - サーバーの前面に 1,232 mm (48.5 インチ) 以上、サーバーの背面に 914 mm (36 インチ) 以上の隙間を確保します。
この隙間により、吸気および排気面にエアフローと通気のスペースが確保されます。
 - サーバーの吸気および排気の両方に使用されるキャビネットドアなどの通気口が塞がれていないことを確認してください。
たとえば、Oracle の Sun Rack II は冷却に最適化されています。前面ドアと背面ドアの穿孔はどちらも 80% であるため、高レベルのエアフローを実現できます。これらの穿孔が塞がれていないことを確認してください。
- サーバーを取り付ける際は、サーバーの前面に 2.5 mm (1 インチ) 以上、サーバーの背面に 80 mm (3.15 インチ) 以上のスペースが必要です。
これらのスペースの値は、ここに示す吸気および排気のインピーダンス (使用可能な開口部) に基づいたもので、開口部が吸気および排気面に均一に分散していると仮定しています。これらの値により冷却パフォーマンスも向上します。

注記 - キャビネットドアやドアからサーバーまでのスペースなど、吸気および排気に関する制限の組み合わせは、サーバーの冷却パフォーマンスに影響を与える可能性があります。これらの制限を評価する必要があります。サーバーの配置は高温の環境で特に重要です。

- サーバシャーシ内部の通気が妨げられていないことを確認してください。
 サーバーは、合計 100 CFM の通気を達成できる内蔵送風機を使用します。サーバーの通気は安定していて、かつ直接的である必要があります。サーバー内部の通気の混乱は、吸気口や排気口の埃やごみによる詰まり、エアバッフルや仕切りなどの取り付け不良のコンポーネント、およびサーバーの内部と外部の両方でのケーブルの誤った配線によって発生する場合があります。
- サーバーを通過する空気の温度は 68°F (20°C) を超えないようにしてください。
- ラックまたはキャビネット内で排気が再循環しないように考慮してください。
- サーバーの排気口の妨げにならないように、ケーブルをまとめてください。

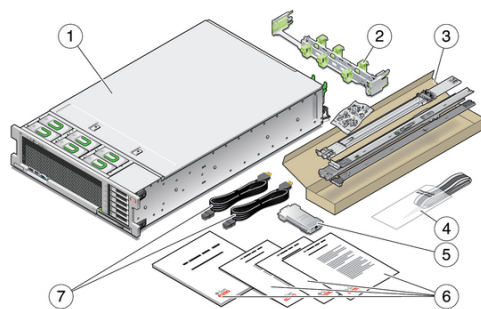
出荷梱包インベントリ

サーバーおよびオプションのコンポーネントが到着したら、出荷用梱包箱に物理的な損傷の形跡がないかどうか検査します。梱包箱が破損している場合は、破損した梱包箱を開けるときに運送業者の立ち会いを要求してください。業者が検査できるように、箱の中身と梱包材はすべて保管しておいてください。

- [24 ページの「サーバーの梱包箱」](#)
- [25 ページの「オプションのコンポーネント」](#)

サーバーの梱包箱

次の図は、Oracle Server X5-4 に通常同梱されているアイテムを示しています。



吹き出し番号	説明	吹き出し番号	説明
1	サーバー	5	RJ-45 から DB-9 へのクロスアダプタ

吹き出し番号	説明	吹き出し番号	説明
2	ケーブル管理部品	6	印刷版ドキュメント
3	ラックマウントキット	7	AC 電源コード 2 本
4	静電気防止用リストストラップ		

オプションのコンポーネント

標準のサーバー構成の一部であるコンポーネントは、工場出荷時にサーバーに取り付けられます。ただし、標準構成には関係なく購入したオプションのコンポーネントは、工場出荷時には取り付けられないため、取り付ける必要があります。これらのコンポーネントは、個別に出荷されることがあります。

次のオプションのコンポーネントは、個別に注文および購入できます。

- PCIe カード
- DDR3 DIMM メモリーキット
- ストレージドライブ
- ソフトウェアメディア

注記 - 可能な場合は、サーバーをラックに設置する前にオプションのコンポーネントを取り付けます。サーバーオプションを取り付ける手順については、[28 ページの「サーバーの検査およびオプションのコンポーネントの取り付け」](#)を参照してください。

必要な工具および装置

システムを設置するには、次の工具が必要です。

- 250 ポンドを持ち上げることができる機械装置。
- プラスのねじ回し (Phillips の 2 番)
- ESD マットおよび接地ストラップ
- 次のいずれかのようなシステムコンソールデバイス:
 - ワークステーション
 - ASCII 端末
 - 端末サーバー

- 端末サーバーに接続されたパッチパネル
- 次のデバイス:
 - VGA モニター
 - USB キーボード
 - USB マウス

ESD に関する注意事項

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置またはサービス時は、接地された静電気防止用リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電気による損傷 (ESD) を防止します。



注意 - 装置の損傷。電子部品が静電気によって損傷すると、システムが永久に使用できなくなるか、公認の保守技術者による修復が必要になることがあります。電子部品を静電気による損傷から保護するため、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面に部品を置いてください。システムコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電防止用アースストラップを着用してください。

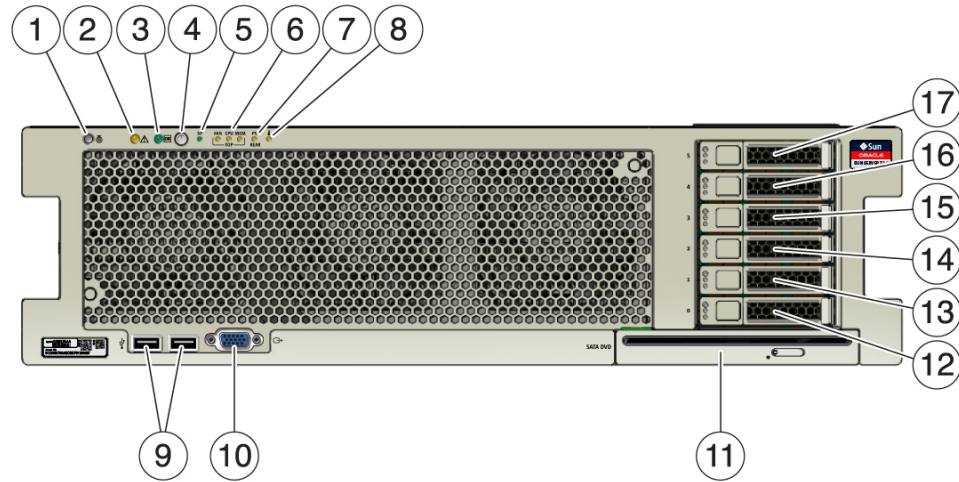
フロントおよびバックパネルの機能

次の各セクションでは、サーバーのフロントおよびバックパネルの機能について説明します。

- [26 ページの「フロントパネルの機能」](#)
- [27 ページの「バックパネルの機能」](#)

フロントパネルの機能

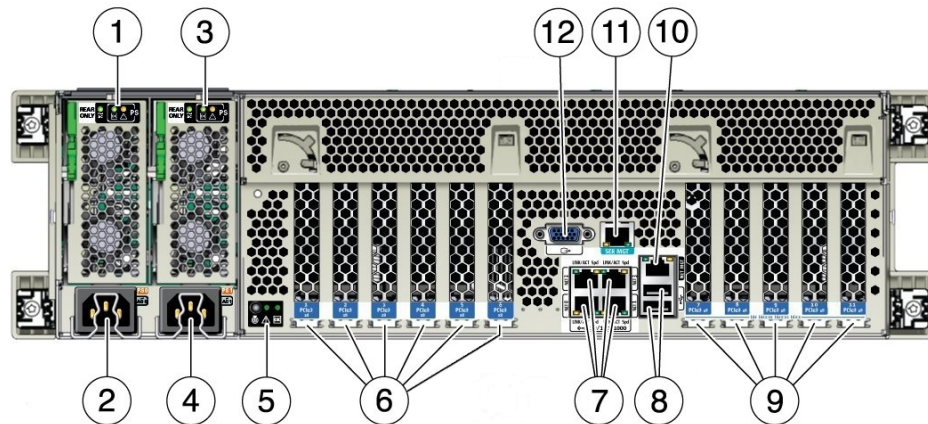
次の図は Oracle Server X5-4 のフロントパネルを示し、そのコンポーネントについて説明しています。



吹き出し番号	説明
1	ロケータインジケータ/ボタン: 白色
2	保守要求インジケータ: オレンジ色
3	電源/OK インジケータ: 緑色
4	電源ボタン
5	SP OK/障害インジケータ: 緑色/オレンジ色
6	ファンモジュール (FAN)、プロセッサ (CPU)、およびメモリーの保守要求インジケータ (3): オレンジ色
7	電源装置 (PS) の障害 (保守要求) インジケータ: オレンジ色
8	過熱警告インジケータ: オレンジ色
9	USB 2.0 ポート (2)
10	DB-15 ビデオポート
11	SATA DVD ドライブ (オプション)
12-17	ストレージドライブスロット 0-5 (下から上)

バックパネルの機能

次の図は Oracle Server X5-4 のバックパネルを示し、そのコンポーネントについて説明しています。

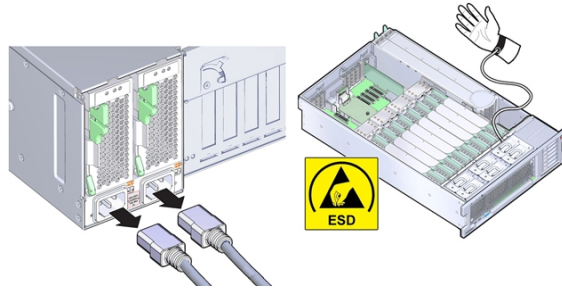


吹き出し番号	説明
1	電源ユニット (PSU) 0 インジケータパネル
2	PSU 0 AC 差し込み口
3	PSU 1 インジケータパネル
4	PSU 1 AC 差し込み口
5	システムステータスインジケータパネル
6	PCIe カードスロット 1 - 6
7	ネットワーク (NET) 10 GbE ポート: NET0-NET3
8	USB 2.0 ポート (2)
9	PCIe カードスロット 7 - 11
10	サービスプロセッサ (SP) ネットワーク管理 (NET MGT) ポート
11	シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート
12	DB-15 ビデオポート

▼ サーバーの検査およびオプションのコンポーネントの取り付け



注意 - 電氣的障害。サーバーが電源から切断されていることを確認してください。



注意 - コンポーネントが損傷します。サーバーには、静電放電に弱いコンポーネントが含まれています。サーバーの内部で作業するときは、静電気防止用リストストラップを着用し、静電気防止用マットを使用してください。

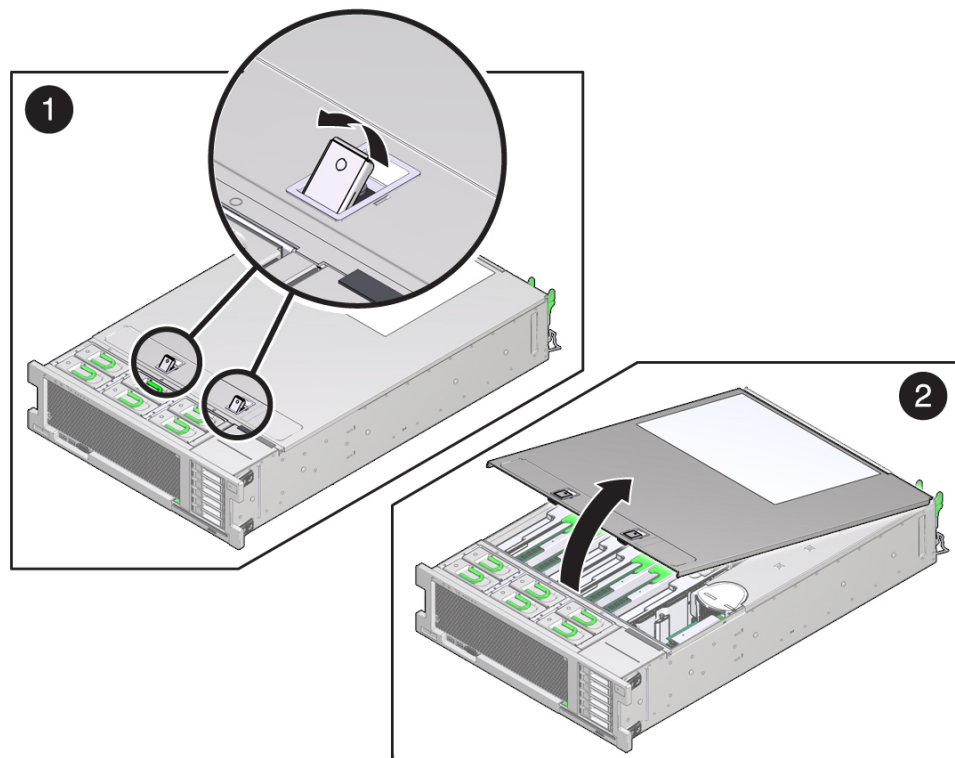
サーバーをラックに設置する前に、サーバーの内部を検査し、オプションのコンポーネントを取り付けます。

始める前に

- [26 ページの「フロントおよびバックパネルの機能」](#)を参照してください。
- [26 ページの「ESD に関する注意事項」](#)を参照してください。
- [25 ページの「必要な工具および装置」](#)を参照してください。

1. サーバーが電源から切断されていることを確認してください。
2. 接地された表面に固定された静電気防止用リストストラップを使用します。
3. サーバーの上部カバーを取り外します。
 - a. カバーの上部にある 2 つのばね付きラッチを完全に開いた位置まで持ち上げ、カバーの前側の端を引き上げます。

次の図では、フレーム 1 が完全に開いた位置まで持ち上げられた 2 つのばね付きラッチを示し、フレーム 2 が引き上げられてサーバーから取り外されるカバーを示しています。



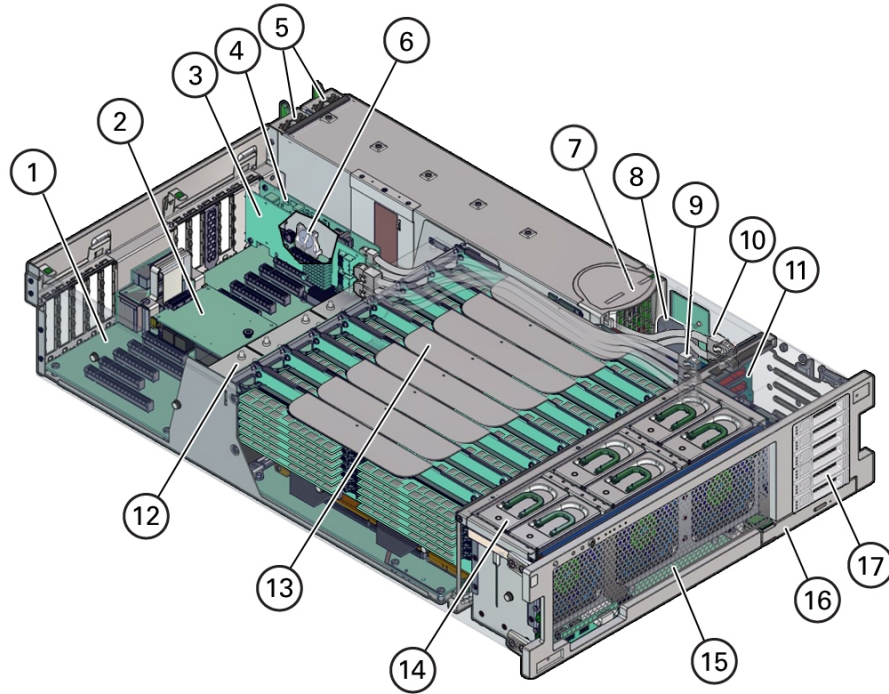
b. カバーをサーバーから取り外して置いておきます。



注意 - コンポーネントが損傷します。サーバーカバーの下面にインターロックスイッチコンポーネントが接続されています。このコンポーネントを破損しないように注意してください。

- すべての交換可能コンポーネントおよびケーブルコネクタが固定され、所定の位置にロックされていることを確認します。必要に応じて、コンポーネントを装着し直します (取り外して取り付けます)。
コンポーネントの取り外しおよび取り付け手順については、サーバーの上部カバーにある保守ラベル、または『[Oracle Server X5-4 Service Manual](#)』にあるコンポーネントの取り外しおよび交換手順を参照してください。

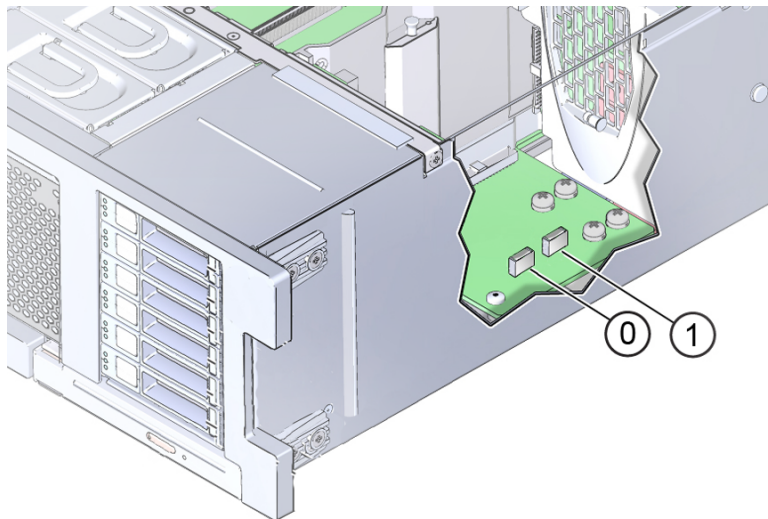
次の図は、交換可能コンポーネントの位置を示しています。



吹き出し	説明	吹き出し	説明
1	マザーボード	10	HBA SAS ケーブル (2)
2	SP カード	11	ストレージドライブバックプレーンボード
3	HBA カード	12	ヒートシンクおよび CPU (2 または 4)
4	PCIe NVMe スイッチカード	13	メモリーライザーカード (4 または 8)
5	電源装置 (2)	14	ファンモジュール (6)
6	システムバッテリー	15	ファンボード
7	電源バックプレーン	16	DVD ドライブ
8	ESM	17	ストレージドライブスロット (6)
9	NVMe ケーブル (4)		

5. Oracle System Assistant USB フラッシュドライブが取り付けられていることを確認します。

Oracle System Assistant を注文した場合は、専用の USB フラッシュドライブが内蔵 USB ポート (P0) に取り付けられていることを確認してください。次の図は、ストレージドライブの背後にある 2 つの内蔵 USB ポートを示しています。USB ポート P0 は USB ポート P1 の横にあります、サーバーの前面に近い方です。



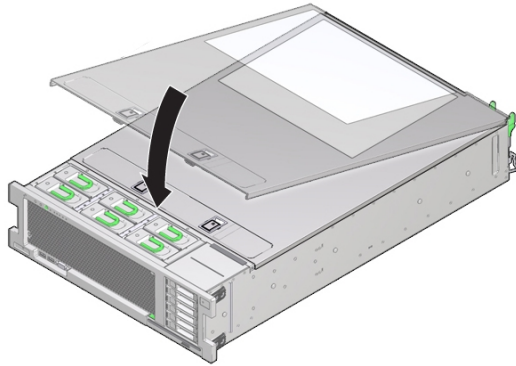
6. オプションのコンポーネントを取り付けます。

個別に出荷された可能性のあるオプションのコンポーネントをすべて取り付けます。オプションのコンポーネントには、次のものがあります。

- PCIe カード
- DDR3 DIMM メモリーキット
- ストレージドライブ

オプションのコンポーネントを取り付けるには、サーバーの上部カバーにある保守ラベル、または『[Oracle Server X5-4 Service Manual](#)』にあるコンポーネントの取り外しおよび交換手順を参照してください。

7. サーバーカバーを取り付けます。



- a. カバーをサーバーの上部に合わせ、カバーの後側の端がサーバーの背面の端にあるリップの下に固定されたことを確認します。
 - b. カバーの前側の端をカバーがサーバー上で水平になるまで下げます。
 - c. 前側の端をラッチがカチッと音がして固定されるまで押し下げます。
8. カバーがロックされていることを確認します。

サーバーのラックへの設置

このセクションでは、ラックマウントキットのレール構成部品を使用して、サーバーをラック内に取り付ける方法について説明します。レール構成部品を購入した場合は、この手順を実行します。

説明	リンク
安全上の注意事項を確認します。	35 ページの「安全のための注意事項」
ラックの互換性要件を確認します。	36 ページの「ラックの互換性」
サーバーに固定部品を取り付けます。	37 ページの「固定部品の取り付け」
工具不要のスライドレール構成部品をラックに取り付けます。	38 ページの「スライドレール構成部品の取り付け」
サーバーをスライドレール構成部品に取り付けます。	41 ページの「スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け」
(オプション) サーバーケーブルを引き回すためのケーブル管理アームを装着します。	44 ページの「ケーブル管理アームの取り付け」
スライドレールとケーブル管理アームが正しく機能することを確認します。	49 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」

安全のための注意事項

このセクションでは、サーバーをラックに設置するときに従う必要のある安全のための注意事項について説明します。



注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。機器の設置中にラックが倒れないように、ラックの転倒防止バーを配備してください。



注意 - 動作時周辺温度の上昇。密閉されたラックアセンブリまたはマルチユニットのラックアセンブリにサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内の周辺温度より高くなる場合があります。したがって、サーバーに対して指定されている最大周辺温度 (Tma) に適した環境に装置を設置することを検討するようにしてください。サーバーの環境要件については、[22 ページの「環境要件」](#)を参照してください。



注意 - 通気の減少。装置をラック内に設置する際に、装置の安全な動作に必要な通気が妨げられないようにしてください。



注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。ラックに機器を取り付ける場合、機械的加重が不均一なために危険な状態になることがないようにしてください。



注意 - 回路の過電流。電源回路への装置の接続、および回路の過負荷によって発生する可能性のある過電流対策や電源配線についても考慮するようにしてください。これについて対処するときは、装置のネームプレートに表示された定格電力に従った配慮が必要です。



注意 - 作業者の負傷。ラック取付け式機器の信頼できる接地を維持する必要があります。直接接続以外の分岐回路への電源接続 (テーブルタップの使用など) の場合は、特に注意を払うようにしてください。



注意 - 装置の損傷。スライドレールに搭載した機器を柵または作業スペースとして使用しないでください。

ラックの互換性

使用するラックがオプションのスライドレールおよびケーブル管理アーム (CMA) と互換性があることを確認します。オプションのスライドレールは、次の仕様を満たすさまざまな標準ラックに対応しています。

- ラックは4ポストラック (前方と後方の両方でマウント) である必要があります。2ポストのラックとは互換性がありません。
- ラックの水平方向の開口部およびユニットの垂直方向のピッチは、ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 標準規格に準拠している必要があります。M6 または 9.5 平方ミリメートルのねじ穴だけがサポートされています。
- 前方取り付け面と後方取り付け面の距離は、最小値 610 mm および最大値 915 mm (24 インチから 36 インチの間) である必要があります。

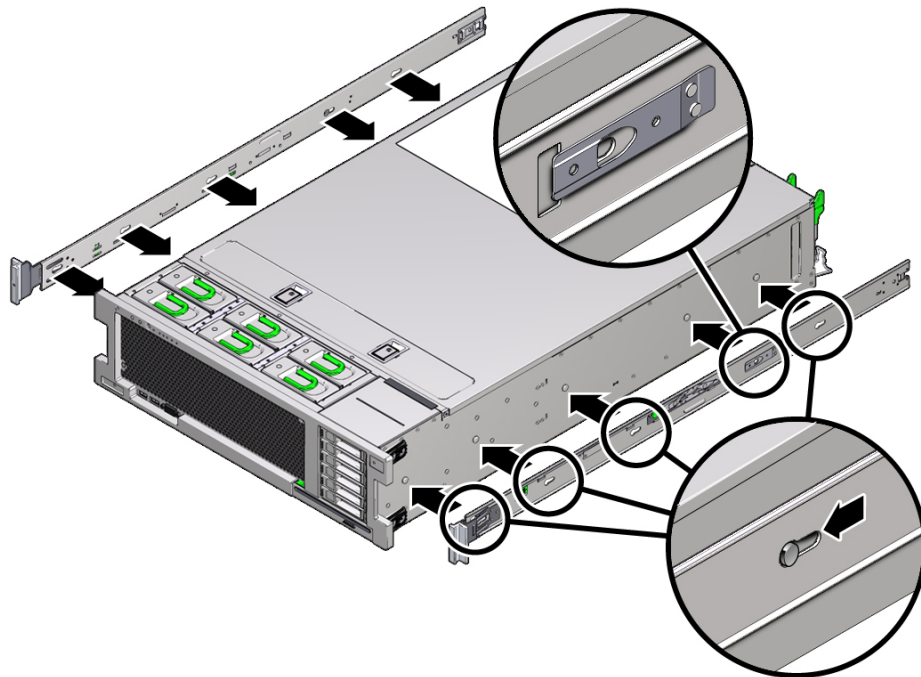
- 前方取り付け面の前の空間の奥行き (前面キャビネットドアまでの距離) は少なくとも 25.4 mm (1 インチ) です。
- 前方取り付け面の背後の空間の奥行き (背面キャビネットドアまでの距離) は少なくとも、ケーブル管理アームを使用する場合は 900 mm (35.5 インチ)、ケーブル管理アームを使用しない場合は 770 mm (30.4 インチ) です。
- 前方取り付け面と後方取り付け面の間隙 (構造的支柱とケーブルの溝の距離) は少なくとも 456 mm (18 インチ) です。
- サーバーの寸法:
 - 奥行き: (PSU イジェクタを含まない長さ): 732 mm (28.8 インチ)。
 - 幅: (耳を含まない長さ): 436.5 mm (17.2 インチ)。
 - 高さ: 129.9 mm (5.1 インチ)。

▼ 固定部品の取り付け

固定部品をサーバーの側面に取り付けるには、次の手順に従います。

1. スライドレールロックがサーバーの前面に来て、固定部品の 5 つの鍵穴の開口部がシャーシの側面にある 5 つの位置決め用ピンと整列するように、シャーシに対して固定部品を位置決めします。

注記 - 固定部品はすべて同一で、シャーシのどちら側にも取り付けることができます。



2. 5つのシャーシ位置決め用ピンの頭を固定部品の5つの鍵穴の開口部に挿入し、固定部品を、クリップがカチッと音がして固定されるまで、シャーシの前面に向けて引っ張ります。
3. 背面の位置決め用ピンが固定部品のクリップにかみ合っていることを確認します。
4. 手順1から3を繰り返して、サーバーの反対側の側面に残りの固定部品を取り付けます。

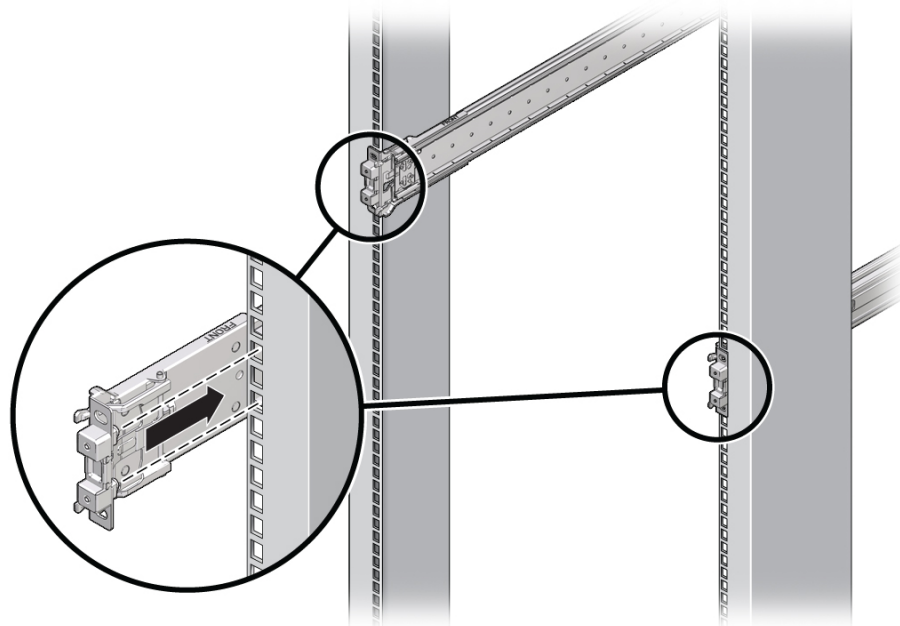
▼ スライドレール構成部品の取り付け

次の手順を実行して、スライドレール構成部品をラックに取り付けます。

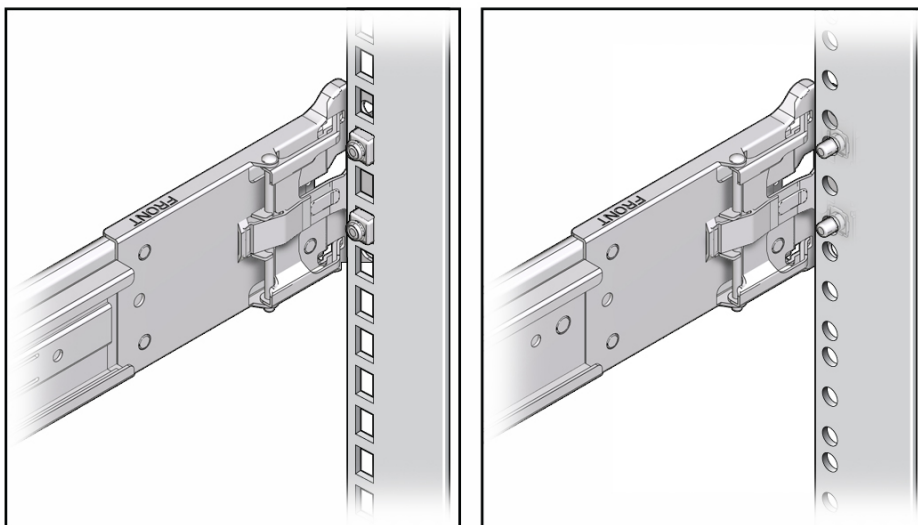
注記 - スライドレール構成部品は、9.5 mm の四角穴および M6 丸穴のラックのみをサポートしています。7.2 mm、M5、10 - 32 の取り付け穴など、その他のすべてのラックはサポートされていません。レール穴のサイズについては、ラックのドキュメントを参照してください。

スライドレール構成部品をラックに取り付けるには、次の手順に従います。

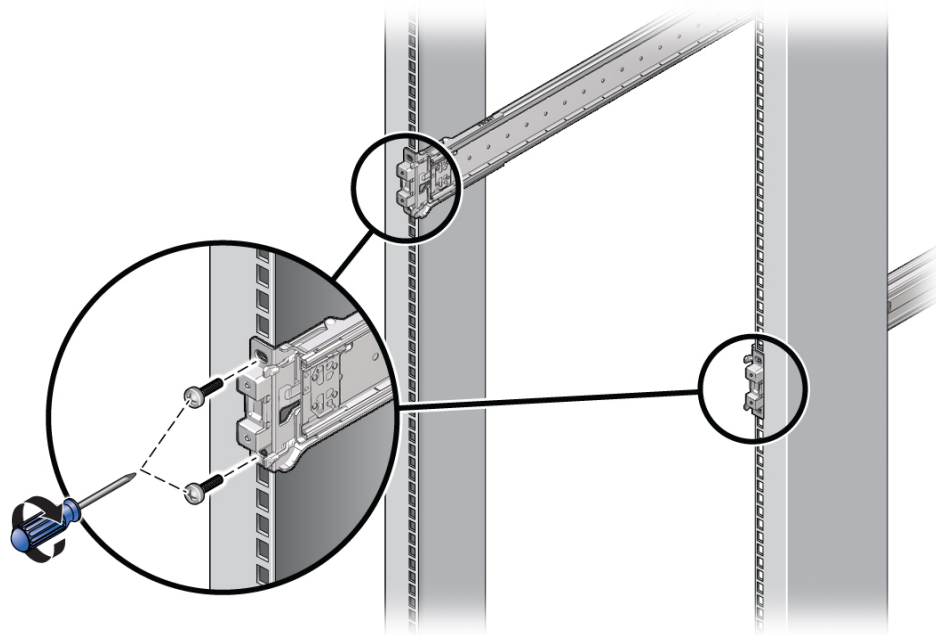
1. (オプション) サーバーが設置されているラックを移動する必要がある場合は、取り付けネジとケージナットを使用してスライドレール構成部品を取り付けることをお勧めします。
これらのケージナットの取り付け手順については、レールラックマウントキットの概要と情報カードを参照してください。このカードはラックキットに含まれています。
2. スライドレール構成部品の前面の固定部品が前面のラックのポストの外側に来るように、また、スライドレール構成部品の背面の固定部品が背面のラックのポストの内側に来るように、ラック内でスライドレール構成部品を位置決めします。
3. スライドレール構成部品の取り付けピンと、前面と背面のラックのポストの取り付け穴の位置合わせをします。次に、取り付けピンがラックにかみ合うまで構成部品をラックの背面の方向に押し込んで、構成部品を固定します。



注記 - スライド構成部品の取り付けピンは、9.5 mm 四角穴と M6 丸型取り付け穴でのみ使用できます。それ以外のサイズの取り付け穴はサポートされません。



4. (オプション) 取り付けネジとケージナットを使用してスライドレール構成部品を取り付けるように選択した場合、前面と背面の両方のスライドレール固定部品とラックのポストの穴に M6 取り付けネジを通し、ケージナットで締め付けます。



5. 手順 2 から 4 を繰り返して、残りのスライドレール構成部品を取り付けます。

▼ スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け

この手順を使用して、固定部品を取り付けたサーバーシャーシを、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品に装着します。

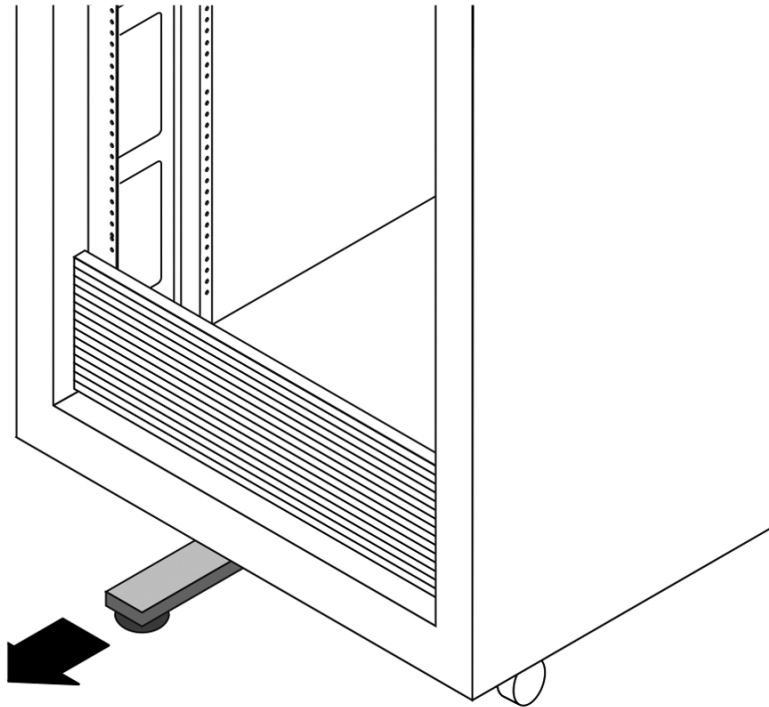


注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。サーバーは重いので、この手順では少なくとも 2 名の作業者が必要です。この手順を 1 人で実行すると、機器が損傷したり、けがをする可能性があります。



注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。転倒防止用のバーを伸ばして、機器の設置中にラックが転倒しないようにしてください。

1. 利用可能な場合は、ラックの下部の転倒防止バーを伸ばします。
手順については、ラックのドキュメントを参照してください。

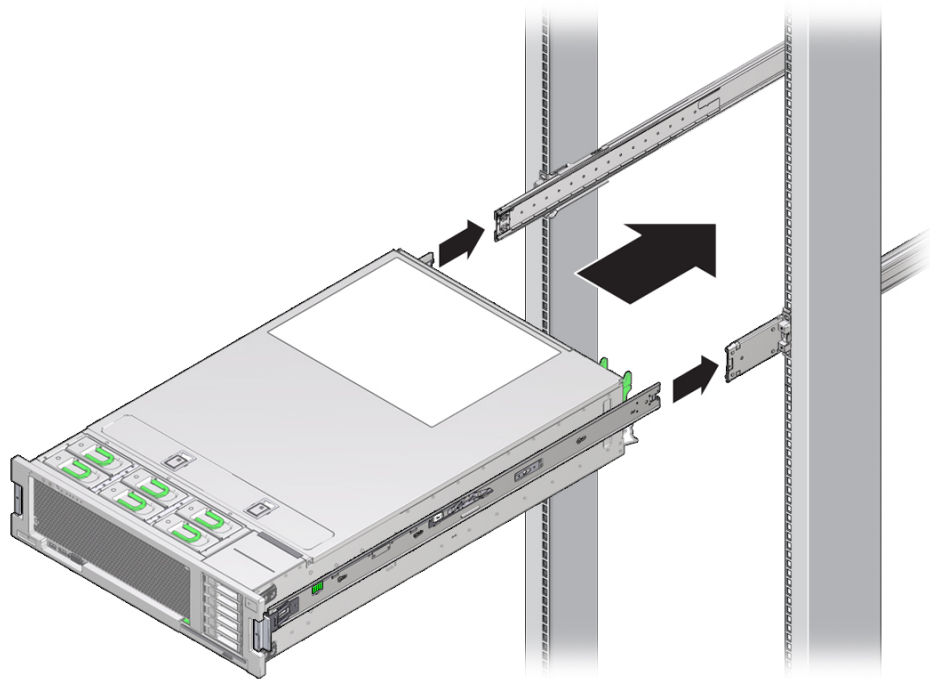


注意 - 機器が損傷したり、作業者がけがをしたりします。ラックに転倒防止バーがないと、ラックが転倒することがあります。

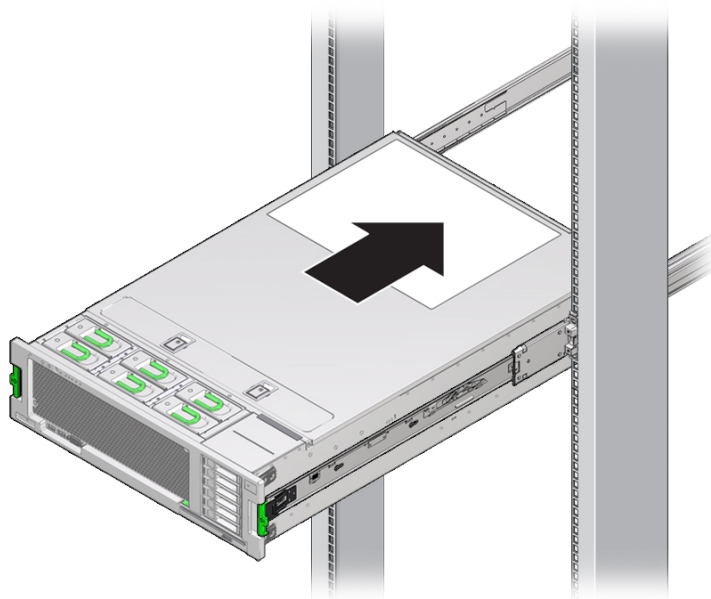
2. スライドレールをラックのスライドレール構成部品に可能な限り奥まで押し込みます。
3. 固定部品の後端が、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品と整列するようにサーバーを持ち上げます。
4. 固定部品をスライドレールに挿入し、固定部品がスライドレールのストップに接触するまでサーバーをラック内に押し込みます (約 30 cm (12 インチ))。



注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。サーバーをスライドレールに挿入するとき、固定部品の上下の取り付けリップがスライドレールに挿入されていることを確認します。サーバーが正しく取り付けられている場合は、サーバーを前後に簡単にスライドできます。ユニットを簡単にスライドできない場合は、各取り付けリップが正しく挿入されていることを確認してください。固定部品が正しく挿入されていないと、サーバーをラックから取り外すときに落下する可能性があります。



5. 両方の固定部品の緑色のスライドレールリリースボタンを同時に押しながら、サーバーをラック内に押し込みます。固定部品の前面のスライドレールロックがスライドレール構成部品にかみ合うまで押し込みます。



注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。サーバーがラックにしっかりと取り付けられていること、およびスライドレールロックが固定部品にかみ合っていることを確認してから次の手順に進みます。

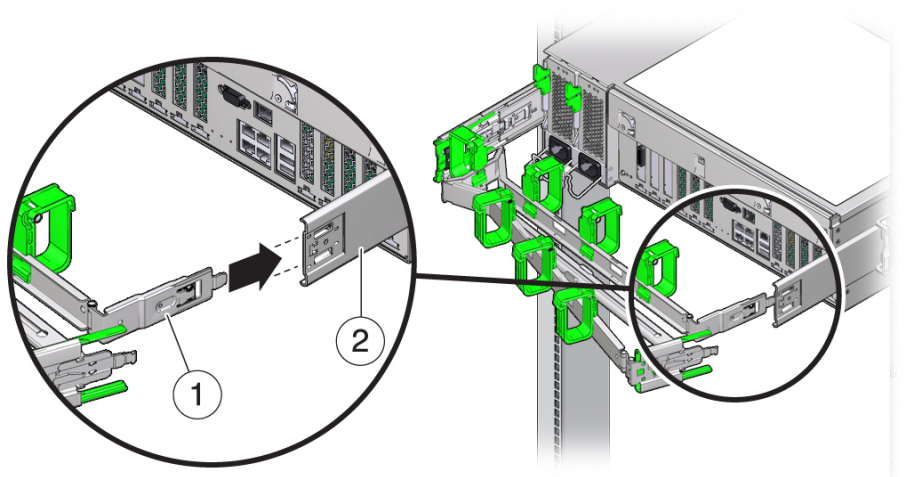
▼ ケーブル管理アームの取り付け

ケーブル管理アーム (CMA) はオプションの構成部品であり、ラック内のサーバーケーブルの配線に使用できます。

1. **CMA** の部品を開梱します。
2. **CMA** を装置ラックの背面に移動し、サーバーの背後に十分な作業スペースがあることを確認します。

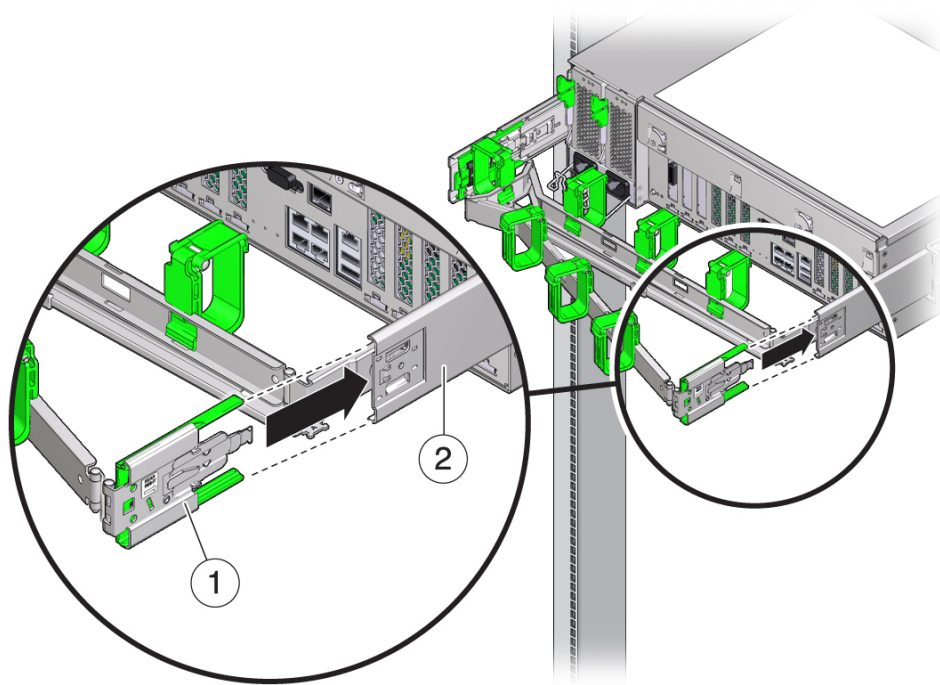
注記 - この手順の「左」と「右」は、装置ラックの背面から見たときの左と右を示します。

3. CMA の固定部品コネクタを、カチッと音がして固定されるまで、右側のスライドレールに差し込みます。



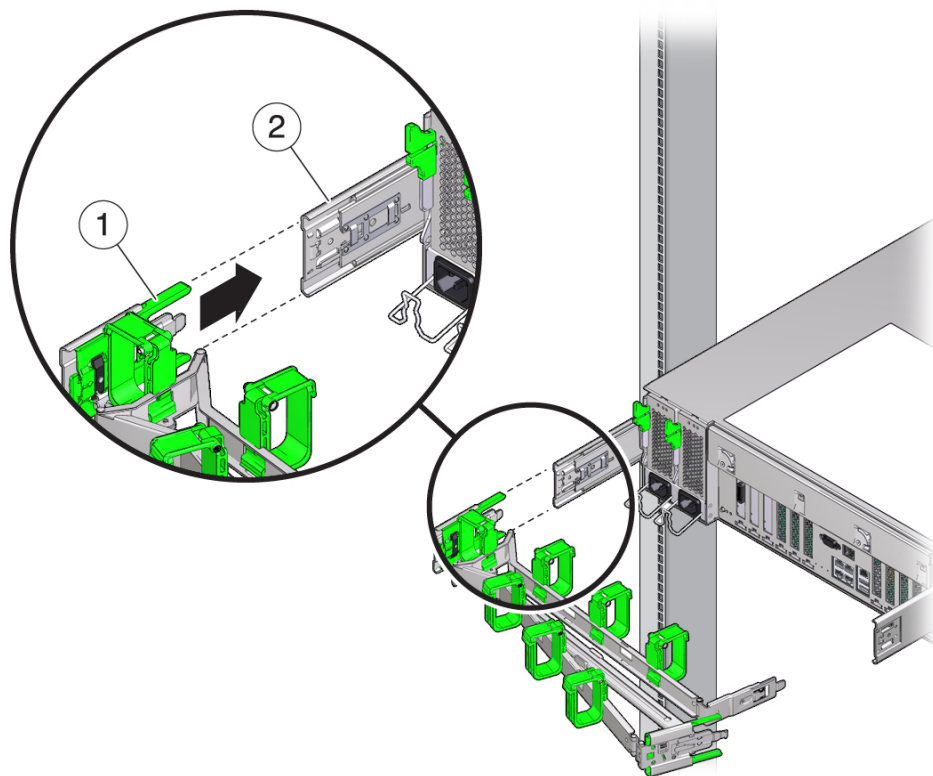
吹き出し番号	説明
1	CMA 固定部品
2	右側スライドレール

4. 右側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側のスライドレール構成部品に差し込みます。



吹き出し番号	説明
1	CMA スライドレールコネクタ
2	右側スライドレール

5. 左側の CMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、左側のスライドレール構成部品に差し込みます。



吹き出し番号	説明
1	CMA スライドレールコネクタ
2	左側スライドレール

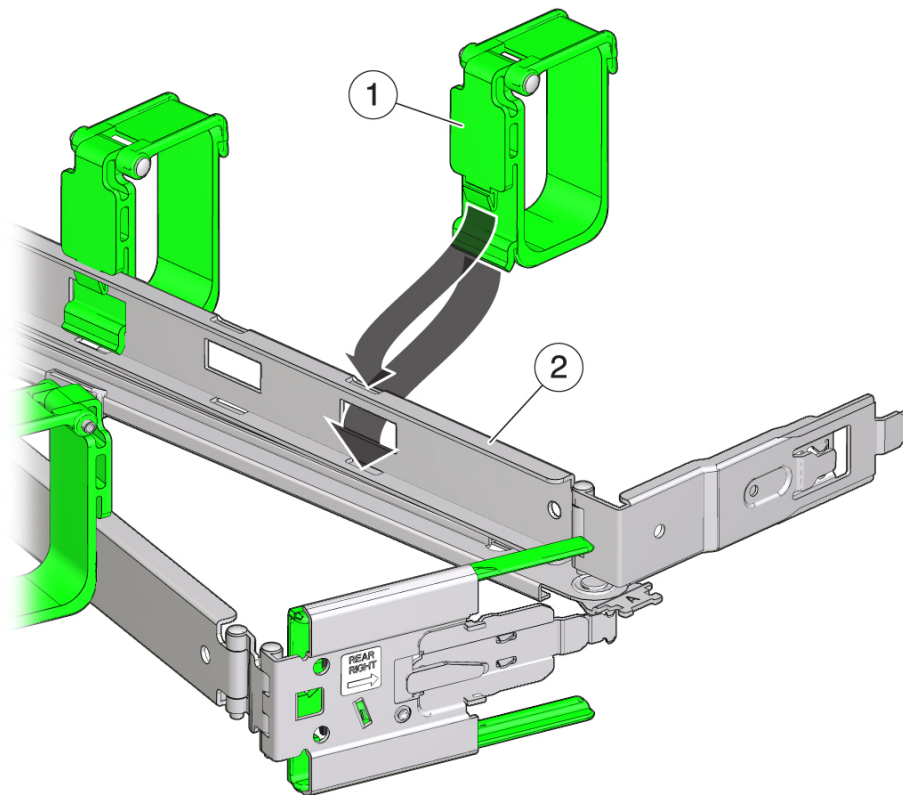
6. ケーブルのサーバーへの取り付け、配線、および整線を行います。

注記 - サーバークーブルの取り付け方法については、[51 ページの「サーバーの配線」](#)を参照してください。

7. 必要に応じて、ケーブルフックとループストラップを CMA に取り付け、所定の位置に押し込んでケーブルを固定します。

注記 - ケーブルフックとループストラップは、CMA にあらかじめ取り付けられています。ケーブルフックとループストラップを CMA に取り付け直す必要がある場合は、この手順を実行してください。

最善の結果を得るには、3つのケーブルストラップを CMA の背面側に等間隔に配置し、3つのケーブルストラップをサーバーにもっとも近い CMA の側面に配置します。



吹き出し番号	説明
1	CMA ケーブルストラップ
2	CMA アーム

▼ スライドレールと CMA の動作の確認

スライドレールと CMA が正しく動作していることを確認するには、次の手順に従います。

注記 - この手順は、2 人の作業員で実行することをお勧めします。1 人がサーバーをラックの前後に動かし、もう 1 人がケーブルと CMA を監視します。

1. スライドレールがストッパに達するまで、サーバーをラックからゆっくりと引き出します。
2. 接続されているケーブルが、引っかかったり、ねじれていないか点検します。
3. CMA がスライドレールからいっぱいまで伸びることを確認します。
4. 次の手順に従って、サーバーをラック内に押し込みます。

サーバーを完全に引き出したときに、サーバーをラックに戻すために 2 対のスライドレールストップを解放する必要があります。

 - a. 最初の対のストップでは、両方の緑色のレバーを同時に押し、サーバーをラックに向かってスライドさせます。

最初の対のストップは各スライドレールの内側 (サーバーのバックパネルのすぐ後ろ) にあるレバーです。

サーバーは約 46 cm (18 インチ) スライドして停止します。
 - b. ケーブルと CMA が引っかからずに格納されることを確認します。
 - c. 2 番目の対のストップでは、両方の緑色のスライドレールリリースボタンを同時に押し、両方のスライドレールロックがかみ合うまでサーバーを完全にラック内に押し込みます。

2 番目の対のストップは、サーバーの前面にあるスライドレールリリースボタンです。
5. 必要に応じて、ケーブルストラップと CMA を調整します。

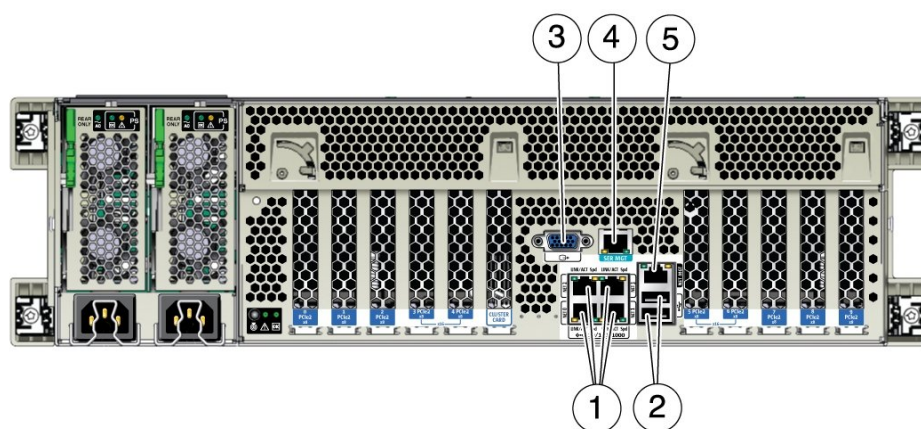
サーバーの配線

サーバーをラックに設置したあと、ケーブルをサーバーの背面に接続します。このセクションでは、ケーブルを接続し、サーバーに電源を供給する方法について説明します。次の表に示すトピックが含まれています。

説明	リンク
サーバーにデータケーブルを接続します。	51 ページの「サーバーのケーブル接続」
サーバーに電源コードを接続します。	52 ページの「電源コードの接続」

▼ サーバーのケーブル接続

サーバーをラックに設置したあと、ケーブルをネットワークとサーバーの管理ポートに接続します。次の図は、サーバーのバックパネルのポートの位置を示しています。



吹き出し番号	説明
1	ネットワークの 10 GbE ポート: NET0-NET3
2	USB 2.0 ポート (2)
3	DB-15 ビデオポート
4	サービスプロセッサのシリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート
5	サービスプロセッサネットワーク管理 (NET MGT) Ethernet ポート

1. KVM コンソールに直接接続するには、マウスとキーボードをサーバーの USB ポートに、モニターを DB-15 ビデオポートに接続します。
2. Ethernet 接続または直接シリアル接続を使用してサービスプロセッサへの管理接続を行うには、次のいずれかを行います。
 - **Ethernet: ネットワーク接続 (推奨は別の管理ネットワーク) を介して Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) の Web またはコマンド行インタフェースにアクセスする予定である場合は、Ethernet ケーブルを、NET MGT とラベル付けされたサーバーのネットワーク管理ポートに接続します。**

注記 - サービスプロセッサ (SP) は、デフォルトで NET MGT (帯域外) ポートを使用します。代わりに、サーバーの 4 つの 10 GbE Ethernet ポートのいずれかを共有するように SP を構成できます。SP は構成済みの Ethernet ポートのみを使用します。

- **直接シリアル: シリアル管理ポートを使用して Oracle ILOM コマンド行インタフェースにアクセスする予定である場合は、シリアルヌルモデムケーブルを、端末、または端末エミュレーションソフトウェアを実行しているクライアントから、SER MGT とラベル付けされたサーバーの RJ-45 シリアルポートに接続します。**
3. サーバーのネットワークアクセスのために、Ethernet ケーブルを 10 ギガビット Ethernet ポートに接続します。

次の手順 [52 ページの「電源コードの接続」](#)に進みます。

▼ 電源コードの接続

この手順を使用して、電源コードをサーバーの背面にある電源ユニットに接続します。

始める前に サーバーに電源を投入してスタンバイ電源モードにする前に、物理、電気、環境、通気のすべての仕様およびガイドラインが満たされていることを確認してください (21 ページの「サーバーの仕様およびガイドライン」を参照してください)。

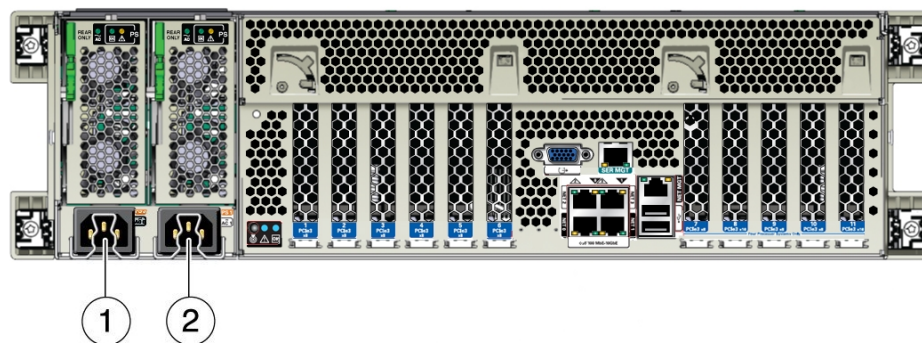
1. サーバーの電源コンセントの AC 電源がサーバーの仕様内に収まっていることを確認します。

電気仕様の情報については、22 ページの「電気仕様」を参照してください。

注記 - 2 CPU システムは、低電圧線 100 - 127 VAC または高電圧線 200 - 240 VAC 電源で動作します。4 CPU システムは、高電圧線 200 - 240 VAC 電源でのみ動作します。

2. サーバーの背面で、付属の 2 本の電源コードのコネクタを電源ユニット (PSU) の AC 差し込み口に挿入し、差し込み口の張力緩和ケーブルクリップを使用してコードを固定します。

次の図では、吹き出し 1 と吹き出し 2 が PSU の AC 差し込み口の位置を示しています。PSU はサーバーの左側にあり、左から右に指定されています。左端の PSU が PS0 (吹き出し 1) であり、右端の PSU が PS1 (吹き出し 2) です。



3. ラックを通して AC ケーブルを配線および整線します。

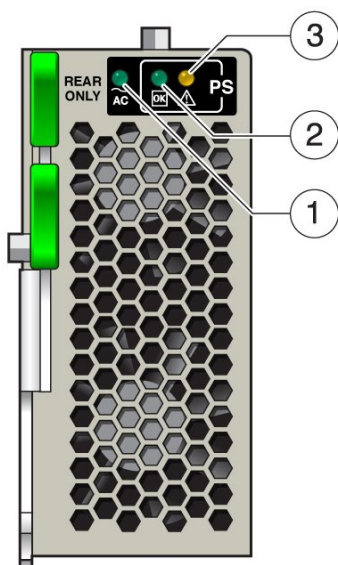
ケーブルが、サーバーをラックの前後にスライドさせるときのサーバーの移動の邪魔にならないことを確認してください。

4. 電源コードのプラグの端を給電コンセントに挿入します。

5. PSU の動作を確認します。

次の図に示すように、PSU には左から右に一列に配置された 3 つのインジケータ、つまり、左端の緑色の AC インジケータ (吹き出し 1)、緑色の OK インジケータ (吹き出

し 2)、および右端のオレンジ色の保守要求インジケータ (吹き出し 3) のパネルがあります。



これらのインジケータは、PSU の状態について次のように報告します。

- AC: コンセントからの AC 電源が PSU の仕様内に収まっている場合に緑色で点灯します。このインジケータは、供給電源が不足している場合は点灯しません。
 - OK: PSU が正常に機能し、サーバーに必要な電圧 (AC および DC) を供給している場合に緑色で点灯します。
 - 保守要求: PSU が障害状態にある場合にオレンジ色で点灯します。サーバーのフロントパネルの保守要求インジケータも点灯します。
6. サーバーの前面で、サーバーがスタンバイ電源モードにブートしていることを確認します (55 ページの「スタンバイ電源モード」を参照してください)。

注記 - 電源ボタンを押さないでください。この時点ではサーバーの電源を入れしないでください。

7. フロントパネルのオレンジ色の保守要求インジケータが点灯していないことを確認します。

注記 - いずれかの保守要求インジケータが点灯している場合は、『Oracle Server X5-4 Service Manual』にあるトラブルシューティング情報を参照してください。

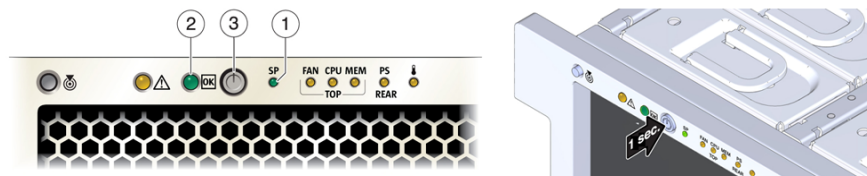
- 次の手順
- 67 ページの「Oracle ILOM への接続」
 - 81 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」
 - 93 ページの「OS インストール用のサーバードライブの構成」

スタンバイ電源モード

アクティブな AC 電源ケーブルがサーバーの PSU に接続されると、サーバーはスタンバイ電源モードへのブートを開始します。スタンバイ電源モードは低電力モードであり、サービスプロセッサ (SP) には電源が供給されるため、ブートが可能になります。

ブート中、フロントパネルの SP インジケータは速い点滅速度で点滅します。サーバーがスタンバイ電源モードに入ると、SP インジケータが点灯したままになり、OK インジケータは遅い点滅速度で点滅します。サーバーを全電力モードにブートする準備ができたなら、電源ボタンを押してから離します。

次の図は、吹き出し 1 として SP インジケータ、吹き出し 2 として OK インジケータ、吹き出し 3 として電源ボタンを示しています。



単一サーバー管理の設定

サーバーを配線したあと、サーバー管理を設定することにより、サーバーを構成してオペレーティングシステムをインストールできるようにします。

タスク	リンク
単一サーバー管理オプションを確認します。	59 ページの「サーバーの管理」
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) に接続します。	67 ページの「Oracle ILOM への接続」
Oracle System Assistant を使用してシステムのソフトウェアとファームウェアを設定します。	81 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」

サーバーの管理

サーバーをインストールしたら、そのサーバーをサーバーのグループ内で(複数システム管理)、または個別に(単一サーバー管理)管理できます。このドキュメントでのサーバー管理の説明の範囲は、単一サーバー管理ツールのオプションに関連しています。

注記 - このドキュメントは、単一サーバー管理オプションに焦点を置いています。複数サーバー管理オプションについては、[65 ページの「複数のサーバーの管理」](#)を参照してください。

次の各セクションでは、このドキュメントで参照される単一サーバー管理ツールについて説明します。

トピック	リンク
Oracle ILOM と、それを使用してサーバーを管理する方法について学習します。	59 ページの「Oracle ILOM」
Oracle System Assistant と、それを使用してサーバーを管理する方法について学習します。	61 ページの「Oracle System Assistant」
Oracle Hardware Management Pack と、それを使用してサーバーを管理する方法について学習します。	63 ページの「Oracle Hardware Management Pack」
サーバーの BIOS ブートモードについて学習します。	63 ページの「サーバーの BIOS ブートモード」

Oracle ILOM

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、サーバーのサービスプロセッサ (SP) 上に存在する組み込みツールです。Oracle ILOM を使用してサーバーをモニターおよび管理できます。

Oracle ILOM のモニタリングおよび管理機能には、次のものがあります。

- サーバーの電源をスタンバイまたは全電力モードにして、サーバーをローカルまたはリモートで管理します。

- 重要なシステム情報をモニターしたり、ログに記録されたイベントを表示したり、通知を取得したり、トラブルシューティングツールを実行したりします。
- サーバーハードウェア構成を表示および編集します。
- 会社のセキュアなインフラストラクチャーを使用して Oracle ILOM ユーザーアカウントを管理します。
- ホストコンソールにリモートでアクセスします。
- Oracle ILOM およびサーバーの BIOS 構成情報をバックアップします。

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) のハードウェアコンポーネントは、サービスプロセッサ (SP) と、サーバーの背面にある管理および Ethernet ポートで構成されています。Oracle ILOM のインタフェースコンポーネントは、Web インタフェースまたはコマンド行インタフェースのどちらかで構成されています。

詳細は、次の各セクションを参照してください。

- [60 ページの「Oracle ILOM のハードウェアコンポーネント」](#)
- [60 ページの「Oracle ILOM のインタフェースコンポーネント」](#)

Oracle ILOM のハードウェアコンポーネント

Oracle ILOM は SP 上に存在するため、SP に接続したあと、管理ポート経由でローカルで、またはサーバーの背面にあるいずれかの Ethernet (Net) ポート経由でリモートで Oracle ILOM にアクセスできます。Ethernet ポートは Oracle ILOM Web インタフェースへのアクセスを提供し、シリアル管理ポートは Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) へのアクセスを提供します。

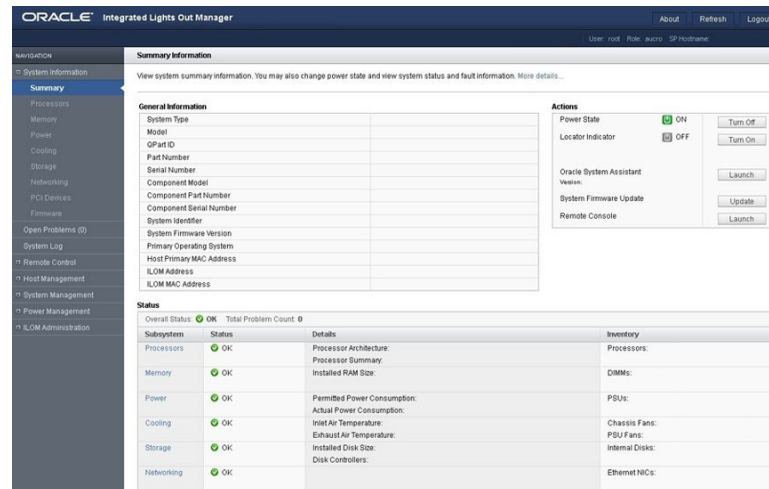
- SP とそのチップセットは、マザーボードに装着されたドーターボード上にあります。
- バックパネルの 2 つの外部接続である NET MGT ポート (Ethernet 接続) と SER MGT (RJ-45 シリアル接続) は、SP と Oracle ILOM へのリモートおよびローカルアクセスを提供します。

Oracle ILOM のインタフェースコンポーネント

Oracle ILOM のインタフェースコンポーネントには、次のものがあります。

- Web インタフェース
- SSH コマンド行インタフェース (CLI)
- IPMI v2.0 CLI
- SNMP v3 インタフェース

次の図は、Oracle ILOM Web インタフェースの例を示しています。



Oracle ILOM の追加情報:

- サーバーのバージョン情報については、『Oracle Server X5-4 プロダクトノート』を参照してください。
- 機能については、『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』 (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)を参照してください。
- システム管理ツールについては、<http://www.oracle.com/goto/system-management> を参照してください

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant は、Oracle x86 サーバー用のタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。これは、サーバーを設定したり、サポートされるオペレーティングシステム (OS) をインストールしたり、サーバーを最新のソフトウェアリリースに更新したりするのに役立ちます。

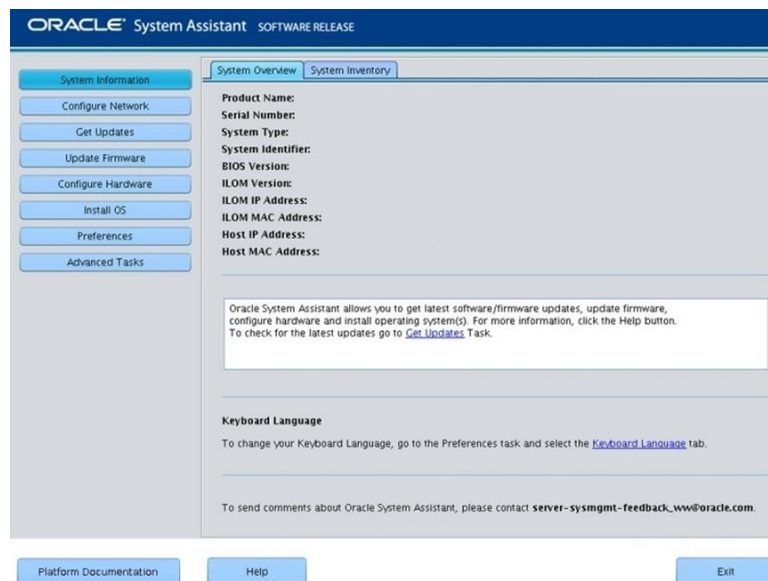
Oracle System Assistant は、サーバーの購入時に入手可能なオプションです。これは工場出荷時にインストールされます。サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれている場合は、専用のブート可能な内蔵 USB フラッシュドライブ上に存在します。Oracle System Assistant は、サーバーのブート画面か、または Oracle ILOM (Web インタフェースまたは CLI) から起動できます。

Oracle System Assistant のハードウェアコンポーネント

Oracle System Assistant のハードウェアコンポーネントは、サーバー内部の USB ポート (P0) に取り付けられた専用のブート可能な USB フラッシュドライブです。このフラッシュドライブには、Oracle System Assistant ファイルのみが含まれている必要があります。

Oracle System Assistant のインタフェースコンポーネント

次の図は、Oracle System Assistant のメイン画面の例を示しています。



Oracle System Assistant の追加情報:

- サーバーのバージョン情報については、『[Oracle Server X5-4 Product Notes](#)』を参照してください。
- 機能については、『[Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』 (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)を参照してください。
- システム管理ツールについては、<http://www.oracle.com/goto/system-management> を参照してください。

Oracle Hardware Management Pack

Oracle Hardware Management Pack は、オペレーティングシステムから Oracle サーバーを管理および構成するのに役立つコマンド行ツールを提供します。

Hardware Management Pack により、次のことが可能になります。

- SNMP (Simple Network Management Protocol) を介した Oracle ハードウェアの帯域内モニタリングが可能になります。この情報を使用して、Oracle サーバーをデータセンター管理インフラストラクチャーに統合できます。
- BIOS、UEFI BIOS、RAID ボリューム、および Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を構成します。
- サーバーコンポーネントのファームウェアをアップグレードします。
- ハードウェア構成情報と Oracle サーバーのステータスを表示します。
- ホストと ILOM の相互接続を介して Oracle ILOM サービスプロセッサから SNMP トラップを転送する ILOM トラッププロキシを設定します。
- Oracle Solaris オペレーティングシステムを実行しているサポートされるサーバー上でゾーニングを構成します。
- サーバーのサービスプロセッサにアクセスし、IPMItool を使用して管理タスクを実行します。
- Oracle Linux Fault Management Architecture (FMA) ホストベースのコマンド行インタフェースを使用して、Oracle ILOM 障害管理シェルから使用可能なものと同様の障害管理コマンドを使用して障害を表示し、対応します。

Oracle Hardware Management Pack の追加情報:

- サーバーのバージョン情報については、『[Oracle Server X5-4 Product Notes](#)』を参照してください。
- 機能については、『[Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』 (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)を参照してください。
- Oracle Hardware Management Pack の詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp> を参照してください。
- システム管理ツールについては、<http://www.oracle.com/goto/system-management> を参照してください。

サーバーの BIOS ブートモード

Oracle Server X5-4 には、レガシー BIOS ブートモードと、UEFI (Unified Extensible Firmware Interface) と互換性があるブートモードの2つの BIOS ブートモードが含まれています。どちらのブートモードでも、ブートデバイスを管理できます。ただし、

UEFI BIOS ブートモードでは、レガシー BIOS ブートモードより多くのブートオプション候補が提供されるだけでなく、ホストバスアダプタ (HBA) カードの BIOS 構成機能も統合されます。UEFI BIOS はまた、UEFI ブートモードとレガシーブートモードのどちらかを選択する機能も提供します。

ブートモードは、BIOS 設定ユーティリティーで選択します。サーバーがリセットされ、ブートモードが構成されたら、サポートされるオペレーティングシステムでブートデバイス (ストレージドライブなど) を管理できます。

注記 - 一部のデバイスとオペレーティングシステムはまだ UEFI BIOS ブートモードをサポートしておらず、レガシー BIOS ブートモード用に構成されたサーバーでしかブートできません。

ブートモードを変更する前に、Oracle System Assistant または Oracle ILOM のバックアップ機能を使用して既存の構成を保持してください。

注記 - ブートモードを変更すると、サーバーが以前のモードにあったときに構成されたブート候補 (ディスクドライブなど) は使用できなくなります。これらを使用可能にする唯一の方法は、以前のブートモードに戻すか、または新しいブートモードにある間に再構成するか (これにより、すべてのデータが消去されます) のどちらかです。

レガシー BIOS ブートモード

レガシー BIOS ブートモードは、BIOS 設定ユーティリティーでのデフォルト設定です。ホストバスアダプタ (HBA) がアダプタのオプション ROM を使用する必要がある場合や、アダプタに UEFI ドライバがない場合は、レガシー BIOS ブートモードを選択します。

レガシー BIOS ブートモードでは、レガシー BIOS ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティーの画面の「Boot Options Priority」リストに表示されます。

注記 - OS のインストールに使用されたものとは別の BIOS ブートモードを使用してサーバーをリブートすると、その OS にアクセスできなくなります。OS をブートするには、正しいブートモード設定に戻す必要があります。

UEFI BIOS ブートモード

ソフトウェアとアダプタに UEFI ドライバが含まれている場合に UEFI ドライバを使用するには、BIOS 設定ユーティリティーから UEFI BIOS ブートモードを選択します。

UEFI BIOS ブートモードでは、UEFI BIOS ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティの画面の「Boot Options Priority」リストに表示されます。

次のオペレーティングシステムは Oracle Server X5-4 で使用可能であり、UEFI BIOS ブートモードをサポートしています。

- Oracle Solaris 11.1 以降
- Oracle Linux 6.5
- Red Hat Enterprise Linux 6.5
- SUSE Linux Enterprise Server 11 SP3
- Microsoft Windows Server 2008 R2 SP1 および Microsoft Windows Server 2012

その他のすべてのサポートされるオペレーティングシステム (出荷時にインストール済みの OS イメージを含む) は、レガシー BIOS ブートモードを使用する必要があります。最新のリストについては、<http://www.oracle.com/goto/x86/docs> にある『Oracle Server X5-4 プロダクトノート』を参照してください。

注記 - OS のインストールに使用されたものとは別の BIOS ブートモードを使用してサーバーをリブートすると、その OS にアクセスできなくなります。OS をブートするには、正しいブートモード設定に戻す必要があります。

BIOS の追加情報

- サーバーのバージョン情報については、『Oracle Server X5-4 プロダクトノート』を参照してください。
- UEFI BIOS の詳細は、『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)を参照してください。
- システム管理ツールについては、<http://www.oracle.com/goto/system-management> を参照してください

複数のサーバーの管理

次は、いくつかの複数サーバーシステム管理ツールの概要です。

- Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用すると、オペレーティングシステムとシステムファームウェアのプロビジョニングや更新を含め、1つのインターフェースから複数のサーバーを管理できます。詳細は、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html>

- エンタープライズサーバーをモニターする場合は、Sun Management Center を使用できます。詳細は、次を参照してください。
<http://www.oracle.com/technetwork/systems/patches/sysmgmt/smc-jsp-138444.html>
- すでにサードパーティーのシステム管理ツールがある場合、サーバーは多くのサードパーティーツールと統合できます。詳細は、次を参照してください。
<http://www.oracle.com/goto/system-management>

Oracle ILOM への接続

このセクションでは、コマンド行インタフェース (CLI) または Web インタフェースを使用して Oracle ILOM にアクセスしたり、Oracle ILOM を構成したりする方法について説明します。

説明	リンク
CLI または Web インタフェースを使用して、リモートまたはローカルで Oracle ILOM にアクセスしてログインします。	67 ページの「Oracle ILOM へのログイン」
ネットワークポートとデフォルト値について学習します。	71 ページの「Oracle ILOM のネットワーク設定の変更」
Oracle ILOM のネットワーク設定を検証します。	77 ページの「Oracle ILOM のネットワーク設定のテスト」
Oracle ILOM を終了します。	79 ページの「Oracle ILOM の終了」

関連項目

- Oracle System Assistant からの Oracle ILOM の構成については、[81 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」](#)を参照してください
- Oracle ILOM の詳細な使用方法については、『[Oracle Server X5-4 Product Notes](#)』を参照してください

Oracle ILOM へのログイン

このセクションの手順を使用すると、Oracle ILOM へのローカルまたはリモート接続を確立できます。

- ローカルでログインするには、[68 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)を参照してください。
- リモートでログインするには、サーバー SP に割り当てられた IP アドレス、ホスト名、または IPv6 ローカルリンク名を使用し、[68 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)の手順に従います。

▼ ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

この手順では、サーバー SP の IP アドレスがわかっている必要はありません。Oracle ILOM 管理者アカウントは必要です。

注記 - デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは root であり、そのパスワードは changeme です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

始める前に すでにシリアルケーブルが端末 (または端末エミュレーションクライアント) からサーバーの背面にある SER MGT ポートに接続されている必要があります。詳細は、[51 ページの「サーバーのケーブル接続」](#)を参照してください。

1. 端末 (または端末エミュレーションクライアント) で、次のシリアル通信設定が構成されていることを確認します。
 - 8N1: 8 データビット、パリティなし、1 ストップビット
 - 9600 ボー
 - ハードウェアフロー制御を無効化 (CTS/RTS)
2. 端末キーボードで、Enter キーを押して Oracle ILOM へのシリアルコンソール接続を確立します。
Oracle ILOM へのログインプロンプトが表示されます。
3. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) にログインします。
Oracle ILOM に、正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

▼ リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

この手順には、Oracle ILOM 管理者アカウントと、サーバー SP の IP アドレスまたはホスト名が必要です。コマンド行インタフェース (CLI) または Web インタフェースを使用してログインするための手順については、下で説明されています。

注記 - デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは root であり、そのパスワードは changeme です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

始める前に すでにシリアルケーブルが端末 (または端末エミュレーションクライアント) からサーバーの背面にある SER MGT ポートに接続されている必要があります。詳細は、[51 ページの「サーバーのケーブル接続」](#)を参照してください。

1. 次のいずれかの方法を使用して、Oracle ILOM への接続を確立します。

- **Oracle ILOM CLI から、セキュアシェルセッションを開始します。次のコマンドを入力します。**

```
ssh username@host
```

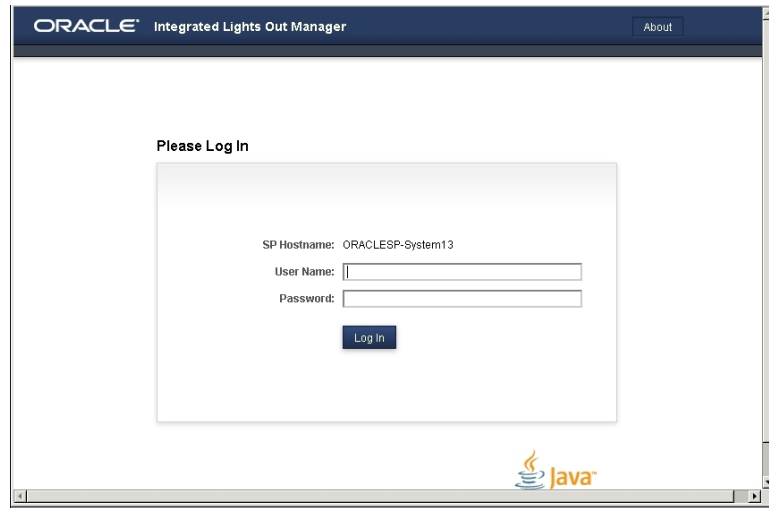
ここで、*username* は管理者特権を持つアカウントのユーザー名であり (デフォルトの管理者アカウントは root)、*host* はサーバー SP の IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用している場合) のどちらかです。

Oracle ILOM パスワードプロンプトが表示されます。

Password:

- **Oracle ILOM Web インタフェースから、Web ブラウザのアドレスフィールドにサーバーの IP アドレスを入力し、Enter キーを押します。**

Oracle ILOM のログインページが表示されます。



2. 次のいずれかの方法を使用して、Oracle ILOM にログインします。

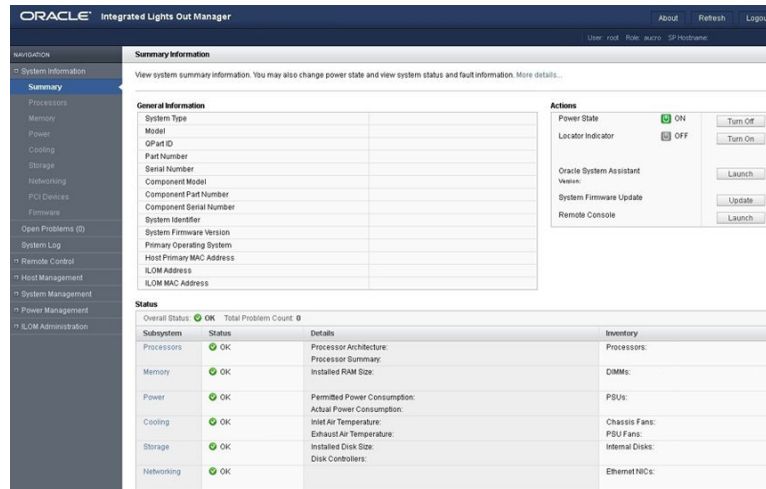
注記 - Oracle ILOM への初回のログインとアクセスを有効にするために、デフォルトの管理者アカウントとそのパスワードがシステムに用意されています。セキュアな環境を構築するには、Oracle ILOM にはじめてログインしたあとに、デフォルトの管理者アカウント (root) のデフォルトのパスワード (changeme) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントがそれ以降に変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

- **Oracle ILOM CLI** から、パスワードプロンプトでパスワードを入力し、**Enter** キーを押します。

Oracle ILOM に、Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースから、ログインページでユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示す「Summary」ページが表示されます。例:



Oracle ILOM のネットワーク設定の変更

このセクションの手順では、Oracle ILOM のネットワーク設定を変更する方法について説明します。

- ネットワークのデフォルト情報については、71 ページの「Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値」を参照してください。
- Oracle ILOM CLI からネットワーク設定を変更するには、72 ページの「Oracle ILOM CLI からのネットワーク設定の変更」を参照してください。
- リモートでログインするには、サーバー SP に割り当てられた IP アドレス、ホスト名、または IPv6 ローカルリンク名を使用し、76 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースからのネットワーク設定の変更」の手順に従います。

Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値

Oracle Server X5-4 は、Oracle ILOM が IPv4 および IPv6 ネットワーク環境で完全に動作できるようにする、IPv4 と IPv6 のデュアルスタック設定をサポートしています。

標準的な構成では、次のデフォルト設定を受け入れます。

- **IPv4 構成の場合は**、DHCP がデフォルトで有効になっているため、ネットワーク上の DHCP サーバーがネットワーク設定をサーバーに自動的に割り当てることができます。
- **IPv6 構成の場合は**、IPv6 ステートレス自動構成がデフォルトで有効になっているため、ネットワーク上の IPv6 ルーターがネットワーク設定を割り当てることができます。

注記 - サーバーに自動的に割り当てられた IP アドレスまたはホスト名を確認するには、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターに付属しているネットワークツールを使用してください。

▼ Oracle ILOM CLI からのネットワーク設定の変更

Oracle ILOM CLI から現在のサーバーネットワーク設定を変更するには、次の手順を使用します。

注記 - BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、「[Access the BIOS Setup Utility](#)」 in 『[Oracle Server X5-4 Service Manual](#)』を参照してください。

1. **Oracle ILOM CLI にログインします。**
[68 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) または [68 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) にある関連する方法を使用します。
2. ネットワーク環境に適用されるネットワーク構成手順を実行してから、ネットワーク設定をテストします。
 - **IPv4 ネットワーク設定を表示または構成するには**、手順 3 と手順 4 を実行します。
 - **IPv6 ネットワーク設定を表示または構成するには**、手順 5 から 8 を実行します。
3. **IPv4 ネットワーク構成の場合は**、cd コマンドを使用して /SP/network ディレクトリに移動します。
- >cd /SP/network
4. 次のいずれかを行います。

- ネットワーク上に DHCP サーバーがある場合は、次のコマンドを入力して、DHCP サーバーによってサーバーに割り当てられた設定を表示します。

```
- >show
```

- DHCP サーバーがない場合や、自分で設定を割り当てる場合は、set コマンドを使用して、下の表に示されているプロパティの値を割り当てます。

例:

```
- >set pendingipdiscovery=static
- >set pendingipaddress=10.8.183.106
- >set pendingipnetmask=255.255.255.0
- >set pendingipgateway=10.8.183.254
- >set commitpending=true
```

プロパティ	設定する値	説明
state	enabled または disabled	ネットワーク状態は、デフォルトで有効になっています。SP へのネットワーク接続を無効にすると、Oracle ILOM にはシリアル管理ポートを使用してのみアクセスできます。
pendingipdiscovery	static または dhcp	ネットワーク検出オプションには、静的 IP アドレスの場合の static、または DHCP サーバーによって割り当てられた IP アドレスの場合の dhcp (デフォルト) が含まれます。
pendingipaddress	<ip_address>	複数の静的ネットワーク設定を割り当てるには、各プロパティ (IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイ) に対して set コマンドと割り当てる静的な値を入力します。
pendingipnetmask	<netmask>	
pendingipgateway	<gateway>	
commitpending	true	「set commitpending=true」と入力して変更をコミットします。

注記 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインしている場合は、commitpending を true に設定してネットワーク設定への変更をコミットすると、Oracle ILOM 接続が終了するため、新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

IPv4 または IPv6 ネットワーク設定をテストするには、手順 9 を参照してください。

5. IPv6 ネットワーク構成の場合は、cd コマンドを使用して SP/network/ipv6 ディレクトリに移動します。

```
- >cd SP/network/ipv6
```

6. IPv6 ネットワーク設定を表示するには、show コマンドを入力します。

例:

```
-> show
/SP/network/ipv6
Targets:

Properties:
state = enabled
autoconfig = stateless
dhcpv6_server_ duid = (none)
link_local_ipaddress = fe80::214:4fff:feca:5f7e/64
static_ipaddress = ::/128
ipgateway = fe80::211:5dff:febe:5000/128
pending_static_ipaddress = ::/128
dynamic_ipaddress_1 fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

Commands:
cd
show
```

7. IPv6 自動構成オプションを構成するには、set コマンドを使用して、次の自動構成プロパティ値を指定します。

例:

```
- >set state=enabled
- >set autoconfig=dhcpv6_stateless
```

プロパティ	設定する値	説明
state	enabled または disabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。IPv6 自動構成オプションを有効にするには、この state が enabled に構成されている必要があります。
autoconfig	次の値を指定できます。 stateless dhcpv6_stateless dhcpv6_stateful disable	<p>autoconfig コマンドに続けて、次の値のいずれかを入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ stateless (デフォルト設定) IPv6 ネットワークルーターから学習された IP アドレスを自動的に割り当てます。 ■ dhcpv6_stateless DHCPv6 サーバーから学習した DNS 情報を自動的に割り当てます。dhcpv6_stateless プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 ■ dhcpv6_stateful DHCPv6 サーバーから学習した IPv6 アドレスを自動的に割り当てます。dhcpv6_stateful プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 ■ disable 自動構成プロパティの値をすべて無効にし、リンクローカルアドレスの読み取り専用プロパティの値を設定します。

注記 - IPv6 構成オプションは、設定後に有効になります。/network ターゲットでこれらの変更を確定する必要はありません。

注記 - dhcpv6_stateless のオプションが有効になっているか、または dhcpv6_stateful のオプションが有効になっているときに、それと同時に stateless 自動構成オプションの実行を有効にできます。ただし、dhcpv6_stateless と dhcpv6_stateful の自動構成オプションの実行を同時に有効にしないでください。

8. 静的 IPv6 アドレスを設定するには、次の手順を完了します。

a. プロパティタイプを指定します。例:

```
- >set state=enabled
- >set pending_static_ipaddress=fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64
```

プロパティ	設定する値	説明
state	enabled または disabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。静的 IP アドレスを有効にするには、この状態を有効に設定する必要があります。
pending_static_ipaddress	<ipv6_address>/ <subnet_mask_length_in_bits>	このコマンドに続けて、デバイスに割り当てる静的 IPv6 アドレスおよびネットマスクのプロパティ値を入力します。IPv6 アドレスの例: fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

b. 保留中の IPv6 静的ネットワークパラメータをコミットするには、次のように入力します。

```
- >set /SP/network commitpending=true
```

注記 - ネットワーク設定は、コミットされるまで、保留中とみなされます。サーバーに新しい静的 IP アドレスを割り当てると、サーバーとのアクティブな Oracle ILOM セッションがすべて終了します。Oracle ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいセッションを作成します。

9. ネットワークテストツール (Ping および Ping6) を使用して、Oracle ILOM から IPv4 または IPv6 ネットワーク構成をテストします。

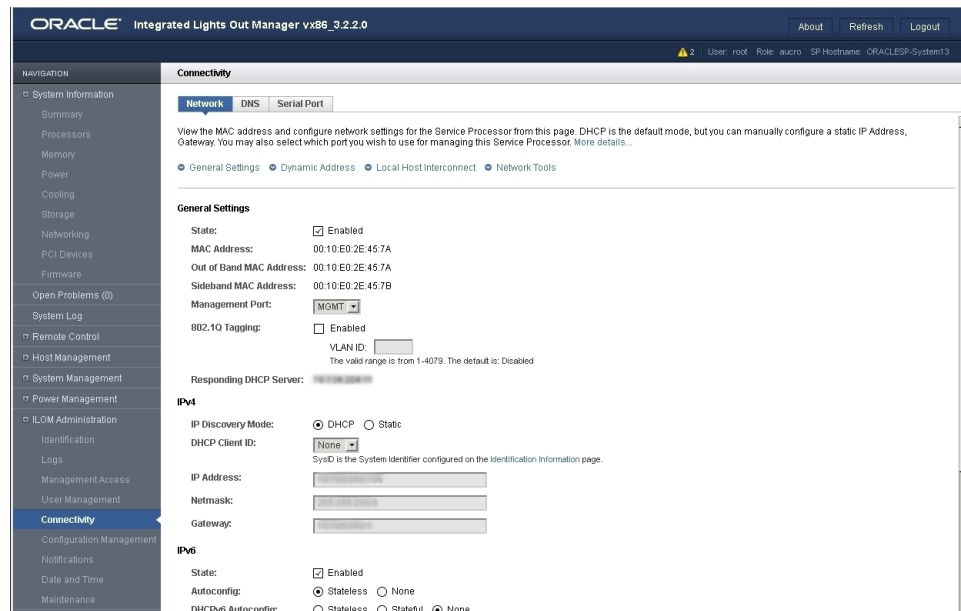
詳細は、77 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。

▼ Oracle ILOM Web インタフェースからのネットワーク設定の変更

Oracle ILOM Web インタフェースからサーバーで現在構成されているネットワーク設定を変更するには、次の手順を使用します。

注記 - BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、「[Access the BIOS Setup Utility](#)」 in 『[Oracle Server X5-4 Service Manual](#)』を参照してください。

1. **Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。**
68 ページの「[リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン](#)」にある関連する手順を使用します。
2. 左側のナビゲーションツリーから、「**ILOM Administration**」 > 「**Connectivity**」を選択します。
「Network Settings」ページが表示され、デバイス上に構成されている設定が示されます。



3. ネットワーク環境に適用されるネットワーク構成手順を実行します。

- IPv4: ネットワーク上の DHCP サーバーにネットワーク設定の割り当てを許可するには、「DHCP」ラジオボタンが選択されていることを確認して、「Save」をクリックします。
 - IPv4: ネットワーク設定を割り当てるには、「Static」ラジオボタンを選択して、「IP Address」、「Netmask」、および「Gateway」フィールドに入力し、「Save」をクリックします。
 - IPv6: 自動構成オプションを構成するには、「State」プロパティの横にある「Enabled」チェックボックスが選択されていることを確認します。次に、自動構成値を選択して「Save」をクリックします。
 - IPv6: 静的 IPv6 アドレスを設定するには、「State」プロパティの横にある「Enabled」チェックボックスが選択されていることを確認します。次に、「Static IP Address」フィールドに *ipv6_address/subnet mask length in bits* の形式の静的アドレス (例: fec0:a:8:b7:214:4f ff:feca:5f7e/64) を入力し、「Save」をクリックします。
4. ネットワークテストツール (Ping および Ping 6) を使用して、Oracle ILOM から IPv4 または IPv6 ネットワーク構成をテストします。
詳細は、78 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。

Oracle ILOM のネットワーク設定のテスト

このセクションの手順では、Oracle ILOM のネットワーク設定をテストする方法について説明します。

- Oracle ILOM CLI からネットワーク設定をテストするには、77 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。
- Oracle ILOM Web インタフェースからネットワーク設定をテストするには、78 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。

▼ Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

1. /SP/network/test ディレクトリに移動するには、cd コマンドを使用します。

```
->cd /SP/network/test
```

2. ネットワーク test のターゲットとプロパティを表示するには、CLI プロンプトで **show** コマンドを入力します。

たとえば、次の出力は test のターゲットプロパティを示しています。

```
-> show
/SP/network/test
Targets:

Properties:
ping = (Cannot show property)
ping6 = (Cannot show property)

Commands:
cd
set
show
```

3. デバイスからネットワーク宛先にネットワークテストを送信するには、**set ping** または **set ping6** コマンドを使用します。

例:

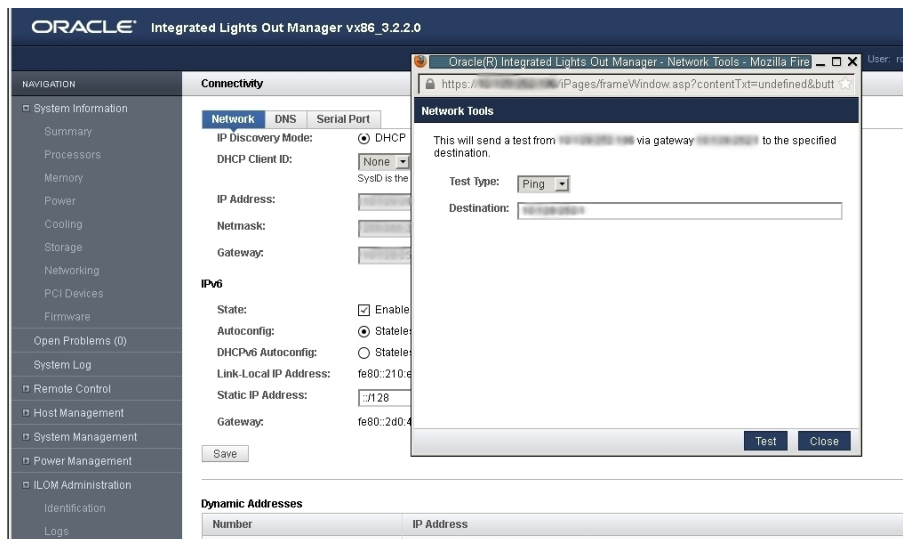
```
-> set ping=device_ipv4_address_on network
->set ping6=device_ipv6_address_on network
```

プロパティ	設定する値	説明
ping	<IPv4_address>	コマンドプロンプトで set ping= コマンドを入力し、続けて IPv4 テストの宛先アドレスを入力します。例: set ping=10.8.183.106 Ping of 10.8.183.106 succeeded
ping6	<IPv6_address>	set ping6= コマンドに続けて、IPv6 テストの宛先アドレスを入力します。例: set ping6=fe80::211:5dff:febe:5000 Ping of fe80::211:5dff:febe:5000 succeeded

▼ Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

1. 「ILOM Administration」 > 「Connectivity」 ページから、ページの下部にある 「Tools」 ボタンをクリックします。

「Network Configuration Test」画面が表示されます。



2. 「Test Type」リストボックスから「Ping」または「Ping6」を選択します。
IPv4 ネットワーク構成用の Ping テストを選択します。IPv6 ネットワーク構成用の Ping6 テストを選択します。
3. IPv4 または IPv6 テストの宛先アドレスを「Destination」フィールドに入力して、「Test」をクリックします。
テストに成功すると、「Network Configuration Test」画面の「Destination」フィールドの下に「Ping of ip_address succeeded」というメッセージが表示されます。

▼ Oracle ILOM の終了

- Oracle ILOM セッションを終了するには:
 - Oracle ILOM CLI から、CLI プロンプトで「exit」と入力します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースから、ページの右上隅にある「Log Out」ボタンをクリックします。

Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定

このセクションでは、サポートされる Oracle Solaris、Oracle VM、Linux、または Windows OS オペレーティングシステム (OS) をインストールする準備として、Oracle System Assistant を起動してサーバーを設定する方法について説明します。OS をインストールしたあと、Oracle System Assistant を使用して、サーバーとそのコンポーネントを最新のソフトウェアおよびファームウェアに更新できます。

説明	リンク
Oracle ILOM から Oracle System Assistant をリモートで起動します。	81 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した Oracle System Assistant のリモートでの起動」
Oracle System Assistant をローカルで起動します。	86 ページの「Oracle System Assistant のローカルでの起動」

関連項目: Oracle System Assistant の詳細は、『[Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』 (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

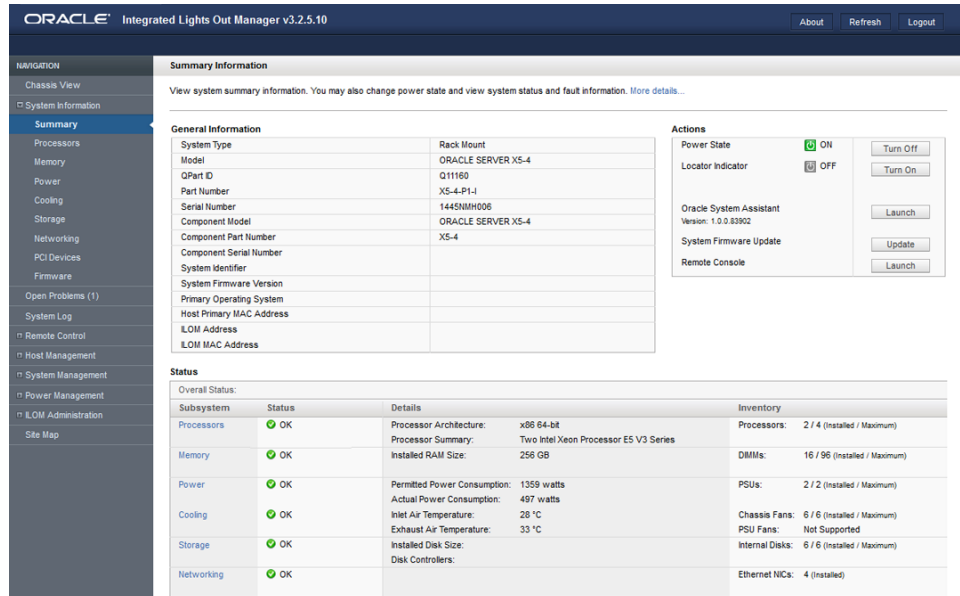
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した Oracle System Assistant のリモートでの起動

Oracle System Assistant をリモートで起動するには、Oracle ILOM Web インタフェースを使用します。

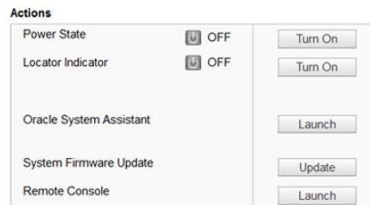
始める前に Oracle ILOM をリモート Ethernet アクセス用に設定します。[68 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#) を参照してください。

1. **Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。**
ブラウザのアドレスフィールドに、サーバーの SP の IP アドレスを入力します。

「System Summary」画面が表示されます。

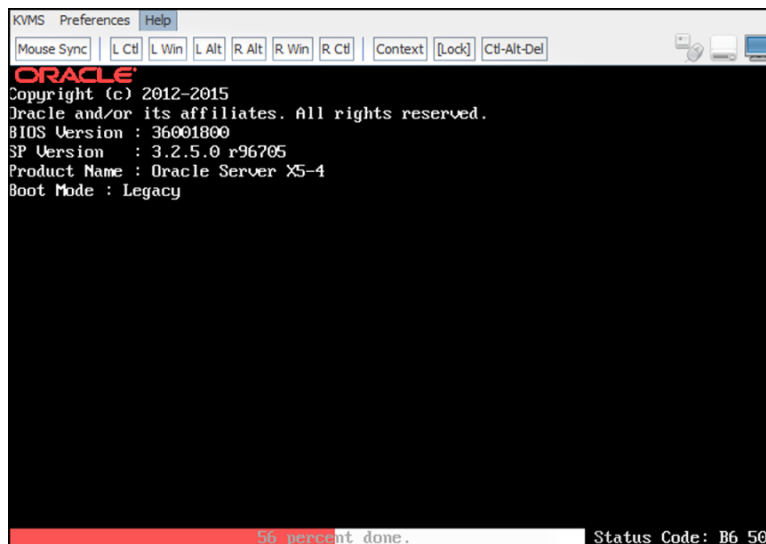


- 必要に応じて、「Summary」画面の「Actions」セクションで、サーバーの電源を切ります。

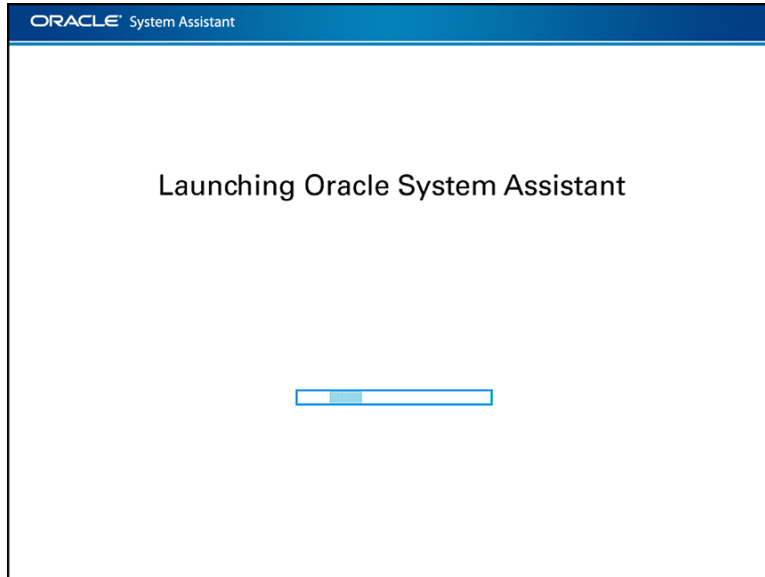


- 「Power State」インジケータがサーバーの電源が切れていることを示したら、「Summary」画面の「Actions」セクションで、「Oracle System Assistant Launch」ボタンをクリックします。
ダイアログボックスが表示されます。Oracle System Assistant を表示するには、リモートコンソールセッションを開始する必要があります。
- リモートコンソールセッションを開始するには、「Continue」をクリックします。

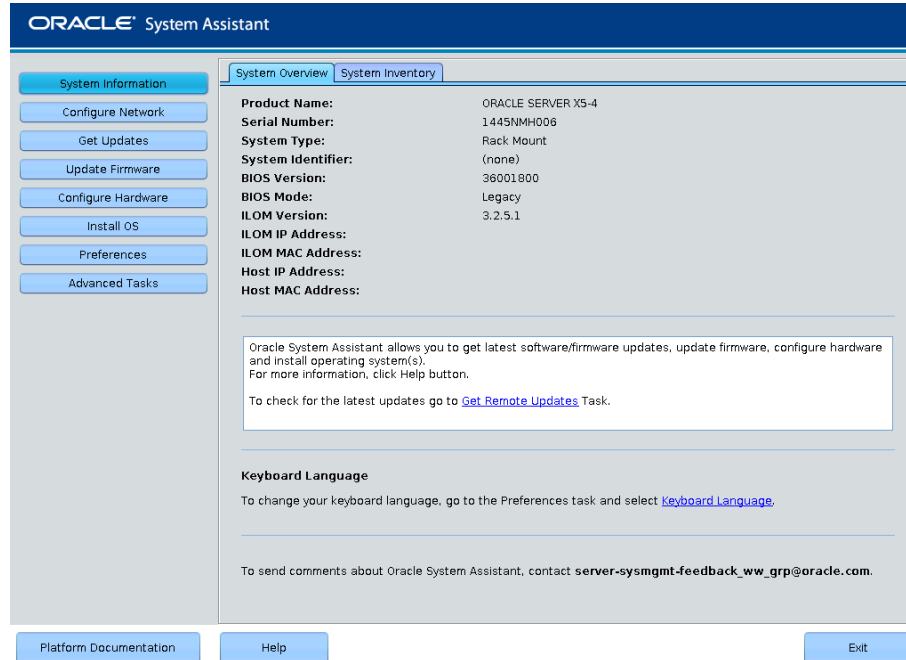
リモートコンソールセッションが表示され、サーバーの BIOS ブートメッセージが画面に表示されます。



数分たつと「Launching Oracle System Assistant」画面が表示されます。



次に、Oracle System Assistant のメイン画面が表示されます。



5. Oracle System Assistant を使用して、次の表に示されている順序でタスクを実行します。

Oracle System Assistant の使用の詳細は、『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)または Oracle System Assistant に関する組み込みのヘルプを参照してください。

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面
1	Oracle System Assistant のネットワーク接続を設定します。	Configure Network
2	最新のソフトウェアとファームウェアの更新を入手します。	Get Updates
3	Oracle ILOM、BIOS、ディスクエクspanda、HBA ファームウェアを必要に応じて更新します。	Update Firmware
4	Oracle ILOM を構成します。	「Configure Hardware」 > 「Service Processor Configuration」

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面
5	RAID を構成します。 注記 - インストール済みの OS を含むディスクでは、このオプションを使用しないでください。	「Configure Hardware」 > 「RAID Configuration」
6	Oracle System Assistant の「Install OS」ウィザードを使用して、オペレーティングシステムをインストールします。サポートされているオペレーティングシステムには、Oracle Solaris、Linux、Windows、または Oracle VM ソフトウェアが含まれます。 注記 - インストール済みの OS がシステムに付属していた場合は、このオプションを使用しないでください。	Install OS

次の手順 [93 ページの「OS インストール用のサーバードライブの構成」](#)

▼ Oracle System Assistant のローカルでの起動

Oracle System Assistant をローカルで起動するには、この手順を使用します。

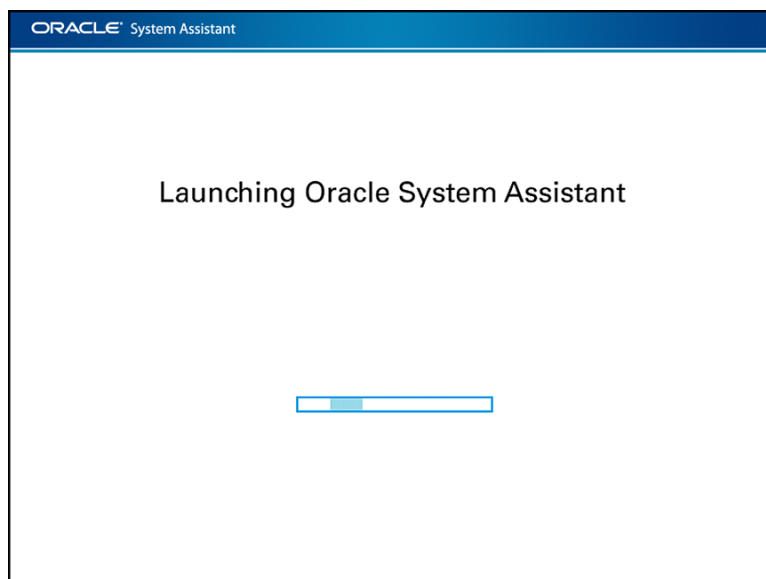
始める前に Oracle System Assistant をローカルで起動するには、物理的にサーバーのところにいて、かつ次のデバイスがサーバーに接続されている必要があります。

- VGA モニター
- USB キーボード
- USB マウス

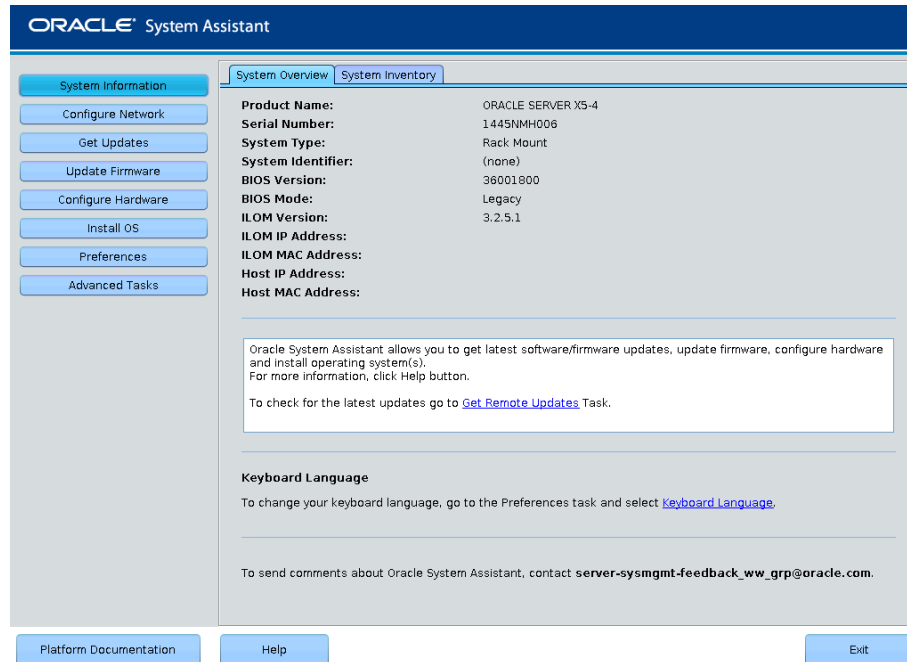
1. サーバーの電源が切断され、スタンバイ電源モードになっていることを確認します。
[55 ページの「スタンバイ電源モード」](#)を参照してください。
2. デバイスをサーバーに接続します。
コネクタとポートの位置については、[26 ページの「フロントおよびバックパネルの機能」](#)を参照してください。
 - a. VGA モニターをサーバーの前面にあるビデオポートに接続します。
 - b. USB キーボードおよびマウスを USB コネクタに接続します。
3. サーバーの電源を入れて全電力モードにするには、サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押します。
サーバーがブートし、BIOS ブートメッセージがモニターに表示されます。
4. 画面にファンクションキーオプションの一覧が表示されることを確認します。

Oracle System Assistant の機能するバージョンがサーバーにインストールされている場合は、オプションの一覧に「Press F9 to start Oracle System Assistant」が含まれています。

5. **Oracle System Assistant を起動するには、F9 ファンクションキーを押します。**
サーバーが初期化し、数分たつと Oracle System Assistant が起動します。



Oracle System Assistant の「System Overview」画面が表示されます。



6. Oracle System Assistant を使用して、次の表に示されている順序でタスクを実行します。

タスクは、左側のナビゲーションパネルにあります。

Oracle System Assistant の使用の詳細は、「Help」ボタンをクリックするか、または『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』 (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)を参照してください。

手順	タスク	Oracle System Assistant のタスク
1	Oracle System Assistant のネットワーク接続を設定します。	Network Configuration
2	最新のソフトウェアとファームウェアの更新を入手します。	Get Updates
3	Oracle ILOM、BIOS、ディスクエクスパンダ、HBA ファームウェアを必要に応じて更新します。	Update Firmware

手順	タスク	Oracle System Assistant のタスク
4	Oracle ILOM を構成します。	「Configure Hardware」 > 「Service Processor Configuration」
5	RAID を構成します。 注記 - インストール済みの OS を含むディスクでは、このオプションを使用しないでください。	「Configure Hardware」 > 「RAID Configuration」 このタスクの実行の詳細は、 Broken Link (Target ID: GMPNC) にリストされています。
6	Oracle System Assistant の「Install OS」ウィザードを使用して、オペレーティングシステムをインストールします。サポートされているオペレーティングシステムには、Oracle Solaris、Linux、Windows、または Oracle VM ソフトウェアが含まれます。 注記 - インストール済みの OS がシステムに付属していた場合は、このオプションを使用しないでください。	Install OS

次の手順 [93 ページの「OS インストール用のサーバードライブの構成」](#)

オペレーティングシステムのインストール

このセクションでは、サーバストレージドライブを構成したり、オペレーティングシステム (OS) をインストールしたり、インストール済みの OS を設定したりする方法について説明します。

タスク	リンク
オペレーティングシステムをインストールする準備としてサーバストレージドライブを設定します。	93 ページの「OS インストール用のサーバードライブの構成」
該当する場合は、出荷時にインストール済みのオペレーティングシステムまたは仮想マシンソフトウェアを構成します。	94 ページの「インストール済みのオペレーティングシステムの構成」

OS インストール用のサーバードライブの構成

このセクションでは、オペレーティングシステム (OS) をインストールする準備としてサーバーストレージドライブを構成し、ブートディスクを作成する方法について説明します。

説明	リンク
ストレージドライブ構成オプションについて学習します。	93 ページの「ドライブ構成オプション」
Oracle System Assistant を使用してサーバーストレージドライブを RAID ボリュームに構成します。	95 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」
BIOS RAID 構成ユーティリティを使用してサーバーストレージドライブを RAID ボリュームに構成します。	104 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成」
オペレーティングシステムのインストールと更新タスクについて学習します。	115 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」

ドライブ構成オプション

オペレーティングシステム (OS) をインストールするには、少なくとも 1 つのブート可能な RAID ボリュームを構成しておく必要があります。複数のサーバーストレージドライブを 1 つまたは複数のブート可能な RAID ボリュームに構成するか、または単一のストレージドライブを 1 つのブート可能な RAID ボリュームとして構成できます。選択する構成には関係なく、OS はブート可能なボリュームにインストールする必要があります。ただし、サーバーにインストール済みの OS を含むストレージドライブが存在する場合は、その OS をブートして OS 設定を構成するだけで済みます。インストール済みの OS を含むストレージドライブを RAID ボリュームとして構成すると、RAID ボリュームを準備するプロセスによってそのドライブの内容 (インストール済みの OS) が削除されてしまうため、この構成は行わないでください。

次のいずれかのドライブ構成オプションを選択します。

- サーバーにインストール済みの OS を含むストレージドライブが存在する場合は、[94 ページの「インストール済みのオペレーティングシステムの構成」](#)を参照してください。

- サーバーにインストール済みの OS を含むストレージドライブが存在しない場合は、[94 ページの「RAID ボリュームの構成」](#)を参照してください。

インストール済みのオペレーティングシステムの構成

オプションの出荷時にインストール済みの OS を購入した場合は、OS を含むブートドライブがすでに作成され、サーバーに取り付けられています。インストール済みの OS イメージを含むシステムの場合は、OS 設定を構成する必要があります。これを行うには、次のいずれかのセクションを参照してください。

- [117 ページの「インストール済みの Oracle Solaris OS の構成」](#)
- [123 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」](#)
- [127 ページの「インストール済みの Oracle VM ソフトウェアの構成」](#)

RAID ボリュームの構成



注意 - データが失われます。インストール済みの OS ブートドライブを RAID ボリュームとして構成すると、そのドライブの内容が削除されます。インストール済みの OS ブートドライブを RAID ボリュームとして構成しないでください。詳細は、[94 ページの「インストール済みのオペレーティングシステムの構成」](#)を参照してください。

OS をインストールするには、サーバーストレージドライブを構成しておく必要があります。複数のサーバーストレージドライブを 1 つまたは複数の RAID ボリュームに構成するか、または単一のストレージドライブを 1 つの RAID ボリュームとして構成できます。選択する構成には関係なく、少なくとも 1 つのボリューム (OS ボリューム) をブート可能にする必要があります。OS はブート可能なボリュームにインストールする必要があります。

サーバーストレージドライブを構成するには、Oracle System Assistant か、または HBA 上に存在する LSI MegaRAID BIOS 構成ユーティリティーを使用できます。

注記 - Oracle System Assistant は、使いやすいインタフェースや状況依存ヘルプを提供するため、サーバーの設定や、サーバーストレージドライブの構成のための推奨される方法です。

- [95 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」](#)
サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれている場合は、この手順を使用します。

- 104 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用した RAID の構成」。
サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれていない場合は、この手順を使用します。

▼ Oracle System Assistant を使用した RAID の構成

オペレーティングシステム (OS) をインストールする前に、その OS 用に少なくとも 1 つのブート可能な RAID ボリュームを作成する必要があります。ストレージドライブに内蔵 Sun Storage 12 Gb SAS PCIe 8 ポート HBA によって作成されたボリュームが存在しないかぎり、システムはそのストレージドライブを認識しません。

注記 - Oracle Server X5-4 は、Sun Storage 12 Gb SAS PCIe 8 ポート HBA を使用します。この HBA は、SGX-SAS12-R-INT-Z と呼ばれます。

ブート可能な RAID ボリュームを作成するには、Oracle System Assistant の「RAID Configuration」タスクを使用します。「RAID Configuration」タスクは、「Configure Hardware」タスクペインにあります。

始める前に あらかじめ BIOS 設定ユーティリティーから BIOS ブートモード (UEFI またはレガシー) を選択しておいてください。

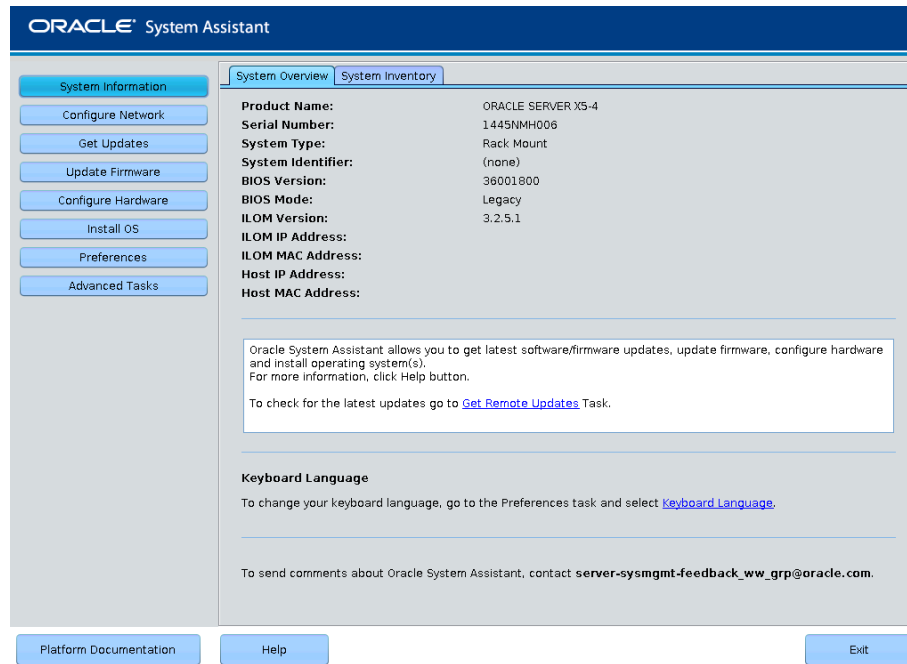
注記 - RAID ボリュームを認識できるようにするには、RAID 構成に使用される BIOS ブートモードが OS をインストールするときに使用するモードに一致している必要があります。BIOS ブートモードを切り替える手順については、『[Oracle X5 シリーズ サーバー管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』 (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

1. Oracle System Assistant を起動します。

81 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」を参照してください。

Oracle System Assistant の「System Overview」画面が表示されます。

注記 - 表示される画面の情報が、この手順で示されるものとは異なることがあります。



2. 「Configure Hardware」 ボタンをクリックして、「RAID Configuration」 タブを選択します。

3. 「HBA」 リストボックスで、「12 GB SAS PCIe RAID Internal HBA」を選択します。

ORACLE System Assistant

RAID Configuration | Service Processor Configuration | Restore BIOS Defaults

HBA: Oracle Storage 12 Gb SAS PCIe RAID HBA, internal | HBA Info | Refresh Screen

To create a volume, first select RAID level. Then allocate disks to the volume.
To learn more about RAID levels, click the Help button.

Select RAID level: [v]

Available Disks

Select To Allocate	Device	Vendor	Size (GB)	Type	State	Details/Actions
<input type="checkbox"/>	Slot:1 (c0d0)	SEAGATE	2795	SAS	OK	Details
<input type="checkbox"/>	Slot:2 (c0d1)	SEAGATE	2795	SAS	OK	Details
<input type="checkbox"/>	Slot:3 (c0d2)	SEAGATE	2795	SAS	OK	Details
<input type="checkbox"/>	Slot:4 (c0d3)	SEAGATE	2795	SAS	OK	Details
<input type="checkbox"/>	Slot:5 (c0d4)	SEAGATE	2795	SAS	OK	Details

Create Volume

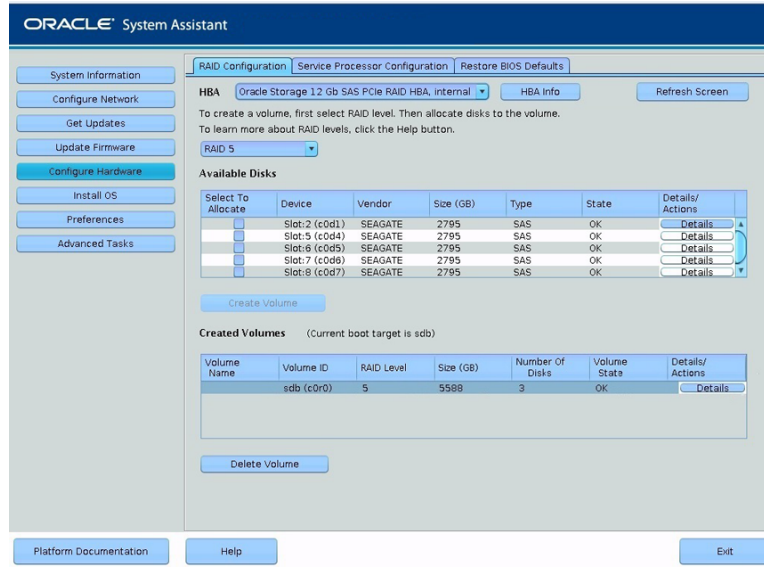
Created Volumes

Volume Name	Volume ID	RAID Level	Size (GB)	Number Of Disks	Volume State	Details/Actions
-------------	-----------	------------	-----------	-----------------	--------------	-----------------

Delete Volume

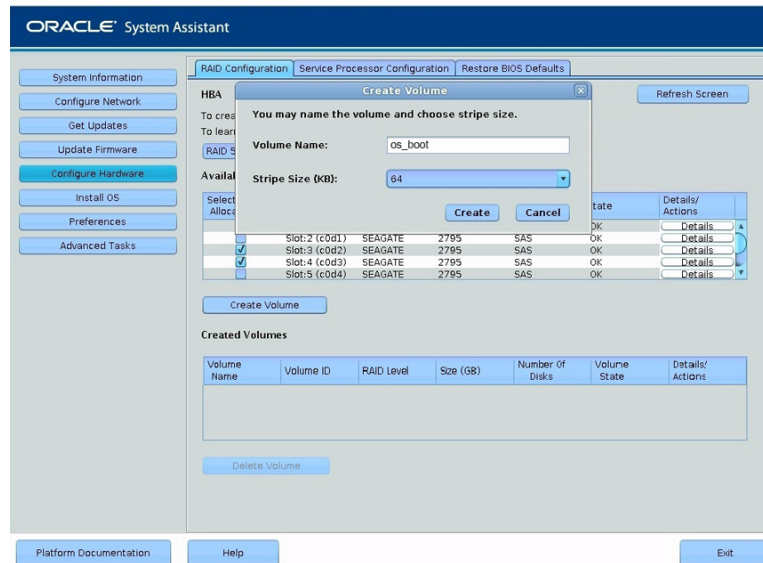
Platform Documentation | Help | Exit

4. 「Select RAID Level」 リストボックスで、目的の RAID レベルを選択します。



5. 「Available Disks」表で、RAID ボリュームに追加するストレージドライブを選択し、「Create Volume」ボタンをクリックします。

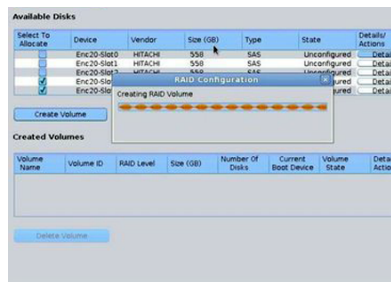
「Create Volume」ダイアログボックスが表示されます。



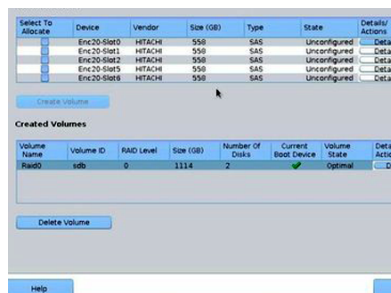
6. 「Create Volume」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。
 - a. (オプション) ボリューム名を入力します。

ボリューム名の入力はオプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。
 - b. ボリュームのストライプサイズを選択します。
 - c. 「Create」をクリックします。

「Creating RAID Volume」情報ボックスが表示されます。

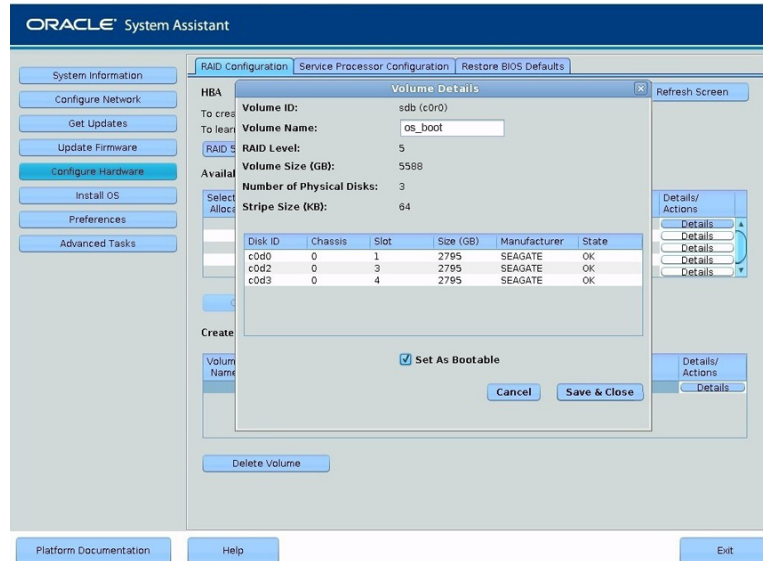


ボリュームが作成されると、そのボリュームは「Created Volumes」表に表示されます。



- 「Created Volumes」表の「Details/Action」列にある「Details」ボタンをクリックします。

「Volume Details」ダイアログボックスが表示されます。

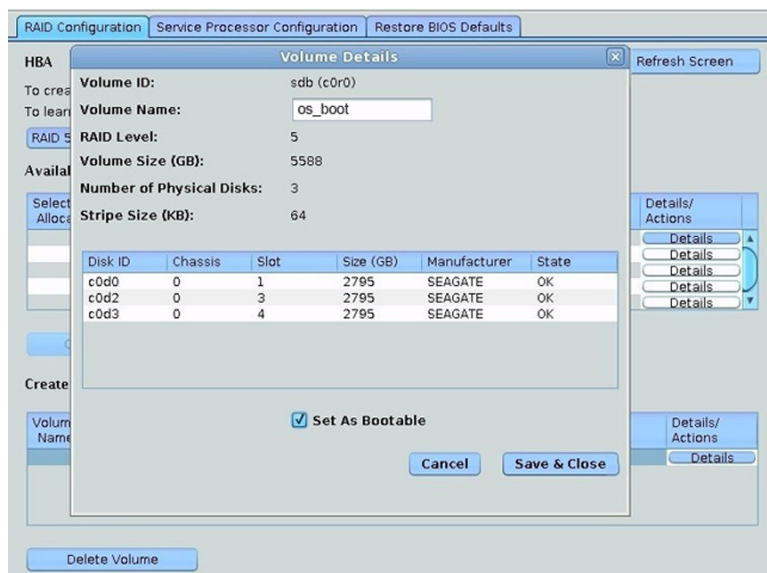


8. 「Volume Details」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。
 - a. ボリュームの詳細を確認します。
 - b. (オプション)「Volume Name」フィールドで、ボリューム名を入力するか、または変更します。

以前にボリューム名を入力しなかった場合は、この「Volume Details」ダイアログボックスでも入力する機会が与えられます。以前にボリューム名を入力している場合は、ここで変更できますが、名前を完全に削除することはできません。

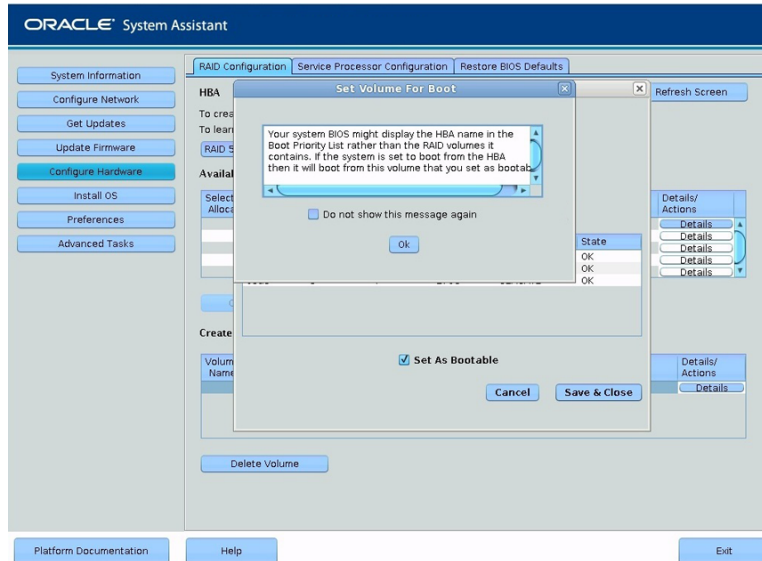
注記 - ボリュームに名前を付けることはオプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。さらに、任意のタイミングでボリューム名を変更する必要がある場合、「Created Volumes」表の「Details」ボタンをクリックすることでそれを実行できますが、いったん割り当てられたボリューム名を削除することはできません。

- c. 「Set As Bootable」ボックスにチェックマークを付けます。



- d. 「Save & Close」をクリックします。

「Set Volume For Boot」 確認ダイアログが表示されます。



9. 「OK」 をクリックします。

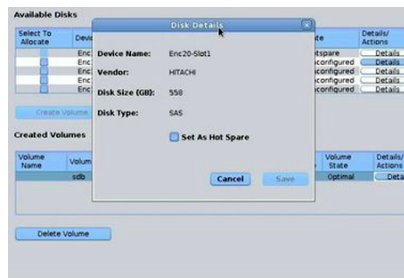
「RAID Configuration」 画面が表示され、「Created Volumes」表にボリュームが、その「Current Boot Device」列にチェックマークを付けて表示されます。

Volume Name	Volume ID	RAID Level	Size (GB)	Number of Disks	Current Boot Device	Volume State	Details/Actions
RAID0	s0b	0	1114	2	<input checked="" type="checkbox"/>	Optimal	Details
RAID1	s0c	1	557	2	<input type="checkbox"/>	Optimal	Details
RAID10	s0d	10	1114	4	<input type="checkbox"/>	Optimal	Details

10. 作成されたボリュームをグローバルホットスペアとして指定する場合は、次の手順を実行します。それ以外の場合は、次のステップに進みます。

- a. 「Details/Actions」列にある「Details」ボタンをクリックします。

「Disk Details」 ダイアログボックスが表示されます。



b. 「Set as Hot Spare」 ボックスにチェックマークを付けます。

注記 - Sun Storage 12G バイト SAS PCIe RAID 内蔵 HBA では、最大 256 のホットスペアを作成できます。

c. 「Save」 をクリックします。

ヒント - ボリュームを削除する場合は、そのボリュームを選択してから「Delete Volume」 ボタンをクリックします。

これで、OS インストールのためのサーバーの準備が整いました。

次の手順 [115 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」](#)

BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成

オペレーティングシステム (OS) をインストールする前に、少なくとも 1 つのブート可能な RAID ボリュームを作成する必要があります。ストレージドライブに内蔵 Sun Storage 12 Gb SAS PCIe 8 ポート HBA によって作成されたボリュームが存在しないかぎり、システムはそのストレージドライブを認識しません。ブート可能な RAID ボリュームを作成するには、LSI MegaRAID BIOS 構成ユーティリティを使用します。

LSI MegaRAID BIOS 構成ユーティリティは、HBA ファームウェア内に存在しません。HBA ファームウェアへのアクセスは、サーバーの BIOS ブートモードの設定によって異なります。サーバーがレガシーブートモードに設定されている場合は、サーバーのブート画面からこのユーティリティにアクセスできます。サーバーが UEFI

ブートモードに設定されている場合は、サーバーの BIOS 設定ユーティリティを使用してこのユーティリティにアクセスできます。

注記 - オペレーティングシステムや仮想マシンソフトウェアの中には、レガシー BIOS ブートモードしかサポートしないものもあります。UEFI BIOS ブートモードをサポートしていないオペレーティングシステムと仮想マシンソフトウェアの一覧については、[63 ページの「サーバーの BIOS ブートモード」](#)を参照してください。

- [105 ページの「UEFI ブートモードでの RAID の構成」](#)
- [111 ページの「レガシーブートモードでの RAID の構成」](#)

▼ UEFI ブートモードでの RAID の構成

注記 - Oracle System Assistant は、使いやすいインターフェースや状況依存ヘルプを提供します。これは、サーバーの設定や、サーバーストレージドライブの構成のための推奨される方法です。

サーバーが UEFI ブートモードに設定され、かつ Oracle System Assistant がサーバーにインストールされていない場合に LSI MegaRAID BIOS 構成ユーティリティにアクセスするには、この手順を使用します。

始める前に サーバーがスタンバイ電源モードにあることを確認してください ([55 ページの「スタンバイ電源モード」](#)を参照してください)。

1. サーバーの電源を入れるには、次のいずれかを行います。

- **ローカルサーバーから:**
フロントパネルの電源ボタンを押してすぐに離します (約 1 秒)。
- **Oracle ILOM Web インタフェースから:**
「Summary」画面の「Actions」セクションで、サーバーの電源の「Turn On」ボタンをクリックします。

- **Oracle ILOM CLI から:**
「`reset /system`」と入力します。

BIOS 画面が表示されます。

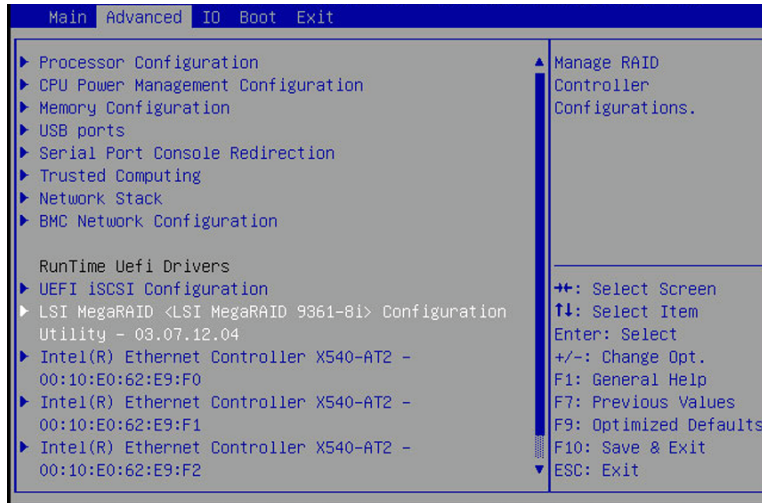
2. BIOS 設定ユーティリティにアクセスするには、画面を注視し、ファンクションキーの一覧が表示されたら F2 キーを押します。

BIOS 設定ユーティリティーが表示されます。

3. 「Advanced」メニューに移動します。

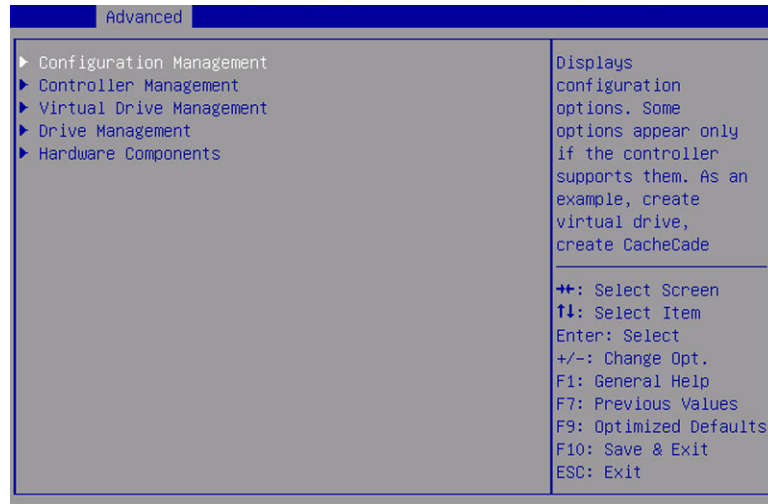
矢印キーを使用します。

注記 - 表示される画面が、この手順で示されるものとは異なることがあります。

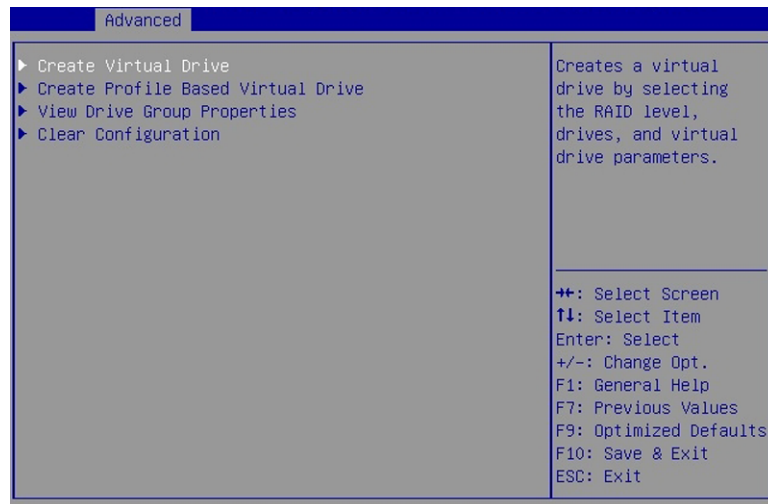


4. 「LSI MegaRAID Configuration Utility」メニューオプションに移動して、Enter キーを押します。

LSI MegaRAID Configuration Utility のメニューが表示されます。

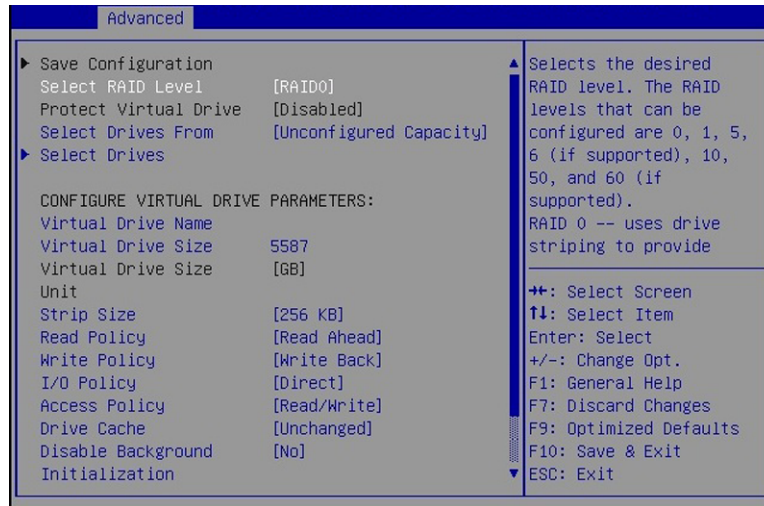


5. 「Virtual Drive Management」 オプションに移動して、Enter キーを押します。
「Virtual Drive Management」メニュー画面が表示されます。

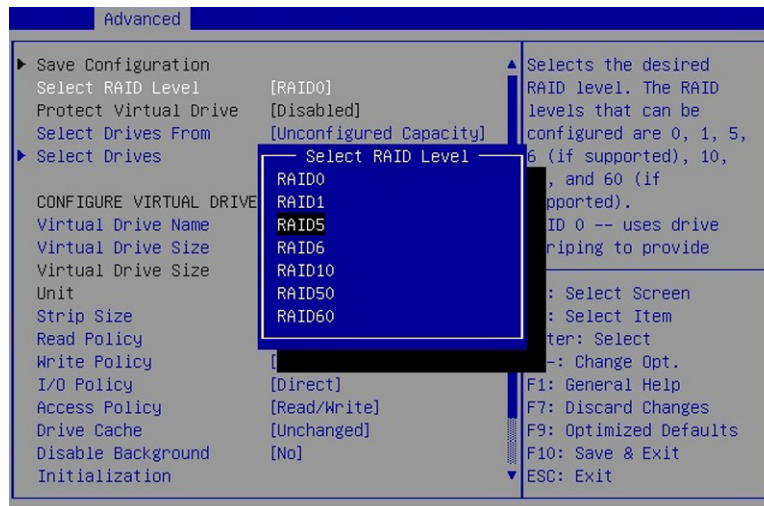


6. 「Create Configuration」 オプションに移動して、Enter キーを押します。

「Create Configuration」メニュー画面が表示されます。

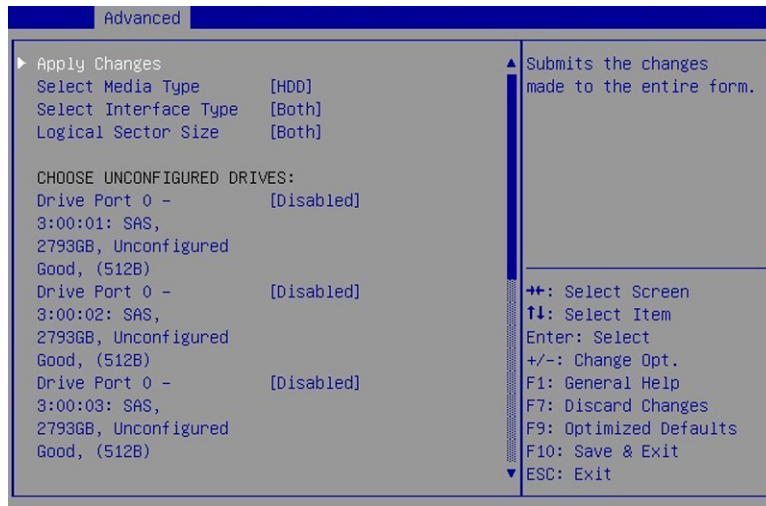


7. 「Select RAID Level」オプションに移動して、Enter キーを押します。
「Select RAID Level」ダイアログボックスが表示されます。



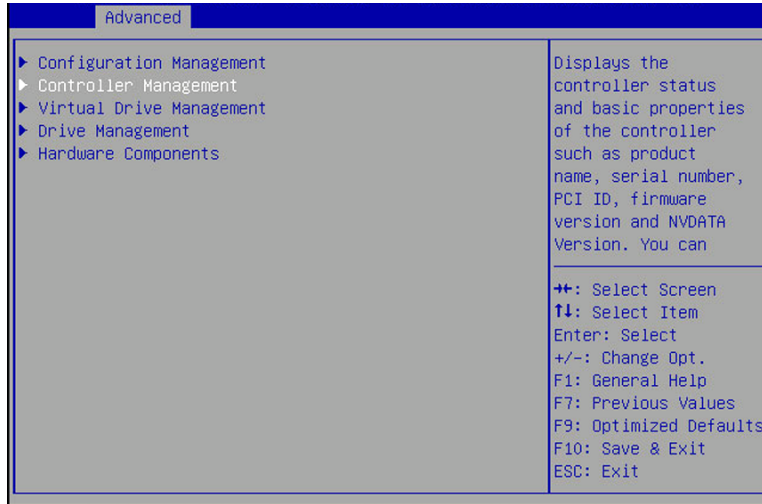
8. 目的の RAID レベルを選択し、Enter キーを押します。

9. 「Select Drives」オプションに移動して、Enter キーを押します。
「Drive Selection」画面が表示されます。

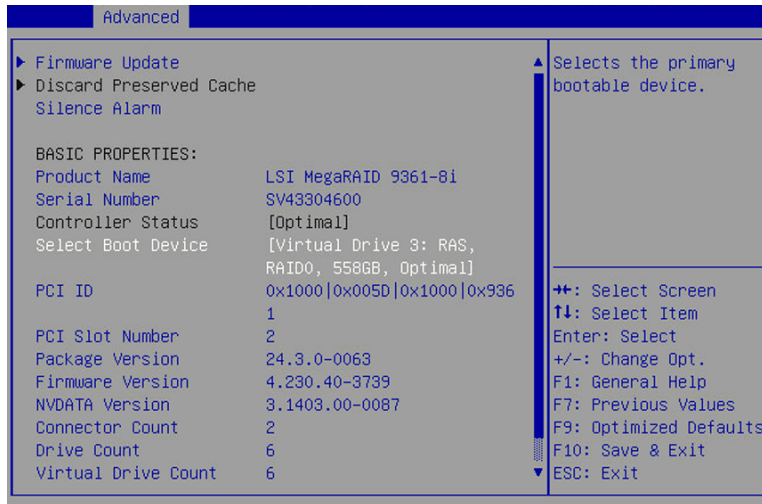


10. メディアタイプ、インターフェースタイプを選択し、RAID 構成に含めるドライブを選択します。
11. 「Apply Changes」オプションに移動して、Enter キーを押します。
「RAID Configuration Confirmation」画面が表示されます。
12. 「OK」を選択し、Enter キーを押して RAID の確認を受け入れます。
これにより、RAID の構成が完了します。

13. 仮想ドライブをブート可能にするには、「Advanced」メニューの最上位に移動します。

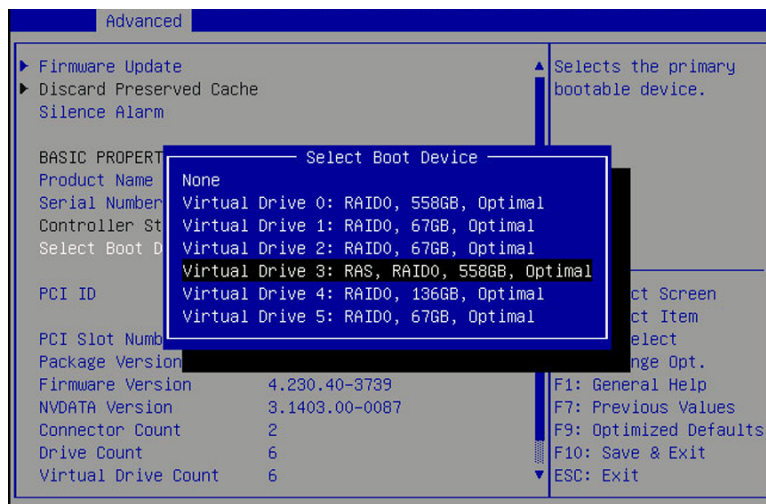


14. 「Controller Management」の選択に移動して、Enter キーを押します。「Controller Management」画面が表示されます。



15. 「Select Boot Device」の選択に移動して、Enter キーを押します。

作成した仮想ドライブの候補の一覧を含む「Select Boot Device」画面が表示されます。



16. 候補の一覧から、ドライブに移動して、**Enter** キーを押します。
17. 「**Apply Changes**」の選択に移動して、**Enter** キーを押します。
確認画面が表示されます。
18. 変更を確認します。
19. **F10** キーを押して変更を保存し、**BIOS 設定ユーティリティ**を終了します。

次の手順 [115 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」](#)

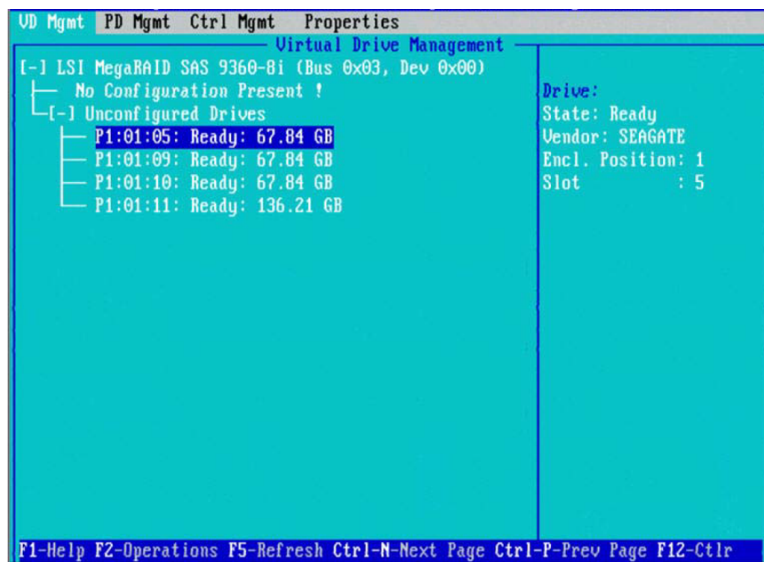
▼ レガシーブートモードでの RAID の構成

注記 - Oracle System Assistant は、使いやすいインターフェースや状況依存ヘルプを提供します。これは、サーバーの設定や、サーバーストレージドライブの構成のための推奨される方法です。

サーバーがレガシーブートモードに設定され、かつ Oracle System Assistant がサーバーにインストールされていない場合に LSI MegaRAID BIOS 構成ユーティリティにアクセスするには、この手順を使用します。

- 始める前に
- LSI MegaRAID BIOS 構成ユーティリティーを使用したシステムドライブの構成に関する追加の手順については、<http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/index.aspx> にある 12 Gb SAS PCIe 8 ポート HBA のユーザーズガイドを参照してください。
 - サーバーの近くに居る場合は、システムプロンプトに応答したり、ユーティリティー内を移動したりできるように、サーバーの前面に VGA モニターと USB キーボードおよびマウスを接続してください。サーバーから離れている場合は、Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用します。
 - サーバーがスタンバイ電源モードにあることを確認してください (55 ページの「スタンバイ電源モード」を参照してください)。
1. **サーバーの電源を入れるには、次のいずれかを行います。**
 - **ローカルサーバーから:**
フロントパネルの電源ボタンを押してすぐに離します。
 - **Oracle ILOM Web インタフェースから:**
「Summary」画面の「Actions」セクションで、サーバーの電源の「Turn On」ボタンをクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI から:**
「`reset /System`」と入力します。
サーバーに電源が投入され、BIOS ブートメッセージが表示されます。
 2. **画面に次のプロンプトが表示されることを確認します。**
Press Ctrl><R> for WebBIOS....
 3. **LSI MegaRAID ユーティリティーにアクセスするには、Ctrl+R を押します。**

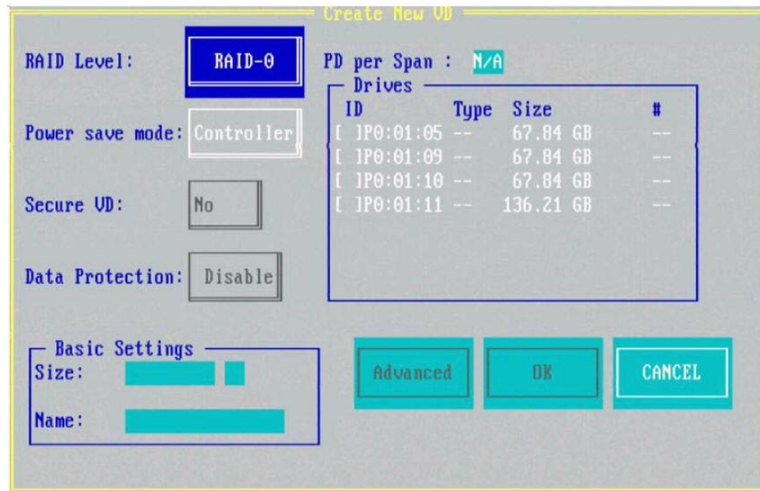
仮想ドライブ管理 (VD 管理) 画面が表示されます。



```
VD Mgmt PD Mgmt Ctrl Mgmt Properties
Virtual Drive Management
[-] LSI MegaRAID SAS 9360-Bi (Bus 0x03, Dev 0x00)
  No Configuration Present !
  [-] Unconfigured Drives
    P1:01:05: Ready: 67.84 GB
    P1:01:09: Ready: 67.84 GB
    P1:01:10: Ready: 67.84 GB
    P1:01:11: Ready: 136.21 GB
Drive:
State: Ready
Vendor: SEAGATE
Encl. Position: 1
Slot : 5
F1-Help F2-Operations F5-Refresh Ctrl-N-Next Page Ctrl-P-Prev Page F12-Ctrl
```

4. コントローラに移動して、F2 キーを押します。
5. Enter キーを押します。

「Create New VD」画面が表示されます。



6. 仮想ドライブのパラメータを設定します。

「Create New VD」画面を使用して、次のことを行います。

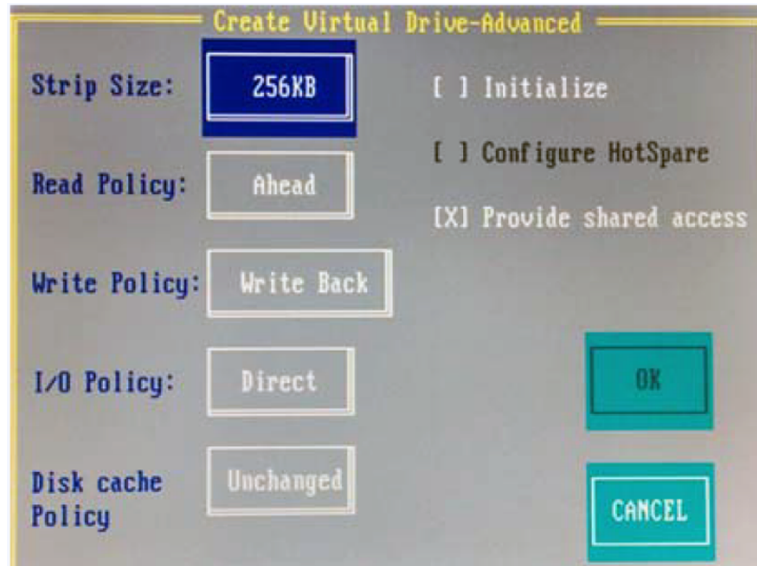
- RAID レベルを設定します。
- エネルギー節減モードを「Auto」、「Max」、または「Controller defined」に設定します。
- 「Secure VD」フィールドを使用してデータ暗号化を設定します。
- 「Data Protection」フィールドを使用してデータ保護機能を使用します。
- 「Drive」ボックス内の物理ドライブの順序を調整します。
- 「Basic Settings」ボックスにドライブグループのサイズとグループ名を入力します。

7. 「OK」をクリックします。

「Create New VD」画面がふたたび表示されます。

8. 「Create New VD」画面で、「Advanced」をクリックします。

「Create Virtual Drive - Advanced」画面が表示されます。



9. 「Initialize」チェックボックスを選択します。
10. ドライブを作成して初期化するには、「OK」をクリックします。
11. 仮想ドライブをブート可能にするには、Ctrl-N キーの組み合わせを使用して「Ctrl Mgmt」メニュータブに移動します。
「Controller Settings」画面が表示されます。
12. 矢印キーを使用して「Boot Device」フィールドに移動し、Enter キーを押してブート可能デバイスの一覧を取得します。
13. 仮想ドライブを選択します。
14. 「Apply」をクリックします。

オペレーティングシステムおよびドライバの設定

ドライブを構成したら、使用するサーバーでサポートされる OS をインストールできます。次の表で、サポートされる OS のインストールに関する情報にアクセスする方法について説明します。

実行するタスク	参照ドキュメント
サポートされている OS をインストールし、ドライバを更新する	<ul style="list-style-type: none"><li data-bbox="932 373 1409 422">■ 『Oracle Server X5-4 Installation Guide for Oracle Solaris Operating System 』<li data-bbox="932 428 1409 476">■ 『Oracle Server X5-4 Installation Guide for Linux Operating Systems』<li data-bbox="932 483 1409 531">■ 『Oracle Server X5-4 Installation Guide for Oracle VM Server』<li data-bbox="932 537 1409 590">■ 『Oracle Server X5-4 Installation Guide for Microsoft Windows Operating System』

インストール済みの Oracle Solaris OS の構成

このセクションでは、Oracle Solaris OS のインストール済みのバージョンを構成する方法について説明します。インストール済みの OS オプションを購入した場合は、OS を構成することによってインストールを完了します。インストール済みの OS イメージには、使用しているサーバーモデルに必要なすべてのドライバが含まれています。

注記 - サポートされる OS バージョンに関する最新情報については、『[Oracle Server X5-4 Product Notes](#)』を参照してください。

次の各セクションの手順を、一覧表示されている順序で実行します。

手順	タスク	リンク
1	使用しているサーバー環境の構成ワークシートに記入します。	117 ページの「Oracle Solaris OS 構成ワークシート」
2	インストール済みの Oracle Solaris OS を構成します。	120 ページの「インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムの構成」
3	Oracle Solaris OS のドキュメントで、Oracle Solaris OS の登録、更新、および使用に関する情報を確認します。	122 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント」

Oracle Solaris OS 構成ワークシート

次の情報を収集し、構成プロセスを開始するための準備を整えます。組織とネットワーク環境に適用される情報のみを収集します。

インストールのための情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
言語	OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	

インストールのための情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
ネットワーク接続	システムがネットワークに接続されているかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークに接続されている ■ ネットワークに接続されていない*
DHCP	システムで動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用してネットワークインタフェースを設定できるかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*
DHCP を使用しない場合は、ネットワークアドレスを入力します。	<p>IP アドレス</p> <p>DHCP を使用しない場合は、システムの IP アドレスを入力します。</p> <p>例: 192.168.100.1</p>	
サブネット	<p>DHCP を使用しない場合、システムはサブネットの一部かどうか。</p> <p>そうである場合、サブネットのネットマスクは何か。</p> <p>例: 255.255.255.0</p>	255.255.0.0*
IPv6	このマシンで IPv6 を有効にするかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*
ホスト名	システムのホスト名を選択します。	
Kerberos	このマシンで Kerberos セキュリティーを構成しますか?	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ* <p>「はい」の場合、この情報を収集します。</p> <p>デフォルトレルム:</p> <p>管理サーバー:</p> <p>第 1 KDC:</p> <p>(オプション) 追加の KDC:</p>
ネームサービス	<p>ネームサービス</p> <p>該当する場合は、このシステムで使うネームサービスを入力してください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ NIS+ ■ NIS ■ DNS ■ LDAP ■ なし*
ドメイン名	<p>システムが所属するドメインの名前を入力します。</p> <p>DNS または NIS</p>	
NIS+ および NIS	<p>NIS+ または NIS を選択した場合、ネームサーバーを指定しますか、それともインストールプログラムに検索させますか。</p> <p>NIS を選択した場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ NIS ドメインを指定する、または 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 指定する ■ 検索する*

インストールのための情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
DNS	<p>■ NIS サーバーを指定するか検索するかを指定する。</p> <p>DNS を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 つ以上の IP アドレスを入力する必要があります。最大で 3 つのアドレスを入力できます。</p> <p>また、DNS クエリーを行う際に検索する DNS ドメインのリストを入力することもできます。</p>	<p>検索ドメイン:</p> <p>検索ドメイン:</p> <p>検索ドメイン:</p>
LDAP	<p>LDAP を選択した場合、LDAP プロファイルに関する情報を入力します。</p>	<p>プロファイル名:</p> <p>プロファイルサーバー:</p> <p>LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します。</p> <p>プロキシバインド識別名:</p> <p>プロキシバインドパスワード:</p>
デフォルトルート	<p>デフォルトのルート IP アドレスを指定しますか、それとも OS インストールプログラムに検索させますか。</p> <p>デフォルトルートは、2 つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。</p> <p>次の選択肢があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ IP アドレスを指定できます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムのレポート時に、指定した IP アドレスがデフォルトのルートになります。 ■ OS インストールプログラムに IP アドレスを検出させることができます。ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上にあり、そのルーターがルーター検索用のインターネット制御メッセージプロトコル (ICMP) を使用して自身を通知している必要があります。コマンド行インタフェースを使用する場合、システムのブート時にソフトウェアが IP アドレスを検出します。 ■ ルーターを使用していないか、現時点ではソフトウェアに IP アドレスを検出させたくない場合には、「None」を選択できます。ソフトウェアは、レポート時に IP アドレスを自動的に検出しようとします。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 指定する ■ 検出する ■ なし*
タイムゾーン	<p>デフォルトのタイムゾーンを指定する方法。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 地理的地域* ■ GM からの時差 ■ タイムゾーンファイル

インストールのための情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
root パスワード	システムの root パスワードを選択します。	

▼ インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムの構成

117 ページの「Oracle Solaris OS 構成ワークシート」を完了したしたら、次の手順を使用して、インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムを構成します。

1. **Oracle ILOM Web** インタフェースまたは **CLI** にログインします。
67 ページの「Oracle ILOM への接続」を参照してください。
2. 次のいずれかの方法を使用して、サーバーの電源を入れます。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースから:
 - a. ナビゲーションツリーから、「System Information」 > 「Summary」画面を選択します。
 - b. 「Summary」画面の「Actions」セクションで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** から、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
```

入力を要求されたら、「y」と入力して確認します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

サーバーがブートプロセスを開始します。
3. リモートコンソールを起動します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースから、ナビゲーションパネルで「Remote Control」 > 「Redirection」を選択します。次に、「Launch Remote Console」ボタンをクリックして、ビデオコンソールのリダイレクトを起動します。
 - **Oracle ILOM CLI** から、CLI プロンプトで次のコマンドを入力します。


```
-> start /HOST/console
```

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

サーバーがブートしたあと、「GRUB」メニューが表示されます。次に例を示します(使用しているインストール済みのバージョンでは異なることがあります)。

```
GNU GRUB Version 1.99 ,5.11.0.175.1.0.0.24.2
```

```
Oracle Solaris 11.1 - Serial Port ttya
```

```
Oracle Solaris 11.1 - Graphics Adapter
```

注記 - 「GRUB」メニューが表示されたら、5 秒以内に選択を行なってください。

4. 「GRUB」メニューから、次のいずれかを行います。

- Oracle ILOM CLI を使用している場合は、上/下矢印キーを使用して「Serial Port (ttya)」オプションを選択し、Enter キーを押します。
- Oracle ILOM リモートコンソールプラス (または直接ビデオポート接続) を使用している場合は、上/下矢印キーを使用して「Graphics Adapter」オプションを選択し、Enter キーを押します。

注記 - 選択を行わない場合は、デフォルトで「Serial Port (ttya)」が使用されます。つまり、残りの OS 構成プロセスでは、システムがその出力をビデオポートではなく、シリアルポートに送信します。

注記 - 必要に応じて、「GRUB」メニューで「e」と入力してブート前にコマンドを編集するか、または「c」と入力してコマンド行を開始できます。

5. Oracle Solaris インストーラの画面上のプロンプトに従ってオペレーティングシステムを構成します。

117 ページの「Oracle Solaris OS 構成ワークシート」で収集された情報を使用して、入力を要求されたときのシステムおよびネットワーク情報の入力に役立っています。

表示される構成画面の順序は、サーバーにネットワーク情報を割り当てるために選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって異なることがあります。

システム構成情報を入力すると、サーバーがブートプロセスを完了し、Oracle Solaris のログインプロンプトを表示します。

参照 更新や登録を含む Oracle Solaris OS の使用については、122 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント」を参照してください。

Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント

Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメントは、次の Oracle ドキュメントの Web サイトから入手できます。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/solaris-11-192991.html>

インストール済みの Oracle Linux OS の構成

インストール済みのオペレーティングシステム (OS) オプションを購入した場合は、OS を構成することによってインストールを完了します。インストール済みの OS イメージには、使用しているサーバーモデルに必要なすべてのドライバが含まれています。このセクションでは、Oracle Linux OS のインストール済みのバージョンを構成する方法について説明します。

注記 - サポートされる OS バージョンに関する最新情報については、『[Oracle Server X5-4 Product Notes](#)』を参照してください。

次の各セクションの手順を、一覧表示されている順序で実行します。

手順	タスク	リンク
1	使用しているサーバー環境の Oracle Linux 構成ワークシートに記入します。	123 ページの「Oracle Linux 構成ワークシート」
2	インストール済みの Oracle Linux OS を構成します。	124 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」
3	Oracle Linux 6 のドキュメントで、Oracle Linux OS の登録、更新、使用についての情報を確認します。	126 ページの「Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント」

Oracle Linux 構成ワークシート

次の情報を収集し、構成プロセスを開始するための準備を整えます。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報のみを収集する必要があります。

必要なインストール情報	説明	回答
Oracle Linux の root パスワード	root パスワードを選択して、出荷時デフォルトのパスワードを置き換えます (文字や長さに制限はありません)。	
ネットワークインタフェース	サーバーのネットワークインタフェース接続 (eth#) を選択します。(Linux が稼働したら、 <code>ifconfig -a</code>	

必要なインストール情報	説明	回答
	コマンドを使用してサーバーネットワークポートを識別しやすくなります。)	
ネットワーク構成 (DHCP を使用していない場合)	サーバーの IP アドレスを入力します。 例: 172.16.9.1	
	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0	
	サーバーがゲートウェイ経由でアクセスされる場合は、そのゲートウェイの IP アドレスを指定します。 ドメインネームサーバー (DNS) の IP アドレスを指定します。必要な DNS は 1 つだけです。	

関連項目: [124 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」](#)

▼ インストール済みの Oracle Linux OS の構成

これらの手順では、サーバー上のインストール済みの Oracle Linux を構成する方法について説明します。

1. **Oracle ILOM Web** インタフェースまたは **CLI** にログインします。
[67 ページの「Oracle ILOM への接続」](#) を参照してください。
2. 次のいずれかの方法を使用して、サーバーの電源を入れます。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースから:
 - a. ナビゲーションツリーから、「System Information」 > 「Summary」画面を選択します。
 - b. 「Summary」画面の「Actions」セクションで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** から、プロンプトから次のコマンドを入力します。


```
-> start /System
```

 入力を要求されたら、「y」と入力して確認します。
 Are you sure you want to start /System (y/n)? y
 Starting /System

サーバーがブートプロセスを開始します。

3. **Oracle ILOM から、次のいずれかの方法を使用してホストコンソールを起動します。**

- **Oracle ILOM Web インタフェースから、「Remote Control」 > 「Launch Remote Console」をクリックします。**

- **Oracle ILOM CLI から、次のように入力します。**

```
->start /HOST/console
```

入力を要求されたら、「y」と入力して確認します。

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
```

注記 - 「GRUB」メニューが表示されたら、5秒以内に選択を行なってください。

サーバーがブートしたあと、「GRUB」メニューが表示されます (使用しているインストール済みのバージョンのメニューが下の例とは異なることがあります)。

```
GNU GRUB version 0.97 (612K lower / 2082932K upper memory)
```

```
+-----+
| Oracle VM Server-ovs (xen-4.1.3 2.6.39-300.32.6.el5uek)
| Oracle VM Server-ovs serial console (xen-4.1.3 2.6.39-300.32.6.el5uek)
```

```
+-----+
| Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted.
| Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
| commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments
| before booting, or 'c' for a command-line.
```

```
The highlighted entry will be booted automatically in 5 seconds.
```

4. **「GRUB」メニューから、上矢印キーと下矢印キーを使用してインストールオプションを選択し、Enter キーを押します。**

オプションには、次のものがあります。

注記 - すべてのエンタープライズアプリケーションで、Oracle Linux Server を Unbreakable Enterprise Kernel とともに選択してください。

- Unbreakable Enterprise Kernel
- Red Hat 互換カーネル

インストールオプションを選択すると、Linux がブートし、ログインプロンプトが表示されます。

例:

```
Oracle Linux Server release 6.5  
Kernel 3.8.13-16.2.1.el6uek.x86_64 on an x86_64
```

```
systemname login:
```

5. ログインします。

初回のログインでは、**root** アカウントと出荷時デフォルトのパスワード (**root**) を使用します。

6. 標準の Linux ツールを使用してサーバーの構成を完了します。タスクには、次のものがあります。

- セキュリティーのため、**root** の出荷時デフォルトのパスワードを変更します。
- サーバーをネットワーク用に構成します (DHCP が使用されていない場合)。123 ページの「Oracle Linux 構成ワークシート」を参照してください。
- 必要に応じて、インターネットアクセス用のプロキシを構成します。
- サーバーを登録および更新します。126 ページの「Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント」を参照してください。
- 目的のパッケージをインストールします。

7. 構成が完了したら、次のいずれかの方法を使用してコンソールセッションを終了します。

- Oracle ILOM Web インタフェースから、「Remote Console」ウィンドウを閉じてセッションを終了します。
- Oracle ILOM CLI から、Esc キーに続けて Shift+9 キーを押して、シリアルリダイレクトセッションを終了します。

8. Oracle ILOM からログアウトします。

参照 更新や登録を含む Oracle Linux OS の使用については、126 ページの「Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント」を参照してください。

Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント

Oracle Linux 6 オペレーティングシステムのドキュメントは、次の Oracle ドキュメントの Web サイトから入手できます。

http://docs.oracle.com/cd/E37670_01/index.html

インストール済みの Oracle VM ソフトウェアの構成

このセクションでは、Oracle VM ソフトウェアのインストール済みのバージョンを構成する方法について説明します。インストール済みの OS オプションを購入した場合は、OS を構成することによってインストールを完了します。インストール済みの OS イメージには、使用しているサーバーモデルに必要なすべてのドライバが含まれています。

注記 - サポートされる OS バージョンに関する最新情報については、『[Oracle Server X5-4 Product Notes](#)』を参照してください。

次の各セクションの手順を、一覧表示されている順序で実行します。

手順	タスク	リンク
1	Oracle VM ソフトウェアの要件を確認します。	127 ページの「インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件」
2	構成情報を収集します。	128 ページの「Oracle VM 構成ワークシート」
3	インストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成します。	129 ページの「インストール済みの Oracle VM Server の構成」
4	Oracle VM のドキュメントで、Oracle VM の登録、更新、および使用に関する情報を確認します。	132 ページの「Oracle VM のドキュメント」

インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件

システムにインストール済みの Oracle VM Server ソフトウェアを使用する場合は、それが Oracle VM インフラストラクチャーを管理するために使用する Oracle VM Manager のバージョンと互換性があることを確認する必要があります。必要に応じて、Oracle VM Server または Oracle VM Manager をアップグレードして、両方が同じバージョンになるようにします。

Oracle VM ソフトウェアのアップグレードについては、http://docs.oracle.com/cd/E50245_01/index.htmlにある『Oracle VM インストールおよびアップグレードガイド』を参照してください。

Oracle VM 構成ワークシート

次の情報を収集し、構成プロセスを開始するための準備を整えます。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報のみを収集する必要があります。

構成のための情報	説明または例	回答
Oracle VM Server の root アカウントのパスワード	root パスワードを選択します。文字および長さに制限はありません。	
Oracle VM エージェントのパスワード	Oracle VM エージェントのパスワードを選択します。パスワードは 6 文字以上である必要があります。	
ネットワークインタフェース	サーバーの管理に使用するインタフェース (eth#) を入力します。	
静的 IP アドレス	サーバーの IP アドレスを入力します。静的 IP アドレスは必須です。 例: 192.0.2.0	
ネットマスク	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0	
ゲートウェイ	サーバーがゲートウェイによってアクセスされる場合は、そのゲートウェイの IP アドレスを指定します。	
DNS サーバー	ドメインネームサーバー (DNS) の IP アドレスを指定します。必要な DNS は 1 つだけです。	
ホスト名	サーバーの完全修飾ドメイン名を指定します。 例: xxx.oracle.com	

▼ インストール済みの Oracle VM Server の構成

これらの手順では、サーバー上のインストール済みの Oracle VM Server を構成する方法についてのみ説明します。Oracle VM にはまた、仮想マシン環境をサポートするにはインストールして実行中にしておく必要がある Oracle VM Manager などの、その他のコンポーネントもあります。

1. **Oracle ILOM Web インタフェースまたは CLI にログインします。**
67 ページの「[Oracle ILOM への接続](#)」を参照してください。
2. 次のいずれかの方法を使用して、サーバーの電源を入れます。
 - **Oracle ILOM Web インタフェースから:**
 - a. ナビゲーションツリーから、「System Information」 > 「Summary」画面を選択します。
 - b. 「Summary」画面の「Actions」セクションで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI から、プロンプトから次のコマンドを入力します。**
-> `start /System`
入力を要求されたら、「y」と入力して確認します。
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
Starting /System
サーバーがブートプロセスを開始します。
3. **Oracle ILOM から、次のいずれかの方法を使用してホストコンソールを起動します。**
 - **Oracle ILOM Web インタフェースから、「Remote Control」 > 「Launch Remote Console」をクリックします。**
 - **Oracle ILOM CLI から、次のように入力します。**
->`start /HOST/console`
入力を要求されたら、「y」と入力して確認します。
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.

注記 - 「GRUB」メニューが表示されたら、5 秒以内に選択を行なってください。

サーバーがブートしたあと、「GRUB」メニューが表示されます (使用しているインストール済みのバージョンのメニューが下の例とは異なることがあります)。

```

GNU GRUB version 0.97 (612K lower / 2082932K upper memory)

+-----+
| Oracle VM Server-ovs (xen-4.1.3 2.6.39-300.32.6.el5uek) |
| Oracle VM Server-ovs serial console (xen-4.1.3 2.6.39-300.32.6.el5uek) |
+-----+

+-----+
| Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted. |
| Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the      |
| commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments |
| before booting, or 'c' for a command-line.                 |
+-----+

The highlighted entry will be booted automatically in 5 seconds.

```

4. 「GRUB」メニューから、次のいずれかを行います。

- Oracle ILOM リモートコンソールプラス (または直接ビデオポート接続) を使用している場合は、上/下矢印キーを使用して、「シリアルコンソール」を指定しないオプションを選択し、Enter キーを押します。
- Oracle ILOM CLI を使用している場合は、上/下矢印キーを使用してシリアルコンソールオプションを選択し、Enter キーを押します。

注記 - 選択を行わない場合は、デフォルトでシリアルコンソールオプションが選択され、システムはその出力をビデオポートではなく、シリアルポートに送信します。

注記 - 必要に応じて、「GRUB」メニューで「e」と入力してブート前にコマンドを編集するか、または「c」と入力してコマンド行を開始できます。

5. 入力を要求されたら、root パスワードと Oracle VM Agent パスワードを入力します。

例:

```

Starting OVM console server:          [ OK ]
Starting OVM ovmwatch services:      [ OK ]
Starting ovs-agent:                  [ OK ]
Starting ovs-agent services:         [ OK ]

Configuring Oracle VM...              [ OK ]

Enter new root password:
Confirm password:

Enter new Oracle VM Agent password:
Confirm password:

```

Configuring network.

注記 - root および Oracle VM Agent のパスワードの入力を求めるプロンプトは、Oracle VM Server を最初にブートしたときだけ表示されます。

6. プロンプトに従ってオンボードのネットワークインタフェースコントローラ (NIC) を選択し、ネットワークに関するほかの必須情報を構成および入力します。

This tool is used to select the NIC used by the OVM Manager.
You can exit at any time by pressing CTRL-C.

Here's the list of current available network interfaces.
eth0 eth1 eth2 eth3

Please select interface(s) to be used for OVM management.
These interfaces will be configured for redundancy.
eth1

7. すべての構成設定が正しい場合は、入力を要求されたら「Y」と入力し、Enter キーを押して設定を保存します。

すべての設定が入力されて保存されると、システムは Oracle VM Server コンソールセッションをロードします。例:

```
|Oracle VM Server 3.2.X Console [Alt-F2 for login console]
|-----|
|Local hostname      : lynxp-ovm.us.oracle.com
|Manager UUID       : 0004fb0000010000a060c639d1075957
|Hostname           : None
|Server IP          : None
|Server Pool        : None
|Clustered          : No
|Server Pool Virtual IP : None
|Cluster state      : Offline
|Master Server      : No
|Cluster type       : None
|Cluster storage    : None
|
|OVS Agent          : Running
|VMs running        : 0
|System memory      : 4087
|Free memory        : 2439
|Uptime             : 0 days, 4 hours, 33 minutes
|
```

これにより、インストール済みの Oracle VM Server の構成が完了します。

参照 更新や登録を含む Oracle VM の使用については、[132 ページの「Oracle VM のドキュメント」](#)を参照してください。

Oracle VM のドキュメント

Oracle VM の使用に関する詳細な情報については、次で入手可能な Oracle VM のドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

サーバーファームウェアおよびソフトウェアの入手

このセクションでは、サーバーファームウェアおよびソフトウェアにアクセスするためのオプションについて説明します。

説明	リンク
サーバーファームウェアとソフトウェアの更新について学びます。	133 ページの「ファームウェアとソフトウェアの更新」
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプションについて学びます。	134 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション」
使用可能なファームウェアとソフトウェアパッケージを確認します。	134 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」
Oracle System Assistant、My Oracle Support、または物理メディアのリクエストにより、ファームウェアおよびソフトウェアパッケージにアクセスします。	136 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセス」
ファームウェアとソフトウェアの更新をインストールします。	140 ページの「更新のインストール」

ファームウェアとソフトウェアの更新

サーバー用のハードウェアドライバやツールなどのファームウェアおよびソフトウェアは、定期的に更新されます。これらは、ソフトウェアリリースとして入手可能になります。ソフトウェアリリースは、サーバー用の使用可能なファームウェア、ハードウェアドライバ、ユーティリティをすべて含んだ一連のダウンロード (パッチ) です。これらはすべてまとめてテストされています。ダウンロードに含まれる ReadMe ドキュメントには、以前のソフトウェアリリースからの変更点および変更されていない点が説明されています。

サーバーのファームウェアとソフトウェアは、ソフトウェアリリースが入手可能になりしだい、更新してください。ソフトウェアリリースにはしばしばバグの修正が含まれるため、更新により、サーバーソフトウェアと、最新のサーバーファームウェアおよびほかのコンポーネントのファームウェアとソフトウェアとの互換性が保証されます。

ダウンロードパッケージ内の ReadMe ファイルには、ダウンロードパッケージ内の更新されたファイル、および現在のリリースで修正されたバグに関する情報が含まれます。プロダクトノートには、サポートされるサーバーソフトウェアのバージョンに関する情報も含まれます。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション

次のオプションのいずれかを使用して、使用するサーバー用の最新ファームウェアおよびソフトウェアセットを入手します。

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、出荷時にインストールされる Oracle サーバー用のオプションであり、サーバーのファームウェアおよびソフトウェアを簡単にダウンロードおよびインストールできるように支援します。
Oracle System Assistant の使用の詳細は、『[Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』 (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。
- **My Oracle Support** – すべてのシステムファームウェアおよびソフトウェアは、My Oracle Support Web サイトから入手できます。
My Oracle Support Web サイトで入手可能なものの詳細は、<https://support.oracle.com> を参照してください。
My Oracle Support からソフトウェアリリースをダウンロードする方法は、[136 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」](#) を参照してください。
- **物理メディアのリクエスト (PMR)** – My Oracle Support から入手できないいずれかのダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。
詳細は、[137 ページの「物理メディアのリクエスト」](#) を参照してください。

入手可能なソフトウェアリリースパッケージ

My Oracle Support では、ダウンロードは製品ファミリ、製品、およびバージョン別にグループ分けされています。バージョンには 1 つ以上のダウンロード (パッチ) が含まれます。

サーバーとブレードの場合、パターンは似ています。この製品はサーバーです。サーバーごとにリリースセットが含まれます。これらのリリースは、実際のソフトウェア製品リリースではなく、サーバーの更新リリースのことです。これらの更新はソフトウェアリリースと呼ばれ、まとめてテスト済みの複数のダウンロードで構成されます。各ダウンロードには、ファームウェア、ドライバ、またはユーティリティが含まれます。

次の表に示すように、My Oracle Support には、このサーバーファミリ向けの同じダウンロードタイプのセットが含まれます。これらも、物理メディアのリクエスト (PMR) を行なって依頼できます。Oracle System Assistant を使用しても、同じファームウェアおよびソフトウェアをダウンロードできます。

パッケージ名	説明	このパッケージをダウンロードするタイミング
Oracle Server X5-4 SW version – Firmware Pack	Oracle ILOM、BIOS、およびオプションカードファームウェアを含む、すべてのシステムファームウェア。	最新のファームウェアが必要なとき。
Oracle Server X5-4 SW version – OS Pack	OS Pack は、サポートされるオペレーティングシステムのバージョンごとに入手できます。各 OS Pack には、その OS バージョン用のすべてのツール、ドライバ、およびユーティリティのパッケージが含まれます。 ソフトウェアには、Oracle Hardware Management Pack および LSI MegaRAID ソフトウェアが含まれます。 Windows OS の場合、この OS Pack には Intel Network Teaming and Install Pack も含まれます。	OS 固有のドライバ、ツール、またはユーティリティを更新する必要があるとき。
Oracle Server X5-4 SW version – All Packs	Firmware Pack、すべての OS Pack、およびすべてのドキュメントを含みます。 このパックには、Oracle VTS や Oracle System Assistant イメージは含まれません。	システムファームウェアと OS 固有のソフトウェアの組み合わせを更新する必要があるとき。
Oracle Server X5-4 SW version – Diagnostics	Oracle VTS 診断イメージ。	Oracle VTS 診断イメージが必要なとき。
Oracle Server X5-4 SW version – Oracle System Assistant	Oracle System Assistant 回復および ISO アップデートイメージ。	Oracle System Assistant を手動で回復または更新する必要があるとき。

各ダウンロードは zip ファイルであり、ReadMe ファイルや、ファームウェアまたはソフトウェアファイルを含む一連のサブディレクトリが格納されています。ReadMe ファイルには、前回のソフトウェアリリース以降に変更されたコンポーネントおよび修正されたバグの詳細が記載されています。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセス

このセクションでは、ソフトウェアリリースファイルのダウンロードまたはリクエストの手順を説明します。

Oracle System Assistant を使用して、最新のソフトウェアリリースを簡単にダウンロードして使用できます。詳細は、『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)を参照してください。

更新されたファームウェアおよびソフトウェアを入手する方法は、ほかにも My Oracle Support を使用する方法と、物理メディアをリクエストする方法の2つがあります。次を参照してください。

- [136 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」](#)
- [137 ページの「物理メディアのリクエスト」](#)

▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード

1. 次の Web サイトに移動します: <https://support.oracle.com>。
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページ上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
「パッチと更新版」画面が表示されます。
4. 「検索」画面で、「製品またはファミリー (拡張)」をクリックします。
画面に検索フィールドが表示されます。
5. 「製品」フィールドで、ドロップダウンリストから製品を選択します。
または、製品名 (たとえば、Oracle Server X5-4) の全体または一部を、一致するものが表示されるまで入力します。
6. 「リリース」フィールドで、ドロップダウンリストからソフトウェアリリースを選択します。
7. 「検索」をクリックします。
ダウンロードできるパッチが一覧表示されます。

入手可能なダウンロードの説明については、[134 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」](#)を参照してください。

8. ダウンロードするパッチを選択するには、そのパッチをクリックします (Shift キーを使用すると、複数のパッチを選択できます)。

ポップアップアクションパネルが表示されます。ポップアップパネルには、「計画に追加」および「ダウンロード」オプションを含め、いくつかのアクションオプションがあります。「計画に追加」オプションの詳細は、関連するドロップダウンボタンをクリックして、「なぜ計画を使用するのですか。」を選択してください。

9. パッチをダウンロードするには、ポップアップアクションパネルの「ダウンロード」をクリックします。

「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスが表示されます。

10. 「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスで、パッチの zip ファイルをクリックします。

パッチファイルがダウンロードされます。

物理メディアのリクエスト

手続き上、Oracle Web サイトからダウンロードできない場合は、物理メディアのリクエスト (PMR) によって最新のソフトウェアリリースを入手できます。

物理メディアのリクエストを行うための大まかなタスクに従ってください。

- [137 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」](#)
- [138 ページの「物理メディアのリクエスト \(オンライン\)」](#)
- [139 ページの「物理メディアのリクエスト \(電話\)」](#)

物理メディアのリクエスト用の情報を収集する

物理メディアのリクエスト (PMR) を行うには、サーバーの保証またはサポート契約が必要です。

PMR を実行する前に、次の情報を収集します。

- 製品名、ソフトウェアリリースバージョン、および必要なパッチ。
 - [My Oracle Support](#) にアクセスできる場合 – [136 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」](#)の手順に従って、

最新のソフトウェアリリースを判断して、入手可能なダウンロード (パッチ) を表示してください。パッチのリストを表示したあと、ダウンロード手順を続行しない場合は「パッチ検索結果」ページからほかのページに移動できます。

- **My Oracle Support** にアクセスできない場合 – 134 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」にある情報を使用して、目的のパッケージを判断してから、最新のソフトウェアリリース用のこれらのパッケージをリクエストしてください。
- 出荷情報を手元に用意します。リクエストの際に、連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所を入力する必要があります。

関連項目

- 138 ページの「物理メディアのリクエスト (オンライン)」
- 139 ページの「物理メディアのリクエスト (電話)」

▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)

1. 次の Web サイトに移動します: <https://support.oracle.com>。
2. **My Oracle Support** にサインインします。
3. ページの右上隅にある「問合せ」リンクをクリックします。
4. 「リクエストの説明」セクションに、次の情報を入力します。
 - a. 「リクエスト・カテゴリ」ドロップダウンメニューで、次を選択します。
ソフトウェアおよび OS メディアリクエスト
 - b. 「リクエスト・サマリー」フィールドに、「Oracle Server X5-4 の最新ソフトウェアリリースの PMR」と入力します。
5. 「リクエスト詳細」セクションで、次の表に示されている質問に回答します。

質問	回答
物理ソフトウェアメディアの送付リクエストですか？	はい
どの製品ラインに関係するメディアのリクエストですか？	Sun 製品
パッチのダウンロードに必要なパスワードの確認ですか？	いいえ
CD/DVD でのパッチのリクエストですか？	はい

質問	回答
パッチを CD や DVD でご希望の場合、パッチの番号、OS とプラットフォームをお知らせください。	希望するソフトウェアリリースのダウンロードごとに、パッチ番号を入力してください。
物理メディア送付をリクエストしている製品の名前とバージョンをリストしてください。	製品名: Oracle Server X5-4 バージョン: 最新のソフトウェアリリース番号
リクエストするメディアの OS またはプラットフォームは何ですか？	OS 固有のダウンロードをリクエストする場合は、ここに OS を指定します。システムファームウェアのみをリクエストする場合は、「汎用」と入力します。
メディアに言語は必要ですか。	いいえ

6. 出荷先担当者の連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所の情報を入力します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. 「ファイルのアップロード」の「関連ファイル」画面で「次へ」をクリックします。情報を指定する必要はありません。
9. 「関連ナレッジ」画面で、リクエストに該当するナレッジ記事を確認します。
10. 「送信」をクリックします。

- 参照
- 137 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」
 - 139 ページの「物理メディアのリクエスト (電話)」

▼ 物理メディアのリクエスト (電話)

1. 次の Oracle Global Customer Support Contacts Directory にある該当する番号を使用して、Oracle サポートに電話をかけます。
<http://www.oracle.com/us/support/contact-068555.html>
2. Oracle Server X5-4 の物理メディアのリクエスト (PMR) を行いたい旨を Oracle サポートに伝えます。
 - My Oracle Support から特定のソフトウェアリリースおよびパッチ番号の情報にアクセスできる場合は、この情報をサポート担当者に伝えます。
 - ソフトウェアのリリース情報にアクセスできない場合は、Oracle Server X5-4 の最新のソフトウェアリリースをリクエストします。

- 参照
- 137 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」

- [138 ページの「物理メディアのリクエスト \(オンライン\)」](#)

更新のインストール

次のセクションでは、ファームウェアとソフトウェアの更新のインストールに関する情報を提供します。

- [140 ページの「ファームウェアのインストール」](#)
- [141 ページの「ハードウェアドライバと OS ツールのインストール」](#)

ファームウェアのインストール

更新されたファームウェアは、次のいずれかの方法でインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center** – Ops Center Enterprise Controller で最新のファームウェアを Oracle から自動的にダウンロードすることも、Enterprise Controller に手動でロードすることもできます。どちらの場合も、Ops Center でファームウェアを 1 つ以上のサーバー、ブレード、またはシャーシにインストールできます。
詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/applications/060286.html> を参照してください。
- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、最新のファームウェアを Oracle からダウンロードしてインストールできます。
詳細は、『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)を参照してください。
- **Oracle Hardware Management Pack** – Oracle Hardware Management Pack 内の fwupdate CLI ツールを使用して、システム内部のファームウェアを更新できます。
詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp> で Oracle Hardware Management Pack ドキュメントライブラリを参照してください。
- **Oracle ILOM** – Oracle ILOM および BIOS ファームウェアは、Oracle ILOM Web インタフェースまたはコマンド行インタフェースを使用して更新可能な唯一のファームウェアです。
詳細は、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> で Oracle Lights Out Manager (ILOM) ドキュメントライブラリのサポートされているバージョンのドキュメントを参照してください。

ハードウェアドライバと OS ツールのインストール

Oracle Hardware Management Pack などの、更新されたハードウェアドライバおよびオペレーティングシステム (OS) 関連のツールは、次のいずれかを使用してインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center**

詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/applications/060286.html> を参照してください。

- **Oracle System Assistant**

詳細は、『Oracle X5 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)を参照してください。

- JumpStart、KickStart、サードパーティーのツールなどの、**その他の配備メカニズム**。

詳細は、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

システム電源の制御

このセクションでは、システム電源を制御し、BIOS メッセージを表示する方法について説明します。次の表に示すトピックが含まれています。

説明	リンク
サーバーの電源を投入し、BIOS メッセージを表示します。	143 ページの「サーバーの電源投入」
エラーが発生したらサーバーの電源を切断します。	<ul style="list-style-type: none">■ 145 ページの「正常なシャットダウンのためのサーバーの電源切断」■ 149 ページの「即時シャットダウンのためのサーバーの電源切断」

サーバーの電源投入

サーバーに主電源を投入し、BIOS メッセージを表示するには、次のいずれかのセクションの手順を使用します。

- [143 ページの「電源ボタンを使用したサーバーの電源投入」](#)
- [144 ページの「Oracle ILOM CLI を使用したサーバーの電源投入」](#)
- [144 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用したサーバーの電源投入」](#)

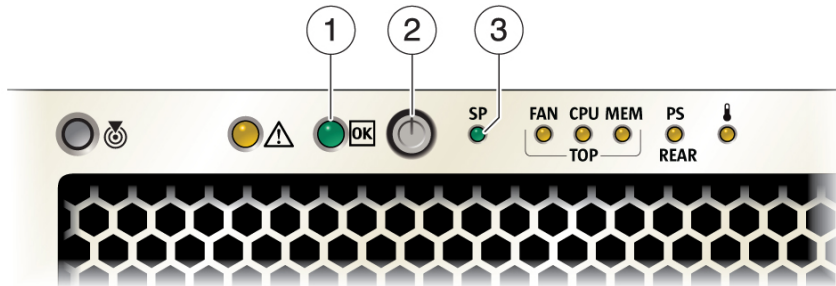
▼ 電源ボタンを使用したサーバーの電源投入

始める前に 主電源を投入する前に、電源コードが接続されていて、サーバーがスタンバイ電源モードになっている必要があります。[52 ページの「電源コードの接続」](#)を参照してください。

1. **サーバーがスタンバイ電源モードにあることを確認します。**

サーバーがスタンバイ電源モードにある場合は、フロントパネルの SP インジケータが点灯します。

次の図では、吹き出し 1 がサーバーのフロントパネルの OK インジケータを示し、吹き出し 2 が電源ボタンを示し、吹き出し 3 が SP インジケータを示しています。



2. 電源ボタンを押してから離します。

このボタンを 1 秒より長く押し続けしないでください。サーバーがブートプロセスに入ると、電源 OK インジケータが点滅します。

▼ Oracle ILOM CLI を使用したサーバーの電源投入

1. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) にログインします。

Oracle ILOM に、Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

2. CLI プロンプトから、次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
```

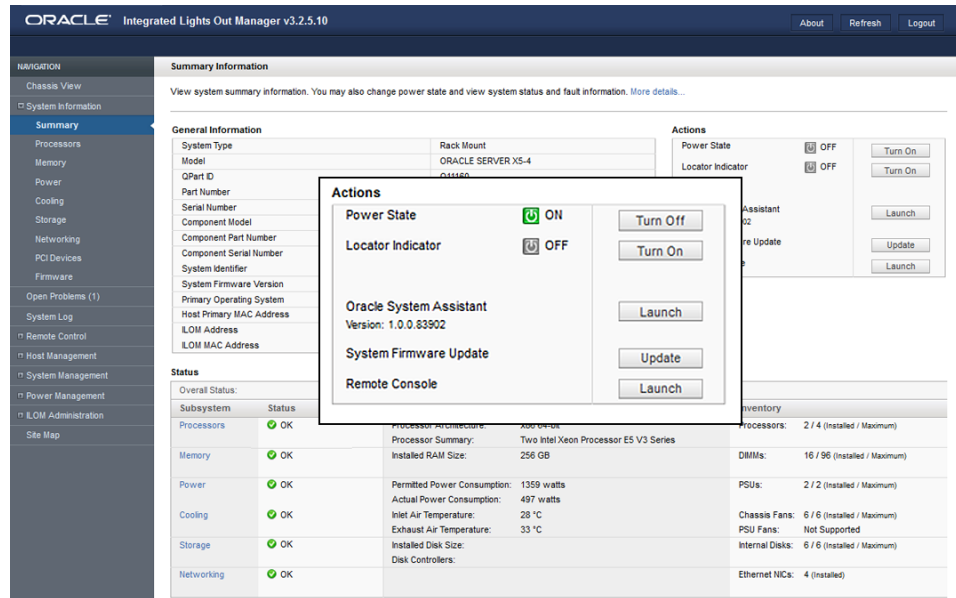
サーバーに全電力モードが適用されます。

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用したサーバーの電源投入

1. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。

Oracle ILOM Web インタフェースの「System Information」>「Summary」ページが表示されます。

2. 「Summary」画面の「Actions」セクションから、電源状態の「Turn On」ボタンをクリックします。



サーバーに主電源が投入されます。すぐに「Power State Off」インジケータが緑色で点灯し、「Turn On」ボタンが「Turn Off」ボタンに変わります。

正常なシャットダウンのためのサーバーの電源切断

サーバーの正常なシャットダウンを実行するには、次のいずれかのセクションの手順を使用します。これらの手順を実行すると、ACPI 対応のオペレーティングシステムは、オペレーティングシステムの正常なシャットダウンを実行します。

注記 - サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを引き抜く必要があります。

- [146 ページの「電源ボタンを使用した正常なシャットダウン」](#)
- [147 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した正常なシャットダウン」](#)
- [148 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常なシャットダウン」](#)

▼ 電源ボタンを使用した正常なシャットダウン

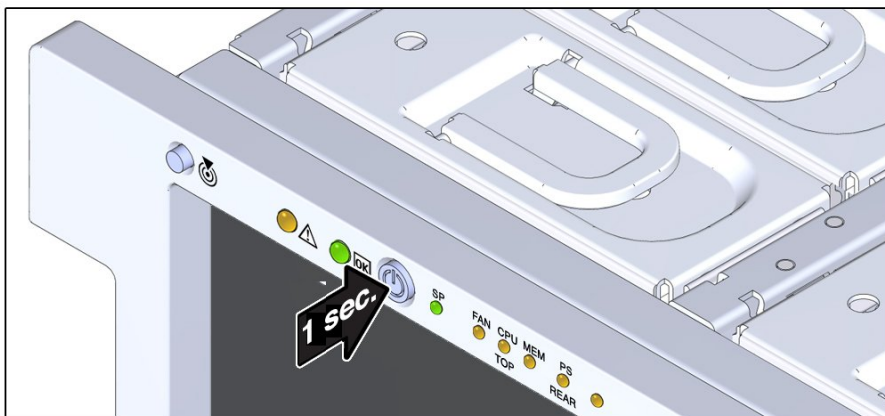
サーバーの正常なシャットダウンは、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。このシャットダウンプロセスでは、OS はユーザーに警告したり、ファイルシステムを正常に準備したりできます。

1. フロントパネルにある電源ボタンを押してすぐに離します。



注意 - データが失われます。電源ボタンを5秒より長く押し続けると、サーバーは、サーバーの即時シャットダウンを実行します。即時シャットダウンは、ファイルシステムを準備したり、ユーザーに警告したりすることなく、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。サーバーの正常なシャットダウンを実行するには、電源ボタンを押して1秒以内に離します。

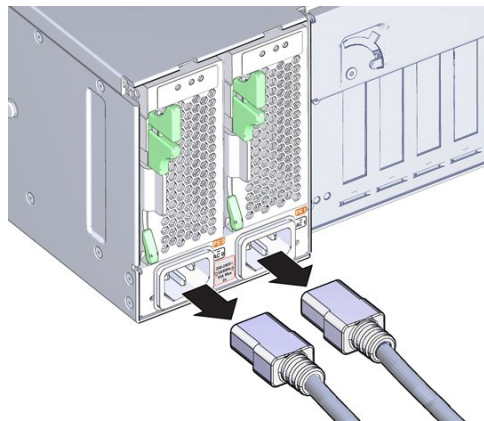
電源ボタンを押して離すと、ACPI (Advanced Configuration and Power Interface) 対応のオペレーティングシステムは正常なシャットダウンを実行します。ACPI 対応のオペレーティングシステムを実行していないサーバーは、即時にシャットダウンしてスタンバイ電源モードになります。



主電源が停止すると、システムはスタンバイモードになります。スタンバイ電源モードでは、OK インジケータが点滅します。

2. スタンバイ電源モードからサーバーの電源を完全に切断するには、電源ケーブルをサーバーから引き抜きます。

注記 - サーバーの電源を切ると、サーバーは電源が供給されていない状態になります。サーバーに電源が供給されていない場合は、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) にアクセスできません。



サーバーの電源が完全に切れます。

- 参照
- 26 ページの「フロントおよびバックパネルの機能」
 - 147 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した正常なシャットダウン」
 - 148 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常なシャットダウン」
 - 150 ページの「電源ボタンを使用した即時シャットダウン」

▼ Oracle ILOM CLI を使用した正常なシャットダウン

サーバーの正常なシャットダウンは、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。このシャットダウンプロセスでは、OS はユーザーに警告したり、ファイルシステムを正常に準備したりできます。

1. 管理者アカウントを使用して、**Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI)** にログインします。

Oracle ILOM に、Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

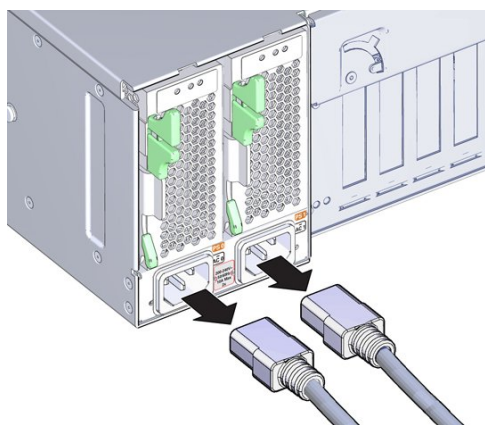
2. **CLI プロンプトから、次のコマンドを入力します。**

->**stop /System**

サーバーは、正常なシャットダウンを実行してスタンバイ電源モードになります。

3. スタンバイ電源モードからサーバーの電源を完全に切断するには、電源ケーブルをサーバーから引き抜きます。

注記 - サーバーの電源を切ると、サーバーは電源が供給されていない状態になります。サーバーに電源が供給されていない場合は、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) にアクセスできません。



- 参照
- [146 ページの「電源ボタンを使用した正常なシャットダウン」](#)
 - [148 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常なシャットダウン」](#)

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常なシャットダウン

サーバーの正常なシャットダウンは、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。このシャットダウンプロセスでは、OS はユーザーに警告したり、ファイルシステムを正常に準備したりできます。

1. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。

Oracle ILOM Web インタフェースの「System Information」 > 「Summary」 ページが表示されます。

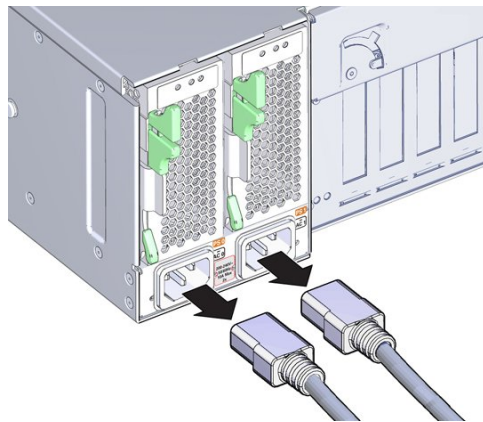
2. 左側のペインで、「Host Management」 > 「Power Control」 をクリックし、「Select Action」 リストボックスから「Graceful Shutdown and Power Off」 を選択します。

3. 「Save」 をクリックし、「OK」 をクリックします。

ホストサーバーは、正常なシャットダウンを実行してスタンバイ電源モードになります。

4. スタンバイ電源モードからサーバーの電源を完全に切断するには、電源ケーブルをサーバーから引き抜きます。

注記 - サーバーの電源を切ると、サーバーは電源が供給されていない状態になります。サーバーに電源が供給されていない場合は、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) にアクセスできません。



- 参照
- [146 ページの「電源ボタンを使用した正常なシャットダウン」](#)
 - [147 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した正常なシャットダウン」](#)

即時シャットダウンのためのサーバーの電源切断

即時シャットダウンを実行するには、次のいずれかのセクションの手順を使用します。



注意 - データが失われます。即時シャットダウンは、ファイルシステムを準備したり、ユーザーに警告したりすることなく、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。サーバー上の保存されていないデータはすべて失われます。

注記 - サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを引き抜く必要があります。

- 150 ページの「電源ボタンを使用した即時シャットダウン」
- 151 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した即時シャットダウン」
- 152 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時シャットダウン」

▼ 電源ボタンを使用した即時シャットダウン

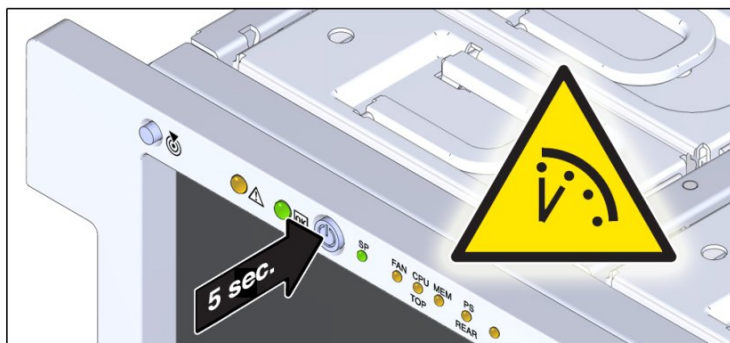
サーバーの即時シャットダウンは、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。このタイプのシャットダウンプロセスでは、OS はユーザーに警告したり、ファイルシステムを正常に準備したりできません。



注意 - データが失われます。即時シャットダウンは、ファイルシステムを準備したり、ユーザーに警告したりすることなく、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。サーバー上の保存されていないデータはすべて失われます。

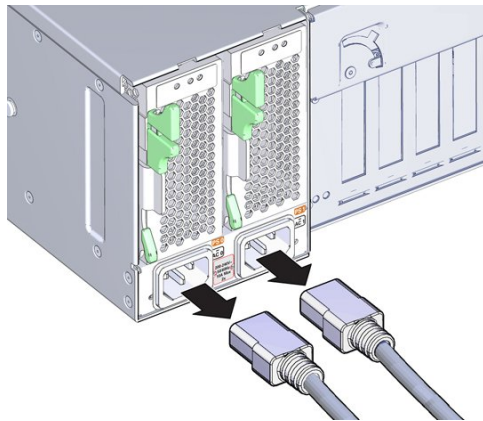
1. 主電源が切れるまで、電源ボタンを押し続けます。

電源ボタンを数秒間押し続ける必要があります。サーバーの電源が切れ、スタンバイ電源モードになります。スタンバイ電源モードでは、OK インジケータが点滅します。



2. スタンバイ電源モードからサーバーの電源を完全に切断するには、電源ケーブルをサーバーから引き抜きます。

注記 - サーバーの電源を切ると、サーバーは電源が供給されていない状態になります。サーバーに電源が供給されていない場合は、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) にアクセスできません。



- 参照
- [151 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した即時シャットダウン」](#)
 - [152 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時シャットダウン」](#)

▼ Oracle ILOM CLI を使用した即時シャットダウン

サーバーの即時シャットダウンは、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。このタイプのシャットダウンプロセスでは、OS はユーザーに警告したり、ファイルシステムを正常に準備したりできません。



注意 - データが失われます。即時シャットダウンは、ファイルシステムを準備したり、ユーザーに警告したりすることなく、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。サーバー上の保存されていないデータはすべて失われます。

1. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) にログインします。

Oracle ILOM に、Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

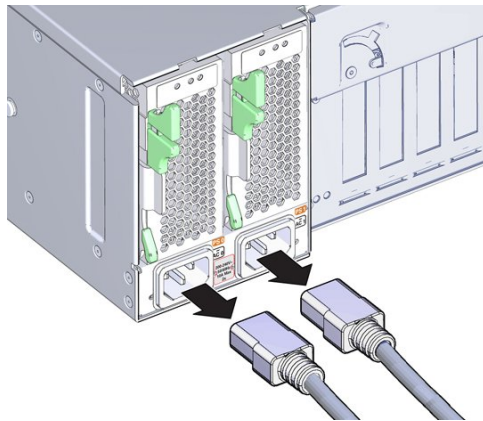
2. CLI プロンプトから、次のコマンドを入力します。

```
->stop -f /System
```

サーバーの電源が即座に切断され、スタンバイ電源モードになります。

3. スタンバイ電源モードからサーバーの電源を完全に切断するには、電源ケーブルをサーバーから引き抜きます。

注記 - サーバーの電源を切ると、サーバーは電源が供給されていない状態になります。サーバーに電源が供給されていない場合は、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) にアクセスできません。



- 参照
- [150 ページの「電源ボタンを使用した即時シャットダウン」](#)
 - [152 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時シャットダウン」](#)

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時シャットダウン

サーバーの即時シャットダウンは、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。このタイプのシャットダウンプロセスでは、OS はユーザーに警告したり、ファイルシステムを正常に準備したりできません。



注意 - データが失われます。即時シャットダウンは、ファイルシステムを準備したり、ユーザーに警告したりすることなく、サーバーの電源を切断してスタンバイ電源モードにします。サーバー上の保存されていないデータはすべて失われます。

1. 管理者アカウントを使用して、**Oracle ILOM Web インタフェース**にログインします。

Oracle ILOM Web インタフェースの「System Information」 > 「Summary」 ページが表示されます。

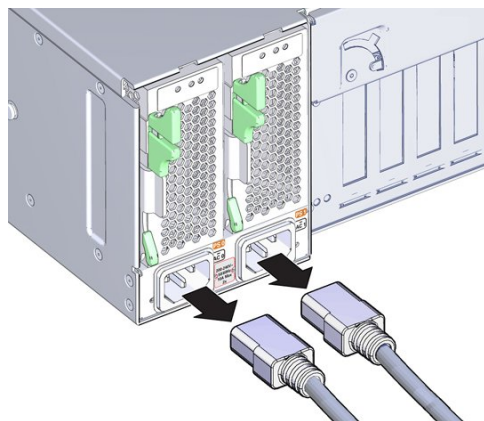
2. 左側のペインで、「Host Management」 > 「Power Control」 をクリックし、「Select Action」 リストボックスから「Immediate Power Off」 を選択します。

3. 「Save」 をクリックし、「OK」 をクリックします。

サーバーの電源が即座に切断され、スタンバイ電源モードになります。

4. スタンバイ電源モードからサーバーの電源を完全に切断するには、電源ケーブルをサーバーから引き抜きます。

注記 - サーバーの電源を切ると、サーバーは電源が供給されていない状態になります。サーバーに電源が供給されていない場合は、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) にアクセスできません。



- 参照
- [150 ページの「電源ボタンを使用した即時シャットダウン」](#)
 - [151 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した即時シャットダウン」](#)

設置の問題のトラブルシューティング

このセクションでは、サーバーでの設置の問題のトラブルシューティングに役立つ情報を提供します。

説明	リンク
トラブルシューティングおよび診断の参考情報について学習します。	155 ページの「トラブルシューティングおよび診断の参考」
サーバーの情報を記録してから保守部門に連絡します。	155 ページの「技術サポート情報ワークシート」
システムのシリアル番号の場所を確認してから保守部門に連絡します。	156 ページの「サーバーのシリアル番号の確認」

トラブルシューティングおよび診断の参考

トラブルシューティングおよび診断の参考:

- 『[Oracle Server X5-4 Service Manual](#)』は、問題のトラブルシューティングに関する製品固有の情報を提供します。
- 『[Oracle x86 サーバー診断ガイド](#)』 (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) は、Oracle x86 サーバーで使用可能なツールの多様性に関する情報を提供します。
- ナレッジ記事、ホワイトペーパー、製品アップデートは、Oracle サポートポータルから入手できます。

<https://support.oracle.com>

技術サポート情報ワークシート

トラブルシューティング情報を使用しても問題を解決できない場合は、次の表を使用して、サポート担当者に伝える必要がある情報を収集してください。

必要なシステム構成情報	お客様の情報
サービス契約番号	
システムモデル	
オペレーティングシステム	
システムのシリアル番号	
システムに接続されている周辺装置	
お客様の電子メールアドレスと電話番号、および代理の連絡先	
システムの設置場所の住所	
スーパーユーザーのパスワード	
問題の概要と、問題が発生したときに実行した操作内容	
IP アドレス	
サーバー名 (システムのホスト名)	
ネットワークまたはインターネットのドメイン名	
プロキシサーバー構成	

サーバーのシリアル番号の確認

システムの保守を依頼するときに、使用しているサーバーのシリアル番号が必要になることがあります。あとで使用するときのために、この番号を記録しておいてください。次のいずれかの方法を使用して、サーバーのシリアル番号を確認します。

- サーバーのフロントパネルで、ベゼルの左下を見てサーバーのシリアル番号を確認します。
- サーバーのパッケージに付属している黄色い Customer Information Sheet (CIS) を確認します。このシートにシリアル番号が記載されています。
- Oracle ILOM から次のようにします。
 - Web インタフェースを使用してログインし、「Summary」ページを表示します。
 - CLI を使用してログインし、次のコマンドを入力します。
show /SYS
- Oracle System Assistant から:
シリアル番号は「System Information」画面に表示されます。

サイト計画のチェックリスト

サイトでのサーバーの準備が整っていることを確認するには、このセクションに記載されているチェックリストに記入してください。

- [157 ページの「搬入経路およびデータセンタールームのチェックリスト」](#)
- [158 ページの「データセンター環境のチェックリスト」](#)
- [159 ページの「施設の電源のチェックリスト」](#)
- [159 ページの「ラックマウントのチェックリスト」](#)
- [161 ページの「安全性のチェックリスト」](#)
- [161 ページの「自動サービス・リクエストのチェックリスト」](#)
- [162 ページの「納入のチェックリスト」](#)

搬入経路およびデータセンタールームのチェックリスト

サーバーを設置する前に、次の施設チェックリストを確認してください。

データセンタールームのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
搬入経路に、梱包された装置を運搬するための空間があることを確認しましたか。				
すべてのドアと搬入経路が搬入のための幅と高さの要件を満たしていますか。開梱されたユニットの幅についてはどうですか。				
新しいハードウェアの移動パス上に傾斜、階段、または段差がありますか。				
搬入経路に衝撃の原因となる障害物がないことを確認しましたか。				
装置を上階に搬入する場合、搬入用エレベータは使用できますか。				
ラックの場所が割り当てられていますか。				
ラック内に新しいサーバーのための空きスペースがありますか。				

データセンター環境のチェックリスト

データセンタールームのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
フロアレイアウトは装置の保守アクセス要件を満たしていますか。				
サーバー保守のための十分なスペースがありますか。				
キャビネット安定化対策は考慮されていますか。				
ハードウェアの設置場所で規格外の長さのケーブルは必要ですか。				
床から天井までの高さが 2914 mm (9.6 フィート) 以上ありますか。				
上げ床の深さが 460 mm (18 インチ) 以上ありますか。				

データセンター環境のチェックリスト

サーバーがデータセンター環境の要件を満たしていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

データセンター環境のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
コンピュータールームの空調は温度および湿度の要件を満たしていますか。				
設置フロアレイアウトは通気要件を満たしていますか?				
あるラックからの排気が別のラックの吸気口から入らないように装置が配置されていますか。				
有孔床タイルごとに 400 CFM 以上の通気が確保されていますか。				
データセンターの空調設備によって前面から背面への十分な通気が確保されますか。				
局所的に高温にならないように十分な通気が確保されていますか。				
データセンターは環境の要件を継続して満たすことができますか。				
通気フロアタイルが追加で必要な場合に入手できますか。				

関連情報: [23 ページの「通気のガイドライン」](#)

施設の電源のチェックリスト

サーバーの設置先となるデータセンターに対する施設電源要件が満たされていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

施設の電源のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
このサーバーの必要な動作時の電圧および電流レベルを把握していますか。				
ラックごとに2メートル(6.5フィート)以内に十分な数の電源コンセントが用意されていますか。				
電源コンセントに適切な差し込み口が付いていますか。				
ラックにオプションのアースケーブルを接続しますか。				
装置の回路遮断器は、電圧および通電能力の点で適していますか。				
電力周波数は装置の仕様を満たしていますか。				
システム電源は2つの異なる電源グリッドから供給されますか。				
装置に電力を供給する無停電電源装置がありますか。				
新しいハードウェアの電力負荷に対応するための最低限必要な電源がありますか。電力負荷は、キロワット(kW)/キロボルト(kVA)で表します。				

関連情報: [21 ページの「サーバーの仕様およびガイドライン」](#)

ラックマウントのチェックリスト

サーバーをラックまたはキャビネット内に設置する前に、次のチェックリストに記入してください。

ラックマウントのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
前方取り付け面と後方取り付け面の距離が、最小値 610 mm と最大値 915 mm の間 (24 インチから 36 インチの間) になっていますか。				

ラックマウントのチェックリスト

ラックマウントのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
前方取り付け面の前の空間の奥行き (前面キャビネットドアまでの距離) が 25.4 mm (1 インチ) 以上ありますか。				
対象のラックが次の最小荷重を満たしていますか。 ■ 19 kg/ラックユニット ■ 合計 785 kg				
ラックは 4 ポストラック (前方と後方の両方でマウント) ですか。 2 ポストのラックとは互換性がありません。				
ラックの水平方向の開口部と装置の垂直距離が、ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 の標準に準拠していますか。				
ラックが RETMA レールをサポートしていますか。				
ラックが Oracle ケーブル管理アーム (CMA) をサポートしていますか。				
ラックが Oracle の通気孔付きソリッドファイラーパネルの設置に対応していますか。				
必要に応じて、ラック内にケーブルハーネスと配電盤 (PDU) のための十分なスペースがありますか。				
サーバーのシリアル番号が記載されたラベルを印刷し、対象のラックに貼ることができますか。				
ネットワーク装置からサーバーの設置場所までの必要なネットワークケーブルを配線しましたか。				
サーバーに接続するネットワークケーブルにラベルを付けましたか。				
ラックが、Oracle の標準 PDU の設置に対応していますか。 対応していない場合は、このチェックリストを終了してください。				
顧客は同等の PDU を用意できますか。				
顧客は、1 つの PDU が故障した場合に電源要件をサポートする単一の PDU とその回路を用意できますか。				
顧客は、単一 PDU のすべての回路に電力負荷が均等に割り振られることを保証できますか。				
顧客は、PDU のための適切な電力ドロップを提供できますか。				

関連情報:

- [21 ページの「サーバーの仕様およびガイドライン」](#)

安全性のチェックリスト

サーバーの設置先となるデータセンターに対する安全性要件が満たされていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

安全性のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
緊急時の電源オフ機能はありますか。				
データセンタールームに防火システムがありますか。				
コンピュータールームに適切な消火設備が整っていますか。				
静電気防止フロアが設置されていますか。				
上げ床の下に床に障害物や妨害物はありませんか。				

関連情報:

- [21 ページの「サーバーの仕様およびガイドライン」](#)
- [Oracle Server X5-8 安全およびコンプライアンスに関するガイド](#)

自動サービス・リクエストのチェックリスト

サーバーで Auto Service Request を使用する場合は、次のチェックリストに記入してください。

自動サービス・リクエストのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
自動サービス・リクエストに登録するための My Oracle Support オンライン・アカウントを持っていますか。				
My Oracle Support のカスタマ・サポート ID (CSI) 番号を持っていますか。				

納入のチェックリスト

自動サービス・リクエストのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
Auto Service Request Manager を含むサーバーのホスト名と IP アドレスがわかりますか。				
システムにプロキシサーバーは必要ですか。必要な場合は、プロキシサーバーのホスト名と IP アドレスを記入してください。				
自動サービス・リクエストの技術担当者の情報を登録しましたか。この情報には、担当者の氏名と電子メールアドレスを含めてください。				

納入のチェックリスト

サーバーの設置先となるデータセンターに対する納入要件が満たされていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

納入のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
データセンター担当者の連絡先情報はありますか。				
データセンターのためのセキュリティーまたはアクセス制御はありますか。				
ベンダーの担当者がデータセンターに入室する際に身元確認や入室許可は必要ですか。必要な場合、どのような機関による証明を受ければよいですか。				
身元確認は何日前までに済ませる必要がありますか。				
セキュリティーや入室に関して、ほかに注意することはありますか。				
設置担当者のコンピュータールームへの入室は許可されていますか。				
データセンターではノートパソコン、携帯電話、カメラの使用が許可されていますか。				
建物には搬入口がありますか。				
配達、開梱、準備のための場所がありますか。				
配達場所は建物内部ですか。				
納入場所が建物内部でない場合、設置場所で梱包を解くことができますか。				

納入のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
開梱、準備のための場所は雨風から保護されていますか。				
建物に十分な搬入場所がありますか。				
各種のハードウェアコンポーネントが熱衝撃を受けないように開梱場所の室温が管理されていますか。				
ハードウェアの設置に十分な運搬要員が確保できますか。				
梱包を解く作業とごみの片付けについては手配済みですか。				
納入やごみ撤去に関する制限がありますか。				
配達用トラックの長さ、幅、高さに制限がありますか。				
コンピュータールームへの段ボールなどの梱包材の持ち込みは可能ですか。				
搬入口へのアクセス時間に制約はありますか。ある場合、時間的制約を指定してください。				
装置を搬入口に降ろす際に、運搬車両にテールリフトは必要ですか。				
コンピュータールームに装置を配置するために、次のものは必要ですか。 階段運搬車 リフター 傾斜台 鋼板 床材				
フロア保護キャスター、台車、パレットジャッキ、フォークリフトなど、配達業者が用意する必要がある特殊な機材はありますか。				

関連情報:

- [21 ページの「サーバーの仕様およびガイドライン」](#)
- [21 ページの「サーバーの設置の準備」](#)

索引

あ

- インジケータ
 - バックパネル (設置ガイド), 27
 - フロントパネル (設置ガイド), 26
- インストール済みの OS イメージの RAID の制限, 93
- インストール済みの OS オプション
 - Oracle Linux, 123
 - Oracle Solaris, 117
 - Oracle VM, 127
- オプションのコンポーネント, 25
- オペレーティングシステム
 - インストール済みのイメージの構成
 - Oracle Linux, 123
 - Oracle Solaris, 117
 - Oracle VM, 127

か

- 概要
 - OS インストール, 91
 - サーバー, 15
 - サーバー管理, 59
 - サーバーの設置, 21
 - ドライブ構成, 93
- 環境仕様
 - 設置ガイド, 22
- ケーブル管理アーム (CMA)
 - 動作の確認 (設置ガイド), 49
 - 取り付け (設置ガイド), 44
- 工具および装置
 - サーバーの設置に必要な, 25
- 更新
 - インストールする, 140
 - ファームウェアとソフトウェアの入手, 133

- コンポーネント
 - オプション, 25

さ

- サーバー管理
 - Oracle Hardware Management Pack, 63
 - Oracle ILOM, 59
 - Oracle System Assistant, 61
 - 単一サーバー, 59
 - 複数のサーバー, 65
- サーバーの電源切断
 - orderly シャットダウン, 145
- サーバーの電源投入
 - 方法, 143
 - メッセージの表示, 143
- サイト計画のチェックリスト, 157
 - 安全性, 161
 - 施設の電源, 159
 - 自動サービス・リクエスト, 161
 - データセンター環境, 158
 - 納入, 162
 - 搬入経路とデータセンタールーム, 157
 - ラックマウント, 159
- システムステータスインジケータ
 - バックパネル, 27
 - フロントパネル, 26
- システムの機能, 15
- 静電放電 (ESD), 26
- 出荷用梱包箱の中身, 24
- 準備
 - ストレージドライブ
 - BIOS ユーティリティの使用, 104
 - Oracle System Assistant, 95

仕様

- 環境
 - 設置ガイド, 22
- システムがサポートする機能のリスト, 15
- 電気
 - 設置ガイド, 22
- 物理, 159, 160
 - 設置ガイド, 17
- シリアル接続
 - Oracle ILOM へのログイン, 68
- シリアルヌルモデムケーブル
 - 接続, 51
- スタンバイ電源モード, 54
- ストレージドライブ
 - OS インストールの準備, 93
 - RAID 構成オプション, 93
- 準備
 - BIOS ユーティリティの使用, 104
 - Oracle System Assistant, 95
- スライドレール
 - 構成部品, 38
 - 動作の確認 (設置ガイド), 49
- 静電気防止用リストストラップ, 26
- 設置タスクの概要, 19
- ソフトウェア
 - 更新をインストールする, 140
 - 最新の入手, 133
 - 物理メディアの入手, 137
- ソフトウェアリリースパッケージ
 - My Oracle Support を使用したダウンロード, 136
 - Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用したダウンロード, 140
 - Oracle System Assistant を使用したダウンロード, 140

た

- チェックリスト、サイト計画, 157
- 注意事項, 26
- 電気仕様
 - 設置ガイド, 22
- 電源コネクタ, 27
- 電源装置故障インジケータ
 - バックパネル, 27
 - フロントパネル, 26

電源装置 OK インジケータ

- バックパネル, 27
- 電源入力コネクタ
 - 接続, 51
- 電源モード
 - スタンバイ, 54
- 電源 OK インジケータ
 - フロントパネル, 26
- 転倒防止バー, 41

は

- バックパネル
 - システムインジケータ、接続とコンポーネント, 27
- ビデオポート
 - 接続, 51
 - バックパネル, 27
 - フロントパネル, 26
- ファームウェア
 - 更新をインストールする, 140
 - 最新の入手, 133
 - ブートディスク, 93
- 物理仕様, 159, 160
 - 設置ガイド, 17
- フロントパネル
 - コントロール
 - 場所, 52
 - システムインジケータ、接続とコンポーネント, 26
- ボリュームの作成
 - BIOS ユーティリティの使用, 104
 - Oracle System Assistant, 95

ら

- ラックの安全のための注意事項, 35
- ラックマウント
 - CMA スライドレールコネクタ, 46
 - キット, 35
 - ケーブルの取り付け, 47
 - ケーブルフックとループストラップ, 47
 - 固定部品の取り付け, 37
 - シャーシ位置決め用ピン, 37

スライドレール構成部品, 38
スライドレールストップの解放, 49
転倒防止バー, 41
取り付け穴, 38
ラックの互換性, 36
レール構成部品, 35
ロケータインジケータ, 26

A

AC OK インジケータ
バックパネル, 27

B

BIOS
ブートモード (レガシーまたは UEFI)
設定, 63

C

CLI、Oracle ILOM
サーバー管理, 59

E

Ethernet 接続
Oracle ILOM へのログイン, 68
Ethernet ポート
接続, 51
バックパネル, 27

L

LED 参照 インジケータ

M

My Oracle Support、ソフトウェアリリースパッ
ケージのダウンロードのための使用, 136

N

NET MGT ポート
接続, 51
バックパネル, 27

O

Oracle Hardware Management Pack
サーバー管理, 63
Oracle ILOM
Oracle System Assistant の起動, 81
サーバー管理, 59
初期設定と構成, 67
接続, 67
デフォルトのユーザー名とパスワード, 68, 68
Oracle Linux
インストール済みのイメージの構成, 123
Oracle Solaris OS
インストール済みのイメージの構成, 117
Oracle System Assistant
Oracle ILOM を使用した起動, 81
説明, 61
ローカルでの起動, 86
Oracle VM
インストール済みのイメージの構成, 127

P

PCIe スロット
バックパネル, 27

R

RAID 構成, 93

S

SER MGT ポート
接続, 51
バックパネル, 27
SP OK インジケータ
フロントパネル, 26

U

UEFI (Unified Extensible Firmware Interface) BIOS

サーバー管理, 63

USB ポート

接続, 51

バックパネル (設置ガイド), 27

フロントパネル (設置ガイド), 26

W

Web インタフェース、Oracle ILOM

サーバー管理, 59